
魔法少女リリカルなのは StrikerS 次元世界の管理人

音羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S 次元世界の管理人

【Nコード】

N 4 2 1 5 Q

【作者名】

音羽

【あらすじ】

混沌より生れし彼は、世界を見守り続けている。：リリカルなのはをベースに、俗に言う脇役を物語の中心に添えたストーリー。原作ブレイクは基本なし。物語はStrikerSの後から本格的に始まります。ただ、作者の記憶違いはご勘弁を。。。とりあえず、完結目標かな。（原作を壊したくない人、更新遅いと嫌な人、堅苦しい作品が苦手な人はご注意ください。。。）

序章

それは、大いなる罪と罰を背負い続ける者。

ミッドチルダよりも、ベルカよりも古い時代から生き続け、無限の命と知識を持つて世界をすべる者。

歴史の合間にひっそりと現れる彼の事を、いつしか人々はこう呼んだ。

『次元世界の管理人』と。

始まりはいつだったか？

私は世界の始まりたる混沌の中から生まれ落ちた。

所詮不完全な存在たる私は、明確な形も命の時間も定められぬままこの世に産み落とされた。

そして、次元の壁を超えることも、世界に現れる事も無く次元世界を漂流し続けた私は、ある時一つの世界と出会う。

無限の時間と空間の中で最初に行きつき、私に知識と経験を与えてくれた世界。

神秘と幻想の都『アルハザード』

しかし、それさえも幻。

いつか消え去る定め。

私がその世界に現れていたいどれほどの時間が流れたのだろうか？

それは、唐突だった。

とある科学者の生み出した世界のもう一つを構成する空間。『虚数空間』

それにより、超巨大文明たるアルハザードは終わりを告げた。

実にあっけない幕引きだった。

そして、次元世界に私は投げだされる。

「あれが無ければ」

「あれさえなければ」

「私達はもっと生きられたのに」

そう聞こえた言葉は、幻だろうか？

ふと、出会った人々の顔が浮かぶ。

そして、迎えた最初の別れ。

それは、私に一つの使命を与えた。

いや、世界を司る混沌ではなく、世界に存在した人々から与えられたそれは、もしかしたら私が望んだ事かもしれない。

世界を守る事。

世界を育てる事。

その世界を滅ぼす全ての害悪から、世界を守ろう。

たとえば、それが偽善であったとしても。

そして、時は流れた。

今は無き古代の都『ベルカ』

発展と悪意の象徴たる、聖なる王の司る世界。

いや、その聖なる王がおさめたのは、ベルカという世界の最後の短期間でしかない。

科学と魔法。

物質と魔術を組み合わせで発展した、アルハザードの後継。

しかし、その世界も終わりを告げた。

腐りきった聖王に統治された世界は、瞬く間に人々を不幸にし、一つの兵器を作り出す。

無限の魔力の根源たる宝石。

ジュエルシードやレリックなど、多くの物質を生み出したベルカの歴史の中で、唯一の成功作。

そして、その力によって他の世界まで侵攻しようとしたかの世界は、私の手で葬り去った。

その文明の象徴たる無限の魔力の開放。

大規模次元震によって。

世界を虚数空間で囲み、逃げ場をなくしての一撃。

それは、実にあっけない2度目の幕引きだった。

もう、繰り返させない。

それが、今の私の望み。

世界が悪しき道を行くなら、それを食い止めよう。

危険があるならその原因を滅ぼそう。

1つの世界を捨て、多くの世界を守る。

それだけでは足りない。

全ての世界を滅びから救う。

世界の根源たる混沌から、私の生きてきた時間のほぼ全てをかけて
切り取り、生み出した2つの神器。

2つの世界に終焉をもたらした技術の結晶。

大いなる魔力の石『レリックピース』

虚無と滅びの石『ダークマター』

追憶と歴史の書『グリモワール』

滅びを予言する鏡『オーバーレイ』

そして、これまでの文明の残した幾多の知識の結晶と、混沌より存在する私の力によって。

第1話：命の欠片と見守る者

只一つの太陽輝く広がる蒼く済んだ空の下、私はとある管理世界にいた。

と言っても、まだ訪れたばかりだがね。

ロストロギアの反応を感知してきてみれば、どうやら魔法文明ではない普通の世界のようだ。

しかし、直接確認したところ、あまり危険だとは思えない。

それに、管理局もすでに関与しているみたいだし、この程度なら管理局に任せればいい。

そう思い立ち去ろうとすると、すでに事件が終盤に入っただらしく、突如展開された封鎖結界により閉じ込められてしまった。

管理局が張ったものだろう。

抜け出せない事もないが、気づかれずに済む自信は無い。

しょうがないので見守る事にした私は、近くのビルの屋上に人知れ

ず腰を下ろした。

遠くのビルの上で黒い翼をはやした女性が片手を上げる。

すると、その下になりの魔力が集まっていく。

広域魔力収集魔法。

少々嫌な思い出がある魔法だけに、一瞬顔をしかめるが、すぐにまた目線を戻す。

すると、女性は集めた魔力をそのまま射出した。

『スターライトブレイカー』

並の魔術師ならただでは済まない一撃が放たれる。

そして、それは私とはほぼ垂直の… 海の方に放たれた。

「うん」

魔力反応を感じない人影が2つほどあるが、魔術師の二人が前に展開した障壁ならギリギリ耐えられるだろう。

そう思い見守っていると、砲撃魔法の直撃を食らってもほぼ無傷の少女らがあらわれた。

どうやら防ぎきったようだ。

そして、攻撃を受けていた魔術師の一人が黒い女性に突っ込んでいく。

「っと、あれは拘束魔法？」

黒い女性が前に展開した盾。

それに向かって攻撃を繰り出した魔術師は、そのまま魔法に取り込まれてしまった。

「ちょっと、様子だけ見ておくかな。」

基本不干涉でいくつもりだったが、さすがに目の前で死なれるのは目覚めが悪い。

そう思い、誰にも気づかれないように魔力以外の回路から接続を試みる。

かつて、人が愛を分かちう会ったために生み出した秘術。

『心伝』

それを、先ほどとらわれた魔術師につないでみた。

「ふむ、夢か。」

拘束された肉体はどうやら先ほどの黒い女性が作った空間に閉じ込められていた。

そして、そこで繰り広げられるのは暖かな暮らし。

どうやら時間軸がずれているらしく、外より明らかに速く時間が進む。

しかし、内部の人は気づかない。

いや、気づけない。

内部にいる人々にとっては、その時間こそが全てだから。

「…あれは」

そこにいたのは先ほどの魔術師と、夢から作られた人形たち。

現実とは別の。夢幻の存在。

リニス、アリシア、プレシア、アルフ

それは、ロストロギアの作り出した仮初の存在。

…のはずだが。

「魂がある？ …それに、あの子供は…」

しばらく見つめていると、別の部屋に移動するようなので、ついていくことにした。

そして、数日。

取り込まれた魔術師は取り込まれる前の事を覚えているらしく、外と連絡をとろうと四苦八苦している。

しかし、ここは少女の願望が形になった世界。

抜け出すのに迷いがあるのか、結果は芳しくなかった。

現在はアリシアという少女と草原に寝転んで本を読んでいる。

しかし、魔術師は木にもたれかかって心ここにあらずという感じだった。
フヘイトとていひついで

コロコロ...

「あれ…、雨になりそうだね。」

と、突然今まで晴れていたのが嘘のように空を雨雲が覆い出す。

「フェイト、帰ろ。」

フェイトってば!」

「ごめん、アリシア。私はもう少しここにいる。」

「そうなの？」

「じゃあ、私も。」

一緒に、あまやどり」

そう言つて、アリシアは無邪気な笑顔でフェイトの横に座った。

そして流れる無言の時間。

降り止まぬ雨だけが、世界の音を支配する。

一瞬の通り雨のはずだった。

しかし、雨脚はどんどん強くなっていき、まるで楽しかった時間の終わりを告げるように、空はどんよりとした雲をたたえている。

「ねえ、アリシア。これは夢なんだよね？」

「…」

「私とあなたは同じ世界にはいない。あなたが生きてたら、私は生まれなかった。」

「そう…だね。」

「母さんも、私にはあんなに優しくは…」

「優しい人だったんだよ。」

優しかったから壊れたんだ。

死んじゃった私を生き返らせるために。」

「…うん」

「ねえ、フエイト。
夢でもいいじゃない。」

ここにいよ。

ずっと一緒に。

わたし、ここでも生きていられる。

フェイトのお姉さんでいられる。

母さんと、アルフと、リニスとみんなと一緒にいられるんだよ。

フェイトが欲しかった幸せ、みんなあげるよ。」

(でも…)

「……ごめんね、アリシア。」

「ただ、私は行かなくちゃ。」

「……うん」

流れる一瞬の静寂。

一つの優しい物語の終わり^{ゆめ}。

その最後を告げるように、アリシアは片方の手を差し出した。

その手に握られていたのは、黄色いデバイス。

おそらく、あの魔術師のものだろう。

そして、それを受け取るフェイト。

「ありがとう。……ごめんね、アリシア。」

「いいよ。私はフェイトのおねいさんだもん。」

「……待ってるんですよ。優しく強い子たちが。」

「うん。」

「じゃあ、行ってらっしゃい、フェイト。」

「…うん。」

「…現実でも、こんな風にいたかったな。」

そしてアリシアと呼ばれた少女は光となって消える。

ゆっくりと立ち登る光は、とても美しい輝きを放っていた。

「…行ったか。」

フェイトが立ち去って数刻。

もう、この世界に残された時間はさほどないだろう。

フェイトが夢から目覚めようとするのに合わせ、地平の果てから世界を構成する光が黒い闇に染まっていく。

そして、かすかに残った光の粒。

それは、有るべきだった命の欠片。

放っておけばそのうち世界とともに消え去るであろう欠片。

そして、この世界を構成する二人目の夢の主人公。

「アリシアと言ったか…」

命の欠片はフェイトとの分かれを惜しむかのように一際強く輝くと、その姿を薄め…

「何か関係するかもしれん、その命、一時私が預かるう。」

うつすらと輝きを残して散ろうとした欠片を集め、一片の花に変える。

それは、命の拠所。

この世界に來た時に感じた2つ目の命をそこに宿すと、私は崩壊する世界から抜け出した。

時を同じくして、今までいた世界が引き裂かれる。

黄色い閃光、桃色の閃光、そして、白い希望の輝きによって…。

第2話：孤独な男の秘密基地

そこからは案外すぐに片付いた。

闇の書の内部空間にいる間に戦場は海の上に移動していたらしく、そこに現れたロストロギア、闇の書の闇。

しかし、魔術師たちの一斉攻撃と、宇宙空間への転送。

そして、アルカンシエルの直撃を受けて、闇の書の闇は消え去った。

さらに数日後。

私はまだこの世界にいた。

ロストロギア、闇の書。

闇の書の闇と呼ばれたその部分は消え去ったが、まだ終わってはいない。

そのロストロギアが再び活性化する可能性があったからだ。

だが、それも憂鬱に終わったようだ。

魔術師たちにより管理人格もろとも本プログラムが破壊される。

泣き叫ぶ少女の乱入があつたが、無事に処理も終わって、ここに闇の書は完全に消え去った。

そして、私はそれを見届けると、自分のあるべき世界へ帰って行った。

一つの十字架、災厄の刻印が大地に戻ったのには気づかずに…。

所変わって、地球のある場所。

そこに一人の少女がいた。

その名を月村すずか。

俗に言う平凡な小学3年生…である。

「すずか、今日も図書館？」

「うん、アリサちゃん。」

「はあ、ほんと毎日本読んでて良く飽きないわね。私ならすぐに…
『あゝが！もー！』ってなるわよ。」

「うん、本は好きだから。」

「まあ、良いけどね。じゃあ、私は先に帰ってるわよ。」

「うん。また明日ね、アリサちゃん。」

「またね」

と、友達と別れて歩き出します。

でも、今日はちょっと嘘。

私が今日向かうのは、秘密の場所です。

だれにも見つからないように注意して、こっそり裏路地に入る。

そして、何本か曲がって誰もいないのを確認すると、私は影の中に潜りました。

そして、出たのがここ。

世界から切り離された、別の世界。

通称、異回廊。

暗い部屋の中に無数の星が瞬き、それがはるか遠くに…そして、
近くに感じる場所。

その一つ一つが世界 … 空間を表している、いわば次元世界の総合
管理所。

そして、私はその光の一つに近づくと、そのまま通り過ぎます。

目指しているのはその世界の裏に隠された秘密の道。

そして、そこを通って別の部屋に來ると、その中に唯一光る光の中
に私は入りました。

そして、出た先が機械のいっばい置かれた部屋。

それがいったい何のためにあり、何をしているのか、私は知りません。

それに、ここがどこにあるのかも。

異回廊を通つてのみ来ることのできる空間。

そして、私は壁にある一つのドアを開けると、廊下らしきところをひたすら進みます。

そして、一つの部屋の前まで来ると、軽く叩きました。

「すずか君かい？」

「はい。」

「入ってくれて構わないよ。」

「失礼します」

そう言つてドアをけると、中には先ほどよりも多くの機械が置かれ、部屋の中には大きなカプセルが置かれていました。カプセルは緑色の液体に満たされ、金色の髪の少女が浮かんでいます。

私は一瞬いぶかしげな顔をしましたが、すぐに戻しました。

「先生、これは何ですか？」

「次元漂流物の一つだよ。つい最近流れ着いたんだ。」

そう言つて、軽くカプセルをなでると、私が先生と呼んだ人は端末をいじりだしました。

「これはね、人間の肉体に他生物のリンカーコアを入れて純化させたものさ。もつとも、私から言えば只の人形だがね。」

そう言っている間も、先生は手を動かして何かをしているようです。

先ほどまでは気がつかなかったけど、その傍らには白いきれいな花が一輪花瓶に活けてありました。

普段はそういうものを機械のある部屋へ持ち込むのを嫌っているのに、今日はどうしたんでしょうか？

「もうすぐ終わるから、ちょっと待っていてくれないか？」

「はい、今日は時間があるんで、ゆっくりでいいですよ。」

近くにあったソファーに腰を下ろし、先生の後ろ姿と『人形』を私はしばらく眺めていました。

「よし、これで良いだろう。」

そう言って先生は動かしていた手を休め、機械から離れます。

先生の退いた先にあつたのは、魔法の構成式のようなものでした。

正確には、魔法を構成する根源言語を解読、記号化したもので、全ての魔法の根源ともいわれるものだったかな？

所々に赤や青、緑に変換された文字が使われ、スクロール出来るようになっていことからまだあると思われるその文章をぼんやり眺めていると、先生は今度はカプセルから少女を取り出しました。

「すずか君、ちょっとこの子を支えていてくれないか？」

「あ、はい。」

慌てて近くにあったバスタオルで少女を包むと、先生から少女を受け取りました。

人形とは思えないほどしっかりと出来ています。

「先生、この子をどうするんですか？」

「ああ、ちょっとその体の持ち主の魂を見つけてね。今から蘇生してみようかと…。」

「え、そんなことできるんですか？」

「私を誰だと思ってる？ これでも現存する全ての魔法知識は網羅しているつもりだよ。」

「…すみません。」

「…いや、謝らなくても良いんだがね。」

そう言って苦笑いをする先生。
でも、実際凄いなと思うのは私だけでしょうか？

そして、先生が次に持ち出したのは先ほどの白い花。

なんでも、この花は魂を一時的に宿らせる寄り代になっているんだとか。

そして、その花から白い光を取り出すと、それを少女にそっと近づけました。

白い光の欠片。

それは魂の欠片。

傷つき、痛み、それでもなお未練を忘れられずに現生にとどまり続けた魂。

そして、その輝きは最後に本望を遂げたのでしょうか？

純粋な白い輝きは、少女の体に吸い込まれるように消えていくと、そこに新たな身体を手に入れたようです。

小さな、まるで生きているかのような少女の人形。それが、ゆっくりと息をし、命をはぐくみだしたのは、そのすぐ後でした。

「この子はどうするんですか？」

「うん、蘇生したは良いが、まだこういう子なのかいまいちわからないからね。

つい最近捕まえた魂だし、そんなに古い時代の子というわけでもなさそうだから、事情を聴いて考えようと思ってるよ。」

「ちゃんと面倒は見てあげてくださいよ？」

「作った命には責任を持つさ。」

そんなに私が信用できないかい？」

「いえ、そんなことは無いです！」

「なら、心配しないで。」

さて、その子を寝かせたら今日の勉強をやるうか。

どうせ魂が定着するまでは起きないだろうから。」

「はい。いつもの部屋で良いですか？」

「うん。先に行ってるから、頼むよ。」

「はい！」

先生が部屋から出たのに続いて、私も部屋から出ました。

そして、少女を空いてる部屋に寝かせると、急いで目的の場所に向かいます。

ここは、私の秘密の場所。

そして、不思議な世界の入り口。

誰も知らない一人の人あらざる者と、普通の小学3年生の少女の世界。

太古に栄え、滅びた世界。

夢と希望の生まれた世界。

始まりの世界、アルハザード。

彼は、そんな世界から、世界を見守り続けている。

第3話・ミッドとベルカと起源の魔法

薄暗い廊下をしばらく行き、何十という扉を超えたその先。

今までの扉とほとんど変わりの無い一つの扉をあけると、そこには先生がいました。

「さて、今日は何を教えようかね？」

「その前に、先生。先日、私の世界で事件があつたんです。」

と、私は先日起こった事件を説明しました。

闇の書事件。

魔法文化の無い地球で起こった、不思議な事件。

失われた過去の遺産である『ロストログア』と、それをめぐる様々な人々の思惑。

そして、過去の遺恨。

私は巻き込まれたただけだけど、そこで魔法というものについて簡単な説明を受け、その世界に友達2人が関わっているという事を知りました。

そして、事件のあらましを聞いた先生は、うんと頷くと、その現場で起こった事を教えてくれました。

「しかし、あそこがずずか君の世界だったとはね。」

「私も、まさか先生が来てたなんて思いませんでした。」

「まあ、私が寄ったのは偶然かな。研究にも一段落ついて、旧世界の遺品を集めてた時にね。」

「『エンドログア』ですか？」

「いや、只のロストロギアだよ。」

そう言って先生は笑います。

あ、ロストロギアは失われた世界の遺産で、今の世界にとっては先進的な技術を使っているため、危険なものらしいです。

そして、エンドロギアはロストロギア的一种なのですが、先生がとてつもなく危険というほどに危ないロストロギアの事です。

正確には、世界文明を一度滅ぼしたものの、または滅ぼすほどの力を持った物だったかな？

そして、先生のお仕事はそんな危険なロストロギアを集め、管理することみたいです。

まあ、私もまだよく分かりませんが。

「まあ、そんなわけでさっきの子に結び付くわけだ。」

「フェイトちゃんにくつついてたってことは、関係者なのかな？」

「おそらくね。まあ、死んだはずの人間が蘇ったら大問題になるだろうから、彼女には会わせられないかな。」

「ちょっとかわいそう……」

「まあ、その分責任を持って幸せにするさ。」

さて、今日の授業を始めようか。」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

そして、今日は魔法の基礎理論の復習をやりました。

ついでに、昨日見た魔法の事も教えてもらって、現在の魔法は『ミッド式』と『ベルカ式』という2タイプが主流で、その魔法の特徴を教えてもらいましたが、とりあえずはあまり関係なさそうです。

私が先生から教わってる魔法は、そのどちらでもないの。

「さて、今日の座学はここまで。次は実習かな。」

「はい。お願いします。」

そう言って、私は魔法を使うために構えを取りました。

と言っても、私の場合はほとんど自然体です。

このほうが落ち着くし、何より私の使う魔法は特に構えが必要ないからです。

「さて、まずは魔力を発現させて、領域を確保してくれ。そうしたら、まずは水からだ。」

「はい。」

体中に流れる魔力を感じ、それを活性化させて身体に行きわたらせる。

そして、それをイメージに流し込み、具現化して世界に表す。

俗に言われる根源魔法というのが私の使う魔法です。

この魔法は扱い辛くて難しい魔法ですが、先生から最初にこれやっておくといいと言われたので頑張って今まで練習してきました。

魔力をつかむのに半年、それを扱えるようになるまで1年弱。

そして、ようやく使えるようになったのが今の状態です。

この間約2年。

…最初は、苛められないだけの力が欲しかった。

そして、自分に自信を持つために続けてきた。

でも、それが変わったのはいつだったろう？

きっかけは、きっと一人の少女。

それまではほんの些細な言葉にも傷つけられ、一度は身を投げた日々。

そんな日常に、ちょっとしたお節介と力強い意志で飛び込んできた女の子。

高町なのは

色々あったけどいじめっ子とも仲直りして、今では苛めてた方ともすごく仲のいい友達です。

そして、今はそんな幸せをまもるために。

身に付けた力はどんどん伸びて、属性変換とエレメント生成、ほんのちょっとした攻撃魔法とある程度の防御魔法。

そして、何よりあの時私を助けてくれたのはちゃんのような、暖かい癒しの力。

それを身につけて今は鍛えているところです。

先生曰く、本当はデバイスという道具を使う事でもっと簡単に魔法を使うこともできるみたいです。

でも、私はこの方法を選びました。

理由はいくつかありますが、まずは先生に勧められたから。

最初に本当の基礎をやっておくと、発展に進んだ時に成長が著しく早く、深いものになるからだそうです。

そして、一度始めた事は最後までやり遂げたいから。

道具に頼らずに自分の納得できるまでやりきりたいです。

最後に、この魔法が一番強いから。

私の求める力は、既存の方法では手に入らないから。

私は、私の周りの人だけでも幸せになってほしい。

そのための魔法が一つだけ根源魔法の中にあるから。

それを手に入れるまで、この魔法を続けていきたいです。

「うん、成功かな。」

次は風、それが終わったら火、土、光、闇のエレメントを作って、同時に3分間維持できるように頑張ってみようか。」

「はい。」

そして、エレメントを次々にイメージしていきます。

火…土…光…

パンツ

「あ…」

つと、火のエレメントが消えてしまいました。

そして、それに気を取られている隙に他のエレメントも消えてしまいます。

これは、マルチタスク並列思考回路と呼ばれる技能を鍛える訓練

通常の思考とは違い、右脳と左脳を分けて思考し割り当てることでいくつかの思考領域を確保し、複数の魔法を同時に発動できるようにするための訓練です。

道具がない分、私は魔法の発動までを自分で組み立てないといけないので、この技能は必須らしいです。

諦めずにもう一度、もう一度と何度も繰り返し、ようやくコツを掴みかけた頃にはもう帰る時間になっていました。

「さて、今日はここまでで帰ろうか。」

「うーん、もうちょっとで何か掴めそうだったからちょっと残念」

「ははは、まあ、そう急ぐ事も無いさ。時間はたっぷりあるしね。」

「でも、私より遅くに魔法を始めたのはちゃんだって、もう私より何倍も魔法使いらしくなっちゃって…」

「それはデバイスのおかげだろ？」

「さすが君も使えるようになりたいなら君用のデバイスを調整するけど、どうする？」

「ちょっと欲しいかも…」

「でも、やっぱりもうちょっと我慢します。自分で立てた目標まではがんばらなくっちゃ。」

「ははは。まあ、頑張ってくれ。一朝一夕でできる事じゃないしね。」

「はい！」

「あ、そうそう、管理局もそうだけど、友達には私や魔法の事は内緒にしておいてくれよ。」

「分かってます。先生が見つかると色々と大変なのは何度も聞いてるんで。」

「そう言ってくれると助かるよ。」

「それじゃあ、またよろしく願いします。」

「はいはい。じゃあ、またね。」

そう言って、私は元来た道を戻りました。

外で魔法の練習をすることも禁止されてるので、ここから出れば私は普通の女の子に戻ります。

そして、まるで宇宙のような空間を抜けて、海鳴市に戻ってきました。

第4話：すずかとアリサと魔法の出会い

翌日

私は昨日の少女の事が気になって仕方ありませんでした。

それでも何とかいつも通りを装い、普段通りに学校に行きました。

「すずかちゃん、おはよう」

「おはよう、すずか」

「おはよう、なのはちゃん、ありさちゃん」

いつも通りの待ち合わせ場所。

雑談に花を咲かせて歩けば、すぐに学校に着きます。

それから、普段通りを心がけて過ごしました。

そして、午後。

帰りの支度をしていると、アリサちゃんが近づいてきました。

なのはちゃんは… 魔法の事で管理局に呼ばれてるらしいです。
だから、授業が終わってすぐに飛び出して行きました。

「すずか、今日これから用事ある？」

「うん、図書館に寄って行くことしてるの」

「あれ、昨日も行ったんじゃない？まだ何か借りるの？」

「昨日読んだ本の続きが気になっちゃって、無いか見に行こうかと」

「昨日の今日であるわけないじゃない」

「うん、だけど、一応ね。あと、他の本も何冊か借りたいし。」

「ん、じゃあしょうがないか。おいしいケーキが入ったから、
なのはに内緒で食べようかと思ったんだけど。」

「ごめんね」

「ううん、気にしないで！　じゃあ、私も先に帰るね」

「うん、また明日」

と、別れを告げて私も歩き出します。

そして、また昨日のように裏路地に入ると、誰もいないのを確認して影の中に入り…

「すずか!!」

「えっ… アリサちゃん!？」

声の方を振りかえると、物陰からアリサちゃんが飛び出してきました。

そして、急いで私の手を掴むと、半分ほど陰に埋まった私の体を引き抜きます。

「危なかった…、大丈夫？」

「あ、アリサちゃん、なんでここに？」

「今日のあんた、なんか変だったからね。こっそり後つけてみたのよ。」

そしたら、いきなり身体が沈んでいくから、びっくりしたわ!」

「あ…」

(どうしよう、見られちゃった…)

気が動転して、何が何だか分からなくなります。

こんな時は深呼吸するんだっ たかな？

とりあえず何度か息を吸って吐いて、気持ちを落ち着けます。

アリサちゃんが心配そうにみてるけど、とりあえず何とかここを乗り切らないと。

「えっと、もう大丈夫。」

「大丈夫じゃないわよ。一体何がどうなってるのか、しっかり説明してもらったからね！」

まったく、只でさえなのはが変な事件に巻き込まれてるのに、あんたまで心配掛けさせないでよ！」

「…ごめんね、アリサちゃん。」

「それで、どついつ事？」

「… うん、ひ、秘密 ってことじゃダメかな？」

「ダメ！ 私達親友でしょ？ 隠し事なんかしないでよ！」

「うー。」

「そんな顔してもダメ！」

なんとか言い訳を考えるけど、なかなか良いのと思いつきません。
でも、先生の事を話すわけにもいかないし、どうにかしないと…。

「あのね、アリサちゃん。」

「ん」

「じつはね…」

「うん」

「ほんとだね…」

「なによ、もったいぶらずにさっさと薄情なさい！」

「さっきのは夢か幻か、とりあえず何にもなかったの！」

「というか、私も何がなんだか分からなくて…」

「…」

「…」

とっさに思いついた言い訳をしましたが、正直自分でも意味が分かりません。

「というか、深呼吸した意味無かったみたいです…」

「すずか」

「…はい」

「私達、親友よね？」

「…うん」

「それなのに言えないような事なの？」

「……うん」

「…」

「…」

「分かった。でも、これだけは教えて。

危険な事じゃないね？」

「うん。私がやりたいからやってるの。」

「…はあ、もう、そんな風に言われたら強制連行できないじゃない。いい。」

「ごめんね、アリサちゃん」

「良いわ。あ、でも安全かどうかの確認だけはさせてもらつたよ。」

「…え、さっきと言ってる事違うない？」

「違うない。というわけで、私も連れて行きなさい！」

「うゝ、なんかだまされてる気がする…」

「良いから早く！」

「…うん」

そして、陰に潜っていきます。

私が自分の失態に気付いたのは、ちょうど体が全部陰に呑みこまれる直前でした…

「…というわけです。」

「ふむ。」

そして、とりあえず先生に事情を話し、どうしようか検討しています。

アリサちゃんはそのまま放置するわけにもいかずとりあえず連れてきたので、今は私の横で先生の事を睨んで… もとい、観察しています。

というか、連れてこないで引き返せばよかったかな？

でも、なのはちゃんに報告されても困るし…

「わかった。とりあえずアリサ君だったかな？

事情を説明するから、ここの事は誰にも言わないでもらいたい。出来るかな？」

「内容次第よ。なにかヤバそうならあんたをぶん殴ってでも帰って

管理局に報告するわ」

「まあ、ずずか君に危害を加えるつもりもなければ、特に犯罪というわけでもない。」

ただ、私は管理局に見つかるわけにはいけないから、話を聞く以上はそこだけは頼みたいがね。」

「私からもお願い、アリサちゃん。」

「…まあ、良いわ。で、事情を説明してくれる？」

「よからう。」

そう言っつて、近くのテーブルに座ると、私は魔法に出会った時の事を思い返していました。

…そう、あれはまだ私達が小学1年生のころ。

私はアリサちゃんからいじめを受けていました。

と言っても、今から思えば本当に些細なことだけど。

ただ、ちよつと悪口を言われたり、からかわれたり…

今でこそ仲良しの親友だけど、最初は凄くアリサちゃんの事が怖かったなあ。

そして、何度目かのいじめの後…

私はとっても悲しくて、辛くて、一人で泣きながらいつもの道を帰っていた。

でも、ふと何を思ったのか、海の方へ向かった。

海鳴市は海に面していて、子供の足でも行ける所に港や砂浜がありました。

でも、その時私が向かったのは小高い丘の上の、小学生ではちよつと厳しいところ。

そして、その向こうにある小さい崖。

と言っても、子供にとってみればちよつと大きな崖だけど。

海に向かった私は、その崖の隅にある小さな洞窟に隠れようと思っ
ていました。

でも…

洞窟の入り口付近まで来た時、ちょうど押し寄せて来た高波。

そして、私は波に吞まれて海に投げ出されました。

水をたくさん飲んで、苦しくて辛くて…

薄れゆく意識の中で最後に感じたのは、誰かの手が私を抱き上げ、
包んでくれた事…

そして、私は意識を手放しました。

「…その時助けてくれたのが先生なの。」

先生は私を励まして、それからずっと支えていてくれた。

今の私があるのは先生のおかげかな。」

「まあ、私は魔法を教えたただけだね。」

「ううん、それだけじゃない。」

私は何度も先生に励まされ、勇気をもらった。」

「まあ、そう言ってもらえると助けた甲斐があったのかな。」

「なるほど、そんな事が…」

てか、昔の私のした事がそんなにすずかを追い詰めてたのね。ごめん…」

「いいよ、気にしないで。もう過ぎた事だし、それに何度も謝って貰ったから。」

だから、気にしないで。」

「すずか…」

「うん、まあ、これで一件落着かな？」

ということ、さっきの話は頼むよ。」

「分かった。でも、もうひとつ良いかしら？」

「…なんだい？」

「私にも魔法教えてくれない？」

「…教える分には構わないが、君にはその…」

「何？」

「魔法を使うためにはリンカーコアと呼ばれる物が必要なんだ。これが無いと、普通の魔法は使えない。そして、君はそのリンカーコアを持っていないようなんだ。」

「え、じゃあ魔法は使えないの？」

「…使えるには使える。ただ、その魔法はちょっと特殊だね。猛烈な努力をして、色々な知識や経験を養って、何年もかけて初めて使えるようになる魔法なんだよ。」

「そのすずか君にも同じ魔法を教えているけど、2年やってようやく基礎に取り掛かれたくらいなんだ。」

「それを耐えるだけの覚悟は君にあるかい？」

「なによ、もつとばばつと使えるようにならないの？」

「リンカーコアさえあれば、ミッドなりベルカなりのデバイスという道具でサポートできるから良いんだが、それが無いとね。」

「ん、魔法使ってみたんだけどなあ。でも、努力は面倒だし…」

「まあ、ある程度使えるようになれば専用のデバイスでサポートできるから、それまでの辛抱だけだね。」

「すずかはその道具とやらで魔法使ってるの？」

「ううん、私はまだ基礎の段階だよ。」

「へ、2年もやってて基礎かあ…」

「まあ、私から言わせてもらえればそれでも驚異的なスピードなんだがね。…若干小学3年生なのに。」

「うん、じゃあ、私も教えてもらおうかな！ 目標は打倒すずかで！」

「そう簡単には追いつかれないよ？」

「ふっふっふ、その余裕へし折ってくれるわ！」

そして、アリサちゃんも魔法の世界に入りました。

…でも、なのはちゃんにはまだ内緒。

管理局に見つかり、先生は色々大変らしいから。

ちなみに、まだあの女の子は眠ったままだったみたい…

色々あってすっかり忘れてました。

第5話：少女の目覚めと少しの時間

暗い闇の中。

私は夢を見ていた。

それは、とても楽しい夢。

それは、とても優しい夢。

でも、それは所詮夢の物語。

なぜなら、あの時、あの場所で、私の命は終わっているから。

でも、私は呼びもとされた。

一番好きなあの人の呼ぶ声に。

暗闇の中で小さな体を目指して飛び込むと、それは懐かしい身体。

でも、そこにはすでに先客がいたの。

だから、私は素直にその子に身体を譲った。

そして、私は長い長い夢の中に落ちて行った…

その子は私の夢の中に何度も遊びに来てくれたわ。

そして、何度も会うつうちに、あの子はどう思ったか分からないけ

ど、確実に私はあの子の事を本当の妹だと思つようになったの。

だから、最後の最後であの子にわがママを言っちゃった。

一緒に夢の中で暮らそうと。

現実の中で生きられるあの子を、夢の中に縛りつけよう。

でも、あの子は自分で戻って行つた。

だから、私も涙をのんでお別れした。

そして、私はあの子の体から抜け出して、魂のあるべき場所へ帰る。

崩れゆく世界に一人、立ちすくむ中で、最後に見たのは、丘の上からかけていくあの子の後ろ姿だった…。

「あれ…」

重い頭をどうにか回転させて、必死に何があったのか思い出そうとする。

でも、身体はまだ眠り足りないのか、起きかけた意識はまたすぐにまどろみの中へ戻っていく。

(…私、どうしたんだっけ?)

夢の世界から出たのは分かる。

あの世界は私の夢だから、私がいないと成り立たないはず。

そして、死んで魂が消えていくのを最後に記憶は終わっていた。

「…いたっ!」

突然の頭痛に頭を抱えてうずくまると、手に生暖かいものがつくのを感じた。

「…血?」

恐る恐る手をどければ、そこにはべっとりと赤い液体が付着している。

いつの間に着替えたのか、白い服に布団をかけてベットに横になっ

ていたけど、その両方ともが同じように赤く染められていた。

「なんで…」

痛む頭を無理やり動かし、部屋の中を見渡す。

すると、無機質な壁と小さなクローゼット、小型の椅子が1つだけ置いてある。

まるで、どこかの研究室の仮眠室のような内装だった。

「わたし、どうしちゃったんだろ…」

…なんか変だ。

手があるし、足があるし、身体がある。

それに、しっかりとした痛みと良く知った赤い物。

まるで、現実にいるようだ…

…「現実？」

慌てて自分の手足を触ってみる。

そこには確かに身体があつて、それがまるで生きていた頃のように生々しいのも分かる。

でも、動かすと所々に違和感が混じつて、まるで自分の体じゃないように動かしにくい。

それに、頭から流れる血は止まっているようだけど、そこには包帯が巻かれ、固まった血糊がべっとりとして気持ち悪い感じを送ってくる…

「なにがどうなってるの？」

だるい体を無理して起こし、とりあえず現状を把握するために部屋の中を物色してみた。

まずはクローゼット。

女物の軽い服が何着か掛けてあり、スカートやマフラーなんかもいくつが入れられている。

そして、扉の内壁には大きな鏡が付いていて、それを覗き込んだ私は驚いた…

「…私？」

それは、生きていた頃の私の体。

正確には違っただけど、この時の私には知る由もない。

それに、頭に包帯を巻いて白い簡素な服を着ているのは、どこことなく病院で入院している時のように感じた。

「…どうなってるの？」

誰となしに問いかけても、答える人はいない。

しばらく鏡を使って自分の体を確かめたけど、やっぱり生きてた頃と遜色は無かった。

…

それからしばらくはだれか来ないか待ってみた。

下手に歩きまわって何かあると大変だし、こういうときは一か所にとどまるに限る。

でも、どれだけ待っても人が来る様子は無い。

時計が無いから分からないけど、ただ待つだけの時間はとても長く感じて、我慢できずに私は部屋から出てみることにした。

…部屋のドアは鍵がかかっていないようで、取っ手を握って動かせば簡単に開いた。

そして出てみると、対面にも扉があって、左右は先の見えない廊下がずっと続いている。

等間隔に扉は並んでいるようで、そんな扉が何枚も連なっていた。

「とりあえず、一つずつ覗いていけばいいかな？」

正面の扉から何があるのか確かめてみると、中はさっきまで私がいたのと同じような部屋。

その隣も、そのまた隣も瓜二つで、気おつけないとさっきまで自分がいた部屋がどこなのか分からなくなりそう。

そして、8つ目の部屋を覗こうとしたとき…

ブーン

ブーン

廊下の向こうから何かやってくる。

薄暗くてよく見えないけど、だんだん近づいてきているようだ。

ちよつと怖いけど、私は勇気を振り絞って近づいてみた。

「
… 乗り物？」

その機械は私のすぐそばまで来ると、静かに止まった。

その機会の背には人一人が辛うじて乗れるほどのシートがある。

と言っても、私は所詮子供の体だから、あんまり問題は無いけど。

「…乗れってことなの？」

一応尋ねてみるが、機械は答えない。

このまま無視しても良いけど、一人でここにいてもどうにもなりそうにないから、私は恐る恐るその機械の背に乗ってみた。

キン

そして、私が乗り込むと機械は何かを巻きつけ、ゆっくりと走りだした。

…これは、シートベルトかな？

さて、少女が起きたみたいだから迎えをよこしたが、どうやら無事乗ってくれたようだ。

あと数分もすれば私の所に来るだろう。

今日はさすが君もアリサ君も来ていないから、ゆっくりと事情を説明すればいい。

それでもし死にたいというなら破棄すればいいし、生きたいなら最低限の面倒は見るつもりだ。

まあ、あの夢の世界で会った時の印象からすれば、そうそう死にたいなんて言うとも思えないが。

そんな事を考えながら白衣を脱いでお茶菓子の準備を始める。

あと、どうやら頭部の損傷が開いたようなので、変えの包帯と薬も用意しておいた。

何分次元世界を漂流してきた物だから、完全には直しきれなかったんだろう。

そうこうしているうちに部屋の前に着いたようなので、中に入るように促した。

そして入ってくるのはまだ幼い…　しかし命ある存在。

その子はしきりに現状を聞きたがったが、とりあえず先に治療をして事のあらましを話して聞かせた。

「ということは、私は生き返ったの？」

「まあ、簡単に説明すればそうだね。正確には、人造人間の体に魂を入れただけだが。」

「なるほど。」

「それにしても、君はずいぶんと精神が発達しているね。魂を宿らせたばかりだから幼子と同じ程度にしか普通は動けないはずだが。」

「なぜか分からないけど、記憶があるの。お母さんと生きてた頃から、死んで、フェイトの体に宿った後まで。」

「ふむ、フェイト君に宿った後の記憶はおそらくフィードバックだろうな。本来魂は少ないながらもそれ自体に情報を蓄えられるから宿っている間の記憶が曖昧になって無いかい？」

「…うん、少しもやがかかったみたいになってる…」

「なら、その記憶は魂の記憶さ。それが、魂を入れた時に一緒に取り込まれたんだろう。」

だが、それ以前の記憶まで全てフィードバックされているとは考えずらい… もしかしたら、器である身体自体に記憶を先に埋め込まれていたのかもしれないね。」

「まあ、いいや。それで、お母さんはどこにいるか分かる？」

「うむ、ちょっと待ってくれ、今管理局のデータベースにハッキングをかけているから。」

「…良く分からないけど、それって犯罪なんじゃ？」

「大人の世界では、ばれなければ犯罪にならないんだよ。」

「そうなの？」

「ああ。」

…

黙って見つめるけど、そんなこと気にも留めずにコンソールをたたいている。

一応、フェイトの記憶も一部受け継いでいるらしく、魔法に関しては年不相応な知識も持つてるけど、それでも何をどうしているのか分からない。

というか、画面が高速でスクロールされているから、読むのもままならないかな。

…そんなこんなで眺めていると、目的の物を見つけたらしく、要約してくれた。

「ふむ、大変言いにくいのだが…」

「何？」

「君のお母さんはすでに亡くなっているようだね…」

「え…」

事のあらましはこうらしい。

私のお母さん、プレシア・テストロツサは、私が死んでから気が狂ったように研究に力を注ぎ出した。

そして、ついに次元航行エネルギー駆動炉「ヒュードラ」を作り上げるが、失敗。次元震を起こしてしまい、その罪で地方へ左遷されてしまった。

でも、お母さんはあきらめずに私を蘇らせるために家を…

元研究室でもあり、ラボでもある時の庭園を改修し、次元空間へ失
踪。

そのあとは、私を蘇らせるためにプロジェクトFATEという違法
研究をするんだけど、私がフェイトに身体を渡したから失敗。

あとはPT事件と呼ばれる事件があつてその時に2つ目の私の身体
と共に虚数空間へと落ちて行ったらしい。

もともと病気を患っていたらしく、どちらにしても助からないだろ
うという事で死亡扱いになっているみたい…

「あれ、私も虚数空間に落ちたんだよね？　なら、なんで私はここ
にいるの？」

「それは、秘密かな。　とある方法で回収したとだけ教えておこつ。

」

「とある方法？」

「まあ、それよりこれからの事だ。

君は現在生き返ってすぐでつても身寄りもない。

それに、私の都合でフェイト君にも会わせる事が出来ない」

「！ どうして！」

「私は少々訳ありだね。 管理局やその周辺に見つかるわけにはいかないんだよ。」

そして、フェイト君は今は管理局にいる」

「でも、フェイトならきつと事情を話せば分かってくれるよ！」

「それでもね。 私には管理局と関わる事は出来ないんだ。」

「… なら、なんで私を生き返らせたのよ！」

「…」

黙ってしまった目の前の男の人を睨みつける。

正直、生き返ったのなら今すぐにもフェイトの下に行きたい。

でも、この人は勝手に生き返らせておいて、会っちゃだめだという。

そんなの… 納得できるわけ無い！

「ふむ、まあ、話せるだけ話しておこうか。

私の事情を。」

「あなたの事情？」

「うむ、さて、何から話せばいいのやら…

私はね、管理局に見つかるわけにはいかないんだよ。

管理局… 正式名称：時空管理局は、次元世界の警察のような事をやっている。

そして、その業務はさまざまあるが、その内の一つにロストログアの回収というものがある。

私はいくつかのロストログアを所持していてね。

見つければ取り上げられてしまうのさ。

そして、その中には決して管理局の手に渡してはいけない物がある。

管理局も一枚岩では無くてね。

上層部の連中はかなり悪い事もやっているんだよ。

そして、そんな連中に私の持つロストログアを奪われれば、世界は破滅だ。

いくつもの世界が滅び、消えていくだろう。

そうならないためにも、私は管理局に見つかるわけにはいかない。

それは、例え下っ端の職員だとしてもだ。

見つければ、その瞬間、その職員にはロストログアの確保義務が発生するからね。

見逃したなんて事が分ければ大スキャンダルだ。

だからと言って、ロストログアを軽々しく渡すわけにもいかないしね。」

「でも、フェイトなら…」

「例えフェイト君が黙っていても、それを隠している事が分ければ管理局から罰せられる。」

君も、フェイト君を苦しめたくはないだろ？」

「でも…」

何とかならないか必死に考える。

でも、浮かんでくるのは管理局から責められ、罰を受けるフェイトの悲しそうな顔。

そんなの、絶対見たくない。

それに、私のせいでフェイトは苦しい人生を歩むことになった。

そして、ようやくこれから幸せな生活を送れるという段階で私がまた出てきたら、どんな迷惑をかけることになるか分からない。

だから、私は諦めるしかないんだ…

「まあ、遠くから眺める程度なら許可するし、連れて行こう。

それに、管理局のいない世界ならいくつか知っている。

この世界には何も無いからね。

気晴らしに何度か連れて行ってあげても良い。

それで妥協してくれないかい？」

「…少し考えさせて」

「いいだろう。一日ゆっくり考えると良い。」

先ほど君が乗ってきた乗り物に乗れば、この施設の中はある程度好きに移動できる。

音声認識も付けておいたから、言えばそこまで案内してくれる。

一日ゆっくり考えなさい。」

「…はい」

男の人の視線を受けて、私は部屋から出ます。

とりあえず、人気のない所に行きたかったからそういうと、さっきの機械は私を連れて行ってくれました。

「やっぱり、あの年の女の子を蘇らせたのは不味かったかな？」

もちろん、ある程度教育をし、社会に一人で出られるようになれば、魔法文化の無い世界で平和に暮らせることはできる。

でも、それはあの子の幸せにはならないだろう。

本気で、これからどうするか考えるべきかな？

「まあ、しっかりした子だし、おそらく明日には受け入れてくれるだろう。」

そうしたら、またじっくり話そうか。

…それに、まだ手が無いわけではない。」

そう結論付け、私は機械を操作する。

そこに映し出されたのは、虚数空間の地図。

この無限に広がる虚無の世界の中から、目的の物を見つけるのはほぼ不可能だろう。

しかし、私はあの子がどこにいたのかを知っている。

だから、その次元流を逆算し、大体の位置を予想して…

「…せめて遺体だけでも回収してあげようじゃないか。」

そう言って、私はコンソールを打つ作業を再開した。

第6話：もうひとつの魔法の始まり

翌日。

私はまたあの男の人の所を訪ねた。

…答はすでに出てたけど、言うのが怖くて結局時間いっぱいまで粘っちゃった。

でも、ここで悩んでいてもどうしようもないし、最悪フェイトの成長だけは陰ながら見守れる。

なら、それで満足しないと！

そう思い、機械に乗り込んだ。

先に朝食を済ませ、部屋に用意されていた服に着替えて。

そして、機械が連れてきてくれたのは昨日とは別の部屋。

なんか、今まで見た事無いくらい大きくて立派な扉の前。

それは3重の扉になっているらしく、1枚目と2枚目の透明なガラスの扉は押してあけるようになっていて、私が入ると自動的に閉まっていた。

そして、3枚目の扉をあけると、いきなり光に包まれる…

「っ！」

眩しくてとつさに目を隠したけど、慣れるまでしばらくかかった。つた。

でも、慣れてくると次第にその全貌が明らかになる…

それを見て、私は思わず…

「わあ、綺麗…」

そこにあつたのは、まるで研究所内とは思えないほどの花、花、花。所々には様々な植物が生え、中には見た事のあるものもいくつかあった。

いったいどれほどの広さがあるのか、地平の果てまで緩やかに見渡せる。

そして、空にはまるで本物の太陽のような光が3つほど浮かんでいた。

「来たか。ちょっと待っていてくれ。」

と、唐突に声の掛けられた方を見ると、昨日の男の人が何かをしている。

あれは… 機械だろうか？

私を運んでくれているのとはまた形の違う機械がいくつか置かれていて、男の人はそれをメンテナンスしているようだ。

私が近づいても文句を言わないってことは、良いってことなんだと思う。

だから、近くでその機械をまじまじと眺めた。

全体的に藍色の球形をしたフォルムにいくつか手足が生え、まるで蜘蛛のような外見。

所々から出ているスプリンクラーみたいなのは、この庭園の花に水をやる機械なのかな？

そんな事を考えていると、作業が終わったらしく、機械は起き上って少し宙に浮くと、庭園めがけて走り去って行った。

「それで、答えは出たかな？」

「うん。フェイトに会うのは諦める。」

やっぱり、迷惑はかけたくないし、私はフェイトのおねいちゃんなんだもん！

しっかりしなくっちゃ。」

「そうか、それは助かる。」

まあ、前も言ったように様子を遠くから眺めたいなら連れて行こう。

それに、こんなところで一生暮らすのも難だから、出ていきたいならどこかの魔法文化の無い世界で生活できるよう手配するぞ。」

「うん、ありがとう」

そういつて、今私にできる最高の笑顔を送った。

それに男の人は驚いたようだったけど、すぐに元の顔に戻ると、静かに右手を差し出す。

「じゃあ、これからしばらくはここで暮らすことになるんだ。」

とりあえず自己紹介と行こうかね？

私は、遥か昔よりこの次元世界を見つめ続け、偽善と私欲のために守り続ける者。

以後、よろしく」

「え、それが名前？」

「いや名前は無い。」

「名前ないって、なんかかわいそう。

ん、じゃあ、あなたの名前を考えてあげる！」

「私の名前をか？」

「うん、これから一緒に暮らすんだし、名前無いと大変でしょ？」

「なるほど。確かに、あれば便利なのかね？」

「まあ、名前はおいおい考えるとして、私はアリシア。

アリシア・テストロッサ

世界の発展と研究の末の生贄となり未来永劫の時を奪われ、あなたの手によって仮初の体に宿った女の子。

これからよろしくね。」

「こちらこそ。」

そう言って、差し出された右手を握った。

大人と子供、男と女の違いから、それは握手とは呼べない代物になったけど、その大きな手から私は優しさとぬくもりを感じた気がした。

そして、私と彼との生活は幕を開けたのだった。

さて、後日、私はやってきた2人の女の子と友達になった。

なんでも、フエイトの友達の友達みたいで、又聞きとなるけどいろいろと話もしてくれるみたい。

それに、私も知らなかったPT事件の事をいろいろと教えてもらった。

そして、今は雑談中。

2人のうちの一人… アリサちゃんは話好き見たいで、結構色々な事を教えてくれた。

そして、その中で聞いた話…

「え、二人とも魔法を教わってるの？」

「うん、と言っても、私はまだ始めたばかりだけどね。」

「凄いだよ。アリサちゃん、私が1年かけて覚えた事すぐに出
来ちゃったんだ！」

「まあ、あれはさすがの指導が良かったからよ。」

それに、いくつか裏技も使ったんでしょ？」

「でも、先生も最低半年はかかるはずって言ってたでしょ？」

「まあ、それでもできるなら問題無いわ！それに、まだ魔力を活性化できただけで、そこから先はどうするのかさっぱりだし！」

「魔法かあ…昔は私も使えたのに…」

「今は使えないの？」

「うん、デバイスが無いから。」

「あ、ミッド式デバイスだっけ？」

「うん、と言っても練習用だけだね。」

「良いなあ、私達はリンカーコアが無いから使えないし……」

「でも、デバイスなしで魔法使えるのは凄いよ！」

「まあ、そのせいで覚えないといけないこともたくさんあるんだけどね。」

「ああ、なんか学校の勉強だけでも疲れるのに、余計大変だわ！」

「でもやめないんでしょう？」

「まあね！ 一度やり始めたからにはとことんやるわよ！」

「私も、デバイスがあればなあ……」

「先生に聞いてみたら？」

案外、簡単に何とかしてくれるかも……」

「でも、わがまま言うのも悪いし……」

「なによ、アリシア。そんなこと気にしてるの？ あんな男、バンバンこき使ってやればいいのよ！」

「それは言い過ぎだと思うよ、アリサちゃん。……でも、頼るのは悪い事じゃないし、聞くだけ聞いてみたらどうかかな？」

「うん、じゃあそうしてみる。」

「よし、そうときまったら善は急げよ！ 行きましょ！」

「え、今から？」

「もちろん！ それで3人で魔法の練習して、あいつの驚くほどの魔法使いになってやるんだから！」

「先生が驚く程って、けっこう凄いかも…」

「ま、とりあえず行きましょー!」

ということで、私達は先生の所に向かいました。

なんか、すずかちゃんはここの設備は慣れたもので、壁からコードみたいなを取り出すと、それに呼びかけました。

すると、あの機械… 自動走行機が来て私達を運んでくれます。

そして、私達がついたのはまた知らない部屋でした。

よくよく見てみると、扉の横にプレートがはまっていて、数字が書かれています。

それが部屋番号になっていて、目的の部屋番号を言えばそこまで勝手に来てくれるようになってるらしいです。

そして、ノックしようとしたすずかちゃんを追い抜き、アリサちゃんは勝手に部屋の中に入って行きました。

…よかったのかな？

「先生、アリシア用のデバイス作って！」

「ああ、そこに作っておいたから勝手に持って行ってくれ。」

「了解、んじゃ、貰ってくわね。」

「魔法を使うなら訓練室でやってくれよ。」

「分かってるわよ。それじゃ！」

「気をつけてやるんだよ。」

と、扉が閉まってアリサちゃんが出てきます。

というか、もう出来たの？

なんだか、いろいろと突っ込み所があり過ぎて、どこに突っ込めばいいのか分かんない。

そんな事を考えてると、魔法の練習をする事になったみたいで、私は訓練室へ向かいました。

く予告く

時は流れる…

移り変わる時代の中で、物語は進む。

あれから10年。

物語はStrikersを超え、管理局の魔道師は成長を遂げた。

新たな仲間。

新たな力。

そして、幾多の経験と共に。

そして、人知れず進む3つの魔法。

根源から断たれた失われし秘術。

それは、小さな芽を芽吹かせ、人知れず花を咲かせる。

しかし、それを語るのはまだ早い。

次元を背負う事件の一つ、

出会いと別れの物語。

これから語られるのは、そんな物語。

古代ベルカの因縁

失われし大秘術と滅びの真相

今、時は満ち、新たな滅びの定めが下された。

子供たちよ、おそるるな

管理者よ、表へ上がれ

今、歴史の中に新たな鎖の時間が刻まれる。

第7話：偶然のアクシデント

約10年後。

とある管理外世界の空を2人の女性が飛んでいた。

一人は青髪を腰まで伸ばしたおしとやかそうな女性

もう一人は、金髪の活発そうな女性。

おそろいの仮面で顔を隠しているが、見る人が見ればそれがだれか一発で分かるだろう。

しかし、彼女らに気づく者はいない。

認識阻害魔法…

この、空間に存在するという概念そのものを書きかえる魔法は、根源魔法特有の魔法の一つだ。

存在を希薄にするだけで、完全に見えなくなったり壁をすり抜けたりはできないが、注意を集中させるか対策を取っている人以外にはほとんど見つかる事が無い。

一応、かなりの難易度ではあるが、慣れれば普通に発動する事が出来る便利な魔法である。

「すずか、後どれくらい？」

「このままいけば30分かな。転移すれば早いけど、痕跡残したくないし。」

「確かに。まあ、ゆっくりいきましょ。」

「うん。」

そして、雑談をしながら飛び続ける。

目指すはとある次元の切れ目。

常人には理解できない複雑な次元流の行きつく先。

そこには、稀に次元空間を漂っていたロストログアが流れ着く事がある。

もっとも、そんな事を知る人間は全世界に4人しかいないが。

そして、今回2人が向かっているのはそのうちのひとつで、管理外世界の森の奥。

ときどき大きな魔力反応が発生するが、原因不明なため管理局員が派遣されている場所。

しかし、管理局員程度にはロストロギアは見つけられない。

その空間にあつて無いような状態で現れるそれらは、次元空間に半分埋没している。

だから、次元走行魔法で直接転移して、体当たりで押し出すしかないが、そんな事をすればロストロギアも体当たりした方も粉々に壊れてしまう。

だから、そこは管理局でも転移禁止区域に指定され、なぜか偶に次元走行に失敗して死亡する人がいるとして恐れられている。

そこに、二人は向かっていた。

「ねえ、すずか。今日は管理局いると思う？」

「うん、先生が調べてくれた感じだと、自然保護課だったかな？あれが調査に来るかもしれないから注意してって。」

「自然保護って言うと…… エリオとキャロのいるところよね？」

「うん、まえフェイトちゃんが着た時に親離れしたって嘆いてたから。でも、その二人が来るとは限らないよ？」

「まあ、人手不足の管理局とはいえ、ある程度はいるでしょうからね。でも、一応認識障害だけじゃ不安だから、ステルス魔法掛け

てくれる？」

「幻影じゃダメかな？」

「幻影は管理局にもあるから、対処されると厄介だし。それに、もしも局員に出会ったら回収は諦めて逃げるから問題ないよ。」

「どっちにしても、熱源探知とエネルギー探知の両方をこまかすためにまた『ノヴァ』打っておいた方が良くかも。」

「アリシアがいればジャミングできるんだけどなあ。」

「先生が忙しいし、アリシアちゃんはその手伝いだから無理だって言ってたよ。」

「うん。まあ、無い物ねだりしてもしょうがないかな。とりあえず、もうすぐ現地だから会話は無しで。作戦はいつもので。」

「うん、よろしくね、アリサちゃん。」

「すずかもね。」

そう言って、二手に分かれました。

片方は回収のために現地方面へ。

もう片方は囀と補助のために空高く、雲の上まで。

そして、数刻後、静かだった森があわただしく動き出す。

（さて、すずかにはああ言ったけど、なんかいやな予感がするのよね。）

現地に向かって飛びながら、私は何となくそう思った。

周辺には人の姿は見えないけど、何となく管理局のデバイスの気配がする。

これは、根源魔法の副産物。

デバイスは基本的に常時魔力を消費して起動している。

それは、ほんの些細で常人には分からない程度に。

でも、そんな小さな力でも、起動状態でエネルギー消費が上がった状態で寄り集まると、デバイスの通った後に微弱な痕跡が残る。

それが、根源魔法を習って魔法の基礎を完全に網羅した今なら多少は読み取れる。

もっとも、すずかならもつと正確に分かるんでしょうけど。

でも、今はそんなこと言ってる場合じゃない。

とりあえず集中して探さないと。

現地周辺を低空飛行して、次元空間との境目を調べる。

周辺に出した魔法文字が輝けば、何か眠っている証。

でも、さすがにそうそう光る事はないんだけど、今日は運悪く3つも反応があつた。

（とりあえずまだ管理局には見つからないみたいだし、目視できる範囲に管理局はいない。

それに、そんなに遠くにいたとして、自然保護課にここまで瞬時に駆け付けられる人材もないはず。

…なら。）

「閃光の炸裂」

初歩的な光魔法を3つ上空に打つ。

初歩の魔法だけど、意外と使い勝手のいいこの魔法は、消費魔力も少なく、瞬間発光だけなら痕跡もほとんど残らない。

唯一現在の居場所を特定される危険があるが、それもステルスを常時発動している現状なら気づかれにくい。

そして、それが3発光るのを合図に、さすがに魔法の詠唱を始める。

私は、その魔法が発動するのを静かに待った。

さて、所変わって管理局。

管理外世界観測用の仮施設にエリオとキャロがいた。

目的は、周辺で起こる大規模魔力反応の原因調査。

それと、環境への影響について操作するためだ。

もちろん、子供だけで来るはずもなく、大人の局員が何名か同行している。

そして、そんな中に普段ならいるはずの無い人物が若干1名紛れ込んでいた。

「エリオ、キャロ」

「あ、フェイトさん、どうしたんですか？」

「執務官の仕事だね。自然保護課のお手伝いの仕事だよ。」

二人は調査の手伝い？」

「はい、本格的に職員配属される前にも来ておいた方が良く
と先輩に言われたんで」

「なんでも、『この世には未知の現象がたくさんあり、その多くが
自然の神秘によって引き起こされている。それを目の当たりにし、
解明する事も私達自然保護課の仕事であり、生き甲斐であり、そし
て娯楽なんだ』と。」

「ああ、自然保護課の課訓か何かかな？　まあ、今回は私もお手伝
いするから、よろしくね。」

「はい。よろしくお願いします、フエイトさん」

「よろしくおねがいします。」

「うん。それで、二人は現場の下見はした？」

「いいえ、これからです。先輩方はもう慣れてるから、僕らだけで行ってこようかと。」

「巡回終わってすぐだから、多分2人でも大丈夫だろうって。」

「ん。じゃあ、私も一緒に行っていいいかな？ 一応見ておきたいし。」

「はい！ 案内しますね」

「よろしくね、エリオ、キャロ」

「「「よろしく願いします」」」

そして、3人は現場に向かって飛び立ちました。

2人は竜の背中に乗って。

一人は空を駆けて。

これが、アリサ達の行動を始める3分前。

現場まで通常の職員で30分　：　しかし、この電光石火組みではわずか10分の距離。

一方、上空。

閃光の合図を受け、すずかは周りに敵影がないか確認します。

でも、特にそれらしいものは地平線の果てまで見えません。

これが、もうちょっとでも遅ければ、地平線に現れる影を確認出来たけど、その時は運悪く見つからずに魔法の詠唱に入りました。

すずかの使う魔法は根源魔法。

もつといえ、ルーンを使う旧式の魔法とそれ以前の超古代から受け継がれた魔法。

それは、いくつものルーンによる世界への宣言と詠唱によるイメージによる事象改ざん。

長文を読んでやる必要は本来ないけど、イメージを作るためにはどちらにしろかなりの時間を要する。

そのため、すずかは迷わず言葉によるイメージを選んだ。

言葉を使った方がイメージしやすいし、周囲に人がいないなら気づかれる心配もないから。

「ああ、世界を織りなす無限の力。

我が身の内を流れる命の力。

滅び、消えた文明の遺産。

唯一にして絶対の魔法の力。

（魔力認識完了）

我は、その力を使わんと欲す。

命の力よ、汝がもし我らに従うなら。

我が意のままに集え。

大地を埋め尽くす無限の命の力。

汝らに示すのはかの地への収束。

（広域収束魔法）

光り輝く闇の力。

それは、正にして負の狂騒。

人はそれを混沌と呼ぶ。

それは、純粹なる無の力。

それは、根源たる魔法の力。

互いに打ち消しあい、世界に変化を与える事の無い力は、魔の力で
持つて世界を揺らす。

次元の狭間から、ロストログアを揺さぶり出して！！！！

（無属性爆発魔法）

ライト&ダークネス・ノヴァ！！！！」

周辺に起こる振動。

高魔力爆発と極小規模次元震。

それによって、隠れていたロストロギアがあらわれる。

その数4個。

見た目ではどいう物か分からないから、一応全部アリサちゃんに回収してもらう。

それを上空から黙って見つめ、ふと周りを見渡すと…

「あぶない、アリサちゃん!!」

聞こえるはずがないと分かっている、つい叫んでしまった。

しかし、それが届いたのか、はたまた直感か、アリサちゃんは4つ目のロストログアの確保を諦めてその場を離れた。

そして、今までいた所に放たれた黄色い網。

ミッド式拘束魔法　：　バインド

それを確認したアリサちゃんはその場を離れようとするけど…

「止まちなさい！」

回り込まれたせいで逃げ場をなくしてしまった。

ステルスで透明になっているから、普通は見つかるはずがないんだけど…

「高エネルギー反応の原因はあなたですか？

事情を聞きたいので、その魔法と武装を解除して投降してください。そうすれば、危害は加えません。」

たんたんと言うけど、それは無理だ。

まだ、見ず知らずの人なら分からないが、よりにもよって…

（フェイトちゃん… それに、エリオとキャロも…）

何と言う再開か。

まあ、向こうは気づいてないみたいだけど、これは不味い。

基本、魔法の発動の早さならあっちの方が上だ。

しかも、今回の相手は管理局最速伝説の一角、フェイト・テストロツサ。

おまけに、すでに鎌状のデバイスを展開し、臨戦態勢を整えている、

アリサちゃんは私みたいに詠唱を必要とする魔法はほとんど無いけど、身体強化による接近戦だから分が悪い。

幸い、まだ私は気づかれてないみたいだから、それで何とかできないかと考えてみるけど、詠唱すると気付かれる可能性があるし、詠唱しないで放てるのはほとんど初級魔法だけ。

いや、一つだけ詠唱なしで放てる大技があるけど、それはここで使うべきじゃない。

なら、今はアリサちゃんを信じて待つ。

そう思い、私は周囲を警戒しながらアリサちゃんを見た。

（さて、どうしたものかしら。）

ステルス魔法は発動し、効果があるのは分かる。

でも、相手はどういうわけか此方の位置を正確に把握しているっぽい。

デバイスが高性能なのか、はたまた別の要因か。

考えても分からないけど、とりあえず現状を早急にまとめないと。

まず、確保したロストログアが3つ。

これは、あらかじめ出現予測を立てたからすんなり手に入った。

でも、もうひとつあったみたいで、それを追っている時に攻撃を受けて妨害されて、今はキャロの手に握られている。

鎖が巻かれた古い本。

封印措置を施しているあたりは、さすが元機動六課ね。・

でも、それじゃ甘い可能性があると言う事をこの子たちは知らない。

管理局上層部の闇。

その一端が「S事件で正されたけど、まだ多くの闇を抱えている。

そして、そいつらがロストログアを使いだしたら、管理局で止められる人はいない。

なら、安全確認と選別をさせてもらい、危険なものは誰にも見つからないように隠すしかない。

でも、それを話すわけにはいかない。

理由は多々あるけど、一番の理由は私達の正体がばれるわけにはいかないから。

見つければ、先生の事も知られる可能性がある。

そして、危険なロストログアが存在が管理局にばれる危険性もあるからだ。

だったら、まずは撤退を考えよう…

そうこうしているうちに、話は進んでもう一度バインドを仕掛けようとしているのが分かった。

（ジャミング … できる？）

自分に確認するが、やるしかない。

飛行魔法の構成式は解析したし、ジャミングの準備も整っている。

でも、さっき一瞬見ただけのバインドはあと少しだけ分からない所がある。

それは、発動の瞬間。

起動式の展開を見極め、デバイスが処理するまでの一瞬で解析できれば、ジャミングした隙に逃げられる。

飛行魔法を解除すれば、フェイトは落ちるから、あの二人がそれを見捨てる事は無い。

竜の背に乗っているという事は、飛行魔法は使えないはず。

なら、勝機はある。

「無言… ということは、話し合いに応じる意思は無いと判断し拘束します」

そして、発動の瞬間。

デバイスによる演算処理を上回る速度の処理能力を、根源魔法の強化で叩きだす。

そして、計算の終わるとほぼ同時に、2種類のジャミングを同時展開した。

飛行封じとバインド封じ。

発動したはずの魔法が発生せずに困惑するフェイトを余所に、私は全速で空へと飛びあがる。

それと同時に追いかけてこようとする竜がいたが、直後上がったフェイトの悲鳴につられて下をのぞけば、案の定落ちていくフェイト。

もう一度飛行魔法を使えば飛べるはずだが、そんなこと知らない2人と1匹は、すぐに助けるために反転降下を始める。

その一瞬があれば十分。

上空に飛び立てば、すずかが転移魔法を用意して構えている。

私達はそれに飛び込むと、次元空間に逃げだした。

後に、この一件が大きな事件を呼び起すとは、まだだれも予想していなかった。

第7話：偶然のアクシデント（後書き）

はじめまして、作者です。

駄作ですが、読んでくれてありがとうございます。

さて、間違えて公開設定にしまつて、本当はもっと書いてから上げるつもりだったのに、ストックがありません。

でもまあ、せつかなんでこのまま執筆&即更新で行こうと思います。

誤字、脱字、文法ミスは勘弁を… 報告してもらえれば、そのうち直します。気長にお待ちください。

第8話：滅びを予言する鏡『オーバーレイ』

「逃げられた？」

視察のはずだったのに、突然起こった高エネルギー反応。

急いで駆け付けてみれば、なぜか宙に浮かぶ3つのアイテム。

それが、不自然に動いているのを見つけた。

高エネルギー反応のせいで明確には分からないけど、何らかの魔法で姿を隠している人がいるのかもしれない。

そう思い、バインドを回避して逃げた者の後ろに回り込んでカメラをかけてみた。

すると、止まる物質。

どうやら、当たりみたい。

「無言… ということは、話し合いに応じる意思は無いと判断し拘束します」

ちよつと待つて動きが無かったので、とりあえずバインドをもう一度試します。

今度は全方位からの多重バインド。

魔法を複数発動するから、ほんの少しだけ遅れるけど、その分強度と拘束性能は格段に上がる。

そして、放つ瞬間…

(…全魔法のキャンセル!? しまった!!!)

急に訪れる浮遊感。

そして、自由落下。

「きゃあー!」

軽く悲鳴を上げて恐慌に陥りそうになるのをどうにかとどめる。

そして、もう一度飛行魔法を発動してみた。

すると、だいぶ落とされたけど発動。

体勢を立て直した。

「フエイトさん、大丈夫ですか！」

「うん、何とか。」

「良かった…」

エリオとキャラが追いかけてきてくれたけど、完全に見失った。

まあ、一つは確保できたから良いんだけど。

「それにしても、何だったんでしょうか？」

「分からない。でも、あのエネルギー反応は自然に起こったものじゃない。やなくて人為的に起こされている可能性が高いことは確かだね。」

「そんなことできる人がいるんですか？」

「それも不明。でも、実際起こったから…」

「まあ、一つは確保しましたし、一応キャロに封印してもらったんで、帰って解析班に回しますね。」

「もしかしたら取り返しに来るかもしれないし、仲間がいる可能性もあるから注意して。」

とりあえず、観測基地に戻るよ。」

「はい」

そして、飛び立つ。

後に、この事件がきっかけでこの世界は管理世界になった。

専門の観測所がエネルギー反応の発生日点に作られ、常時見回りに人がいる状態に。

しかし、もうエネルギー反応が観測される事は無かったという。

所変わって、無人の管理外世界。

緑あふれる先ほどの世界とは打って変わって、広範囲の砂漠や岩場の広がるところ。

「大丈夫、アリサちゃん？」

「平気。ちょっと思考加速のせいで頭が痛いけど。」

それより、追っ手は？」

「大丈夫みたい。」

これなら、転移の痕跡は薄めておいたし、念のため4回超遠距離転移したから。
オーバージャ

それより、ごめんね。私の不注意で…。」

「大丈夫。確認はしたんでしょ？」

「うん。目視できる範囲にはいない事は確認したよ。森の中かの魔力反応も無かったし。」

「まあ、フリードは竜だし、フェイトも早いからしょうがないわ。それより、次からどうするか対策を立てないと。」

「うん。地平線の向こうからでも駆けつけられるなら、今までのように高エネルギーで揺さぶり出すのは無理かな。」

「だね。次元空間への干渉系でピンポイントで見つけないと。」

とりこぼしがあるし、時間がかかるけど、しょうがないわ。

あと、ステルスを見破られたんだけど…」

「あ、それは多分これのせい。」

「ロストロギア？」

「うん。これにはステルス掛けてなかったでしょ？」

「あ… そういえば。」

「多分、これを目印に見つけられたんじゃないかな？」

「なるほどね。見えればどうにでもなるからね。」

「まあ、帰って先生に報告しないと。怒られそうで怖いけど。」

「先生なら大丈夫でしょ。 案外笑って、『後はこっちでやっておくから気にするな』とか言いそう。」

「そう… かも。 先生だし。。」

「まあ、それでも早いに越した事は無いわ。 とりあえず戻りましょ。」

「うん。」

異回廊を開いて先生の所へ向かう。

手伝いと訓練を兼ねて、週に何度かロストログアの回収をしているけど、今回が初めての失敗。

報告しても案の定先生は許してくれたけど、今度からミスをしないための対策を練るっていう課題を出されました。

まあ、それがペナルティー変わりと云ったところかな？

さて、私は現在とあるものの行方を追っている。

と言っても、すでに見つけているのだが。

混沌より生み出した神器、滅びを预言する鏡『オーバーレイ』

それが、新たな未来を预言したのは、つい最近だ。

混沌の膨大な力と摂理に反した跳躍する力。

これにより、常に混沌とつながる事を許されたたった二つの存在。

その方割れで、世界の崩壊を预言し、歴史を示すというただそれだけのために作られた所詮は预言の道具。

しかし、現存する世界の技術の中では、その精度・観測できる時間は最長のものだろう。

なにせ、以後１年以内に起こる全ての崩壊を映像で映し出すのだから。

唯一、音声を拾えないのは欠点か？

まあ、あとは特殊な条件でしか使う事は出来ない。

世界の全てを見渡せる場所。

異回廊と呼んでいる全ての世界と繋がる次元空間の異次元。

現在そこに行くには私かすずか君に渡したアイテムを使うしかない。

そこは、混沌の内側。

すべてのモノと理が存在する場所。

もつとも、すずか君のアイテムではその表層に到達することしかできないが。

その鏡は混沌の中心に近い全ての根源の交わる地にある。

それを見る事が出来るのは私だけ。

もうひとつの書物、追憶と歴史の書『グリモワール』と共に、それは静かに人知れず存在している。

そして、その予言だが、簡略すると夜天の書が一つの魔法を生み出すというもの。

それは、かつてベル力を滅ぼした魔法。

超広域多次元魔力収束魔法。

収束魔法に次元跳躍魔法、そして、いくつもの魔法を合わせて発動される魔法。

もっとも簡単に世界を滅ぼせる魔法の一つ。

しかし、それを制御するには膨大な処理速度が必要で、なおかつ完全に魔法を熟知していなければ使えない。

かつての聖王ですら10人ほど集まらないうちに使えない魔法。

ゆえに、未だに誰もその極地に達してはいない。

しかし、夜天の書。

これは、別格だ。

魔法収集と行使用の演算能力を有した書物だけあり、発動のハードルを一気に下げる事が出来る。

知識は全てこれに記録されるため、後は膨大な情報に耐えうるだけの頭と必要な魔力さえあれば誰にだって発動は可能。

それこそ、長期的に発動準備を整えれば、現在の夜天の書のマスターである八神はやてにも使える魔法なわけだ。

そして、その魔法の使われる未来が見えたという事は、近々完成するのだろう。…その魔法が。

だが、それだけは阻止しなければならない。

そのためには、まず夜天の書を奪うしかないだろう。

そして、しかるべき場所に保管して収集をやらせず、預言が消えるのを待つ。

「しかし、なぜ今更？」

そう、正直一つの疑問が残る。

すでに夜天の書は必要なデータをそろえている可能性があるからだ。それなら、今まで『オーバーレイ』で預言できなかったのはおかしい。

それに、そんな魔法を使う機会があるとは思えない。

八神という女性はすずかやアリサの友達だと言っし、世界を滅ぼしてまで力を欲する人間でも無い。

しかし、予言に出た以上は放置するわけにもいかないだろう。

といっわけで、どうやって奪うかを考えた。

ついでに、後日3人娘には事情を説明し、無理やり納得させた。

おそらく悲しむであろう八神はやてのアフターケアも含めて。

第9話：管理局の問題とはやての憂鬱

私は今家路についてます。

機動六課解散後は独立遊撃部隊の経験を生かしてフリーの特別捜査官として活動しとるけど、最近は陸でも海でも依頼があつて引つ張りだこや。

でも、今日はうちの家族が代わりに仕事やってくれてるさかい、久々の帰宅です。

おいしいもん沢山つこて待つとるさかい、みんな早帰つて来てな。

「リインもお手伝いするです!」

「ほな、リインにも頼もか。

久々の料理やけん、腕が鳴るわ。」

「おいしい物たくさん作つて、びっくりさせてあげます!」

「そのためにも、まずは買い物行かんと。」

ミッドの大衆デパートに入り、必要な素材を次々籠に入れていきます。

部隊服は目立つから私服に着替えているけど、それでも結構注目されとるな。

まあ、リイン連れてる時点で一目瞭然なんやけど。

「はやてちゃん、今日は何にするんですか？」

「そやな、時間も無いし、手ごろに作れる鍋にでもしよか。」

「賛成です！ あ、でも辛いのはダメですよ！」

「リインはお子様やなあ。」

「む、お子様じゃないです。ただ辛いのが苦手なだけです！」

「はいはい、ほな、味噌鍋でも作るさかい、材料集め手伝ってな。」

「はいです！　じゃあ、リインは白菜持ってくるです。」

「あとは、ごぼう・にんじん・大根・もやし・ニラ・豚肉か？
味噌も少なくなってきたさかい、ついでに買つとこつか。」

そう言つて、私たちは材料を集めます。

リインも必死に飛びまわつて材料を集めてくれとるんやけど、体に似合わず大きなものを運んどるさかい、結構目だつとるな。

「はやてちゃん、白菜はこれでいいですか？」

「もうひとつ位無いと足らへんよ。」

みんな仰山食うし、煮込めば縮むさかいな。」

「はいです！」

そう言つて、リインはまた野菜売り場のほうまで飛んで行きました。
結構距離があるけどがんばってくれとるから、そのままお願いしよ
か。

そんなこんなで買い物して、今は家に向かっています。

私の今の家はミッドの構内にあるアパート。

みんなに住むにはちょっと小さいけど、地球にも家があるし、新しくここに買うのも難なんで、ここに暮らします。

まあ、隊舎で寝る事が多いし、あんま使ことらんけど。

近くには川や公園もあり、背の高い建物の森やけど、結構居心地のいいところです。

「さて、ぱぱと作つたろ」

「リインは何をすればいいですか？」

「んゝ、ほな、器出して洗つといってくれる？」

「分かったのです！」

手早く野菜を切って鍋に入れ、出汁取り用の肉と一緒に煮込んでいきます。

みんなもそんなに遅くならないはずだから、途中で火を止めて待つ事にしました。

あまりにも手軽過ぎて拍子抜けだけど、その分味噌や出汁にこだわってるから良しとしますか。

「うー、おなか減ったのです。みんな早く帰ってこないかなあ」

「今日の仕事はほとんどなかったから、すぐに……」ただいまあ「……」っと、着たみたいやな」

でも、台所から戻って空腹で寝ているリインのほつに近寄れば玄関の方から声が聞こえてきました。

どうやら思ったよりは早く帰ってこれたみたいです。

「みんな御帰りなさいです！ ご飯出来てるのです！」

「リインも手伝ってくれたんよな。」

「はいです！ 器出したりテーブル拭いたり頑張ったのです！」

「おお、リイン偉いぞ〜」

「えへへ、褒められちゃいました。」

ヴィータがリインの頭をなで、その横ではみんながそれぞれ部隊服の上着を脱いだり汚れを落したりしとります。

「ほな、温めなおして出してくるさかい、ちょっと待っとつてな。」

「すみません、主。」

「気にせんといてや。」

そして、台所でできかけだった鍋に最後の具材を入れて、あらかじめリインに用意してもらった机の上に運んでいきます。

そして、みんなで鍋を囲んで…。

「「「「「いただきます」「」「」」」」

おなか減ってるから、早く食べることにしました。

「それにしても、いくら少ないからって明日の仕事の書類もあつたのに早かつたなあ」

「主にはかり手間を掛けさせる訳にはいきませんので。

それに、珍しく先方が真面目にやってくれたおかげで、時間内に終わらせる事が出来ました。」

やることは少ないとはいえ、もう少し時間がかかると思ってたさかい、ちょっと驚きです。

仕事自体が終わっても、担当から報告を待つて仕上げる必要があるので、私とリインはシグナムたちにそれを任せて先に上がらせて貰ったりました。

「あっちも人手不足やから遅れるのは多いけど、最近余計にひどく

なつとるさかいな。」

「いつもペコペコ頭下げるから言められるんだよ。 偶にはガツンと言ってやるうぜ!」

「よせ、ヴィータ。そんな事をすれば主の評判が悪くなる。」

「でもよ、シグナム。それでうちの仕事が増えるのは納得できるかよ。」

確かに、ヴィータの言うとおり、偶にはそれもええかもな。

最近の状況はひどいもんがあるさかい、こつちも過労ではてばてや。

「まあ、仕事が回ってくるだけでもええよ。 無くなればどこに左遷されるか分からんさかいな」

「例の事件ですか?」

「うん、そうや。」

管理局員の優劣問題。

優秀な管理局員には仕事が大量に来るけど、魔法が使えない（or 一般の魔法職員より下の能力しかない）職員には仕事がほとんど来ないという問題が管理局にはあります。

そりゃ、魔法が使えないのに前線に出すわけにもいかんし、比較的魔法を使わない指揮系統も前線での戦闘経験者しかねないのは分かっとなるんよ。

でも、そのせいで管理局の魔法職員は万年人手不足で、逆にその他の職員は仰山おり過ぎて捨て駒扱い。

だから、魔術師以外の職員は、補給部隊や要所以外は仕事も肉体労働やきついものばかりだし、魔法局員基準の給料だから一般職員の給料は悪い。

それに不満を持った一部の職員から、給料を上げろという話もあったけど、財源に乏しい管理局ではほぼ不可能。

まあ、魔法職員の給料を下げればいいんやけど、明らかに魔法を使える人と使えないのでは仕事量に差が出るさかい、どうにもならないんよ。

そして、それに抗議した一般職員が左遷されるという事件が最近起こった。

これは、結構管理局内でも話題になって、左遷された職員はすぐに現場復帰したけど、正直いつまた同じような事が起こるかもしれない。

上層部はこれの対応に躍起になって、そのしわ寄せが独立部隊を率いた経験のある私にも来ているというわけや。

「無能な職員なんて解雇すればいいんじゃないね？」

それで給料も払えるし、一石二鳥じゃん。」

「ヴェータ、それ本気でいっとるん？　だつたら怒るよ。

ええか、魔法が使えないからって、一般職員に悪い処は何も無いんですよ。

それに、管理局の土台を支えてるのは間違いなく一般職員や。

確かに能力的には劣つとる所があるかもしれん。

でも、一般職員が辛い仕事を引き受けてくれるおかげで何とか管理局はまわつとるし、いなくなれば確実に成り立たん。

私たちは彼らに感謝こそすれ、雑に扱っちゃあかんのよ。」

「でも、実際給料低いつて文句言ってるんだろ？」

文句言いながら無理して管理局やるより、別の仕事やれば良いじゃん。」

「仕事が無いんよ。」

ミッドも地上本部も、ほとんど管理局が仕事を統括しとる。

それ以外で仕事を探すと、まともな所はほとんどあらへんし、倍率も高い。

かといって、別の世界に行こうにもお金が無いし、行ったところで仕事を見つけれられる保証もない。

他にも、管理局に務めないといけない理由がある人や、戦争中の世界から逃げてきた難民、次元犯罪者の家族で偏見を向けられてる人なんかも居って、そういう人は管理局以外では働けないから追い出されないためにも必死に不満を我慢しとる。

でも、その我慢もそろそろ限界みたいやけどな。

だから、解雇したり今のまま我慢してもらっわけにもいかんし、逆に給料を上げるのは財源的に無理。
正直八方ふさがりだわ。」

どうにかできるんなら何とかしてあげたいっちゅう気持ちはやまやまなんやけど、現実結構厳しいからどうにもなんのや。

まあ、あまり現実的でないのも含めれば方法が無いこともないんやけどな。

「現在スポンサーを探してるんですけど？」

「うん。少なくともまともな生活ができるだけの物資と最低限の娯楽ができる賃金は用意せんとあかん。

でもなあ……」

「そんな物があれば苦労しないと。」

「うん。実際、何個かは支援してくれるところ見つけたんよ。でも、到底賄い切れるもんじゃないわ。」

それに、魔術師不足解消のために給料上げるより雇用を優先してるから、実際は全く進展しとらん。」

「いくつかの無人世界を開拓するというのは？」

「長期的に見れば有効やけど、短期的には開拓資金が無い。それに、開拓が終わるまで我慢が持つとも思えんわ。」

「ほんと、どうしようもないですね。」

みんなもようやく現状を理解してくれたんかして、いろいろ一緒に考えてくれとります。

唯一この件の調査を手伝ってもらったシグナムはある程度分かったようやけど、詳しく話すんは初めてかいな？

まあ、リインはすべて知つとるさかい、横で必死に鍋を食べとるんやけど。

「主、上層部で何か良い意見は出されてないのですか？」

「ザフィーラは知らんか？」

管理局の上はまともに現場を知らん人ばかりや。

リンディさんやゲイズ中將は比較的まともやけど、その上は正直腐つとる。

最高評議会が殺されて、まともな人間も何人かはいったけど、私利私欲に走る人ばかりや。」

「という事は、何も対策が無いと?」

「だから、八方ふさがり言ってるやん。」

「はあ……」

思わずため息をこぼしてしもうた。

せつかくの楽しい夕飯が、こんな話のせいで台無しや。

私が話の元凶なだけに悪い気持ちもあるんやけど、話を無理やり戻して楽しい話題に変えさせます。

それから、ここ最近の憂さを晴らすために、みんなでしゃべり明かしました。

そして、夕飯も終わって一息ついたころ…

みんなはもう部屋に帰って、今居間に居るんは私とシャマルだけや。

「さて、明日は管理世界の視察か。」

「はやてちゃん、大丈夫ですか？」

「シャマル、うちは大丈夫や。それより、最近うちがいない間の穴埋めさせてるみんなの方が心配なんよ。」

そう言っつて、シャマルのほうを見ます。

魔法生命体のみんなは人間より症状が出にくいけど、必ず疲れがたまつとるはずです。

だから、ちゃんとそれを見極めるのもマスターの仕事や。

「私達は大丈夫です。今は普通の生活をしているとはいえ、元はヴォルケン・リッター。そんな軟な体はしていないので。

でも、はやてちゃんは最近無理しすぎな気がします。体調崩してからじゃ遅いんですよ？」

「あはは、まあ、どこぞのなのはちゃんみたいに成らんよう気おつけるわ。」

そう言って笑いますが、正直今の仕事量は結構ハードや。

だから、今担当しとる事件が解決したらまとまった休みでも貰うようにせんとな。

「私としては、明日の仕事が終わったら休暇を取ってほしいんですが…」

「分かった、考えとくわ。」

「は、はやてちゃんも強情ですね…」

呆れたように言うシャルマルやけど、私を心配しいとるのは分かる。

だから、心配せんようにいつも通りに軽く振る舞うよう心がけました。

「今までずっと一緒におるさかい、分かってるやろ？」

それに、この問題が片付かんと気が気じゃなくてまともに休めんわ。

「

「それでもです！ 無理でも休んでください。」

「はい」

「じゃあ、私もそろそろ寝ますんで。」

「うん、おやすみな」

「おやすみなさい、はやてちゃん」

私も自分の部屋に戻ると、明かりのなくなった部屋で、ベッドに横たわり目を閉じました。

それでも考えるのはあの問題の事。

明日の視察の予定や、その後の予定。

その日、眠りに落ちる直前まで、私は考え続けていました。

第9話：管理局の問題とはやての憂鬱（後書き）

はやての方言がここまで難しいとは…

はやてって、純粋な関西弁じゃないですよ？

「ゝさかい（例：言つとるさかい）」とか、使ってたっけ？
てか、関西弁は出身関西じゃないんで良く分からないです><

あと、リインの口調なんか違和感… （主要メンバーがそれってどうよ？）

まあ、指摘あれば直します。

追記：口調や表現修正しました。

第10話：襲撃前の一息

翌朝、玄関前にて。

「はやてちゃん、気をつけてくださいね。」

「うん、大丈夫や。ただの管理世界の視察やし、シグナムもおる。」

「リインもいるです!」

見送りに出てきてくれたシャマルとヴィータ、ザフィーラに笑いかけます。

今日はシグナムとリインと一緒に管理世界の視察が仕事です。

だから、シャマル達とは別行動になりました。

「でも、色々物騒ですから。それに、疲れも残ってるようですし。

シグナム、何かあったらお願いね。」

「心配無い。主はやては必ず守りぬくと誓おう。」

「うん、じゃあ、私達は書類の方を片づけるから。」

「主はやて、ご無理をなされぬよう。」

「心配症やな、シャルもザフィーラも。」

まあ、近々有給も取るさかい、その時はみんなでなんかおいしいものでも食べに行こー！」

「わーい、ケーキにアイスにプリンなのです！」

「リイン、それデザートばっか。… 太るぞ？」

「リインは食べても太らないから平気です！ それに、ヴェータちゃんには食べたくないんですか？」

「う… そりゃ、食べたいけど…」

「なら、決まりです！」

勝手に決まってもうたけど、しゃあないか。

休日に向けて、少し食べる量減らしかんと、そろそろお腹が…

「… まあ、ほな行ってくるわ。」

「はい、行ってらっしゃい」

「お土産よろしく」

「お気をつけて」

そして、私達は一足先に家を出て、管理局に向かいました。

この時は、まさかあんなことになるとは夢にも思いませんでした…

所変わって、ある世界にあるの研究室の一つ。

私は一つの作戦を実行するために、1週間ほどかけて計画を進めていた。

まずは、管理局のプログラムへのハッキングとデータ改ざん。

マルチタスクを使えるとはいえ、一個人の力では難しい物があるが、何とか必要なデータを組み終えた。

あとは、管理局が勝手にやってくれるだろう。

これが上手くいけば、今日の午後には八神はやてはある管理外世界で一人になる。

そして、その時に強襲して目的の物… 夜天の魔道書を奪う寸法だ。

「アリシア君、念のためにサポートを頼めるかい？」

「うん、何をすればいいの？」

「周辺の監視と魔力痕跡の隠蔽漏れが無いか確認。あとは、失敗した時の保険を頼む。」

「失敗したときって、先生が無理なのに私ができることなんてないんじゃない？」

「外野から見ていての方が視野が広いからね。それに、ミッド式魔法はアリシア君の方が上だ。」

「そんなの、一瞬で覆せるだけの反則アイテム持つてるじゃない。」

「出来れば管理局には見られたくないからね。」

「ああ、なるほど。」

アリシア君は納得してくれたようなので、話を進めることにした。

これからの作戦には不確定なことも多いため、広域監視を担当するアリシア君の位置はかなり重要になってくるだろう。

「じゃあ、1時間後に飛ぶから準備を頼む。

あと、場合によっては長期的に待つことになるから軽食も持っていくといいかもしれん。」

「うん。じゃ、デバイスと食べ物持ってくるね。」

「頼む。」

そう言っ出ていくアリシア君を見送ると、私は近くに展開された画面を見る。

そこには、いくつかのロストログアの名前が書かれており、そのうちのいくつかは色が付けられていた。

それは、使用可能なロストログアの一覧。色が付けられた物は、今回使用する物だ。

と言っても、たった2つだけなんだが。

一つは、大いなる魔力の石『レリックピース』。

もしも魔法戦になった時のエネルギー源だ。

基本、中級以上の根源魔法は魔力を補給する魔力タンクを使う。

これは、魔法を使うために必要な魔力消費量を確保するためだ。

初級魔法だけで対応できる相手ではないから、これは必須だろう。

もう一つは、虚無と滅びの石『ダークマター』

虚数空間を生成するこのアイテムは、簡単にいえばAMFの超強化版だ。

魔力結合を断ち切る物質を発生させ、どんな魔法でも完全に無力化できる。

しかも、それを操作できるため、相手だけ魔法を使えなくする事や、身にまとうて鎧のようにすることも可能。

対魔法では最強のアイテムだろう。

まあ、両方とも真正正銘の『エンドロギア』… しかも、古代ベルカとアルハザードを滅ぼした曰く付きの物だが。

さて、それ以外に準備をするとすれば、レリックピースから魔力を取り出し魔法行使の時に供給してくれる魔力タンクだけだ。

一応アリシア君には仮面を渡してあるが、私は素顔でいく。

そうした方が周辺を見渡せるし、常時ステルスを掛けられるだけの

精神力と魔力はあるから姿を消せば問題ない。

それに、万一姿を見られても、私ならどうということはない。

これがアリシア君なら、フェイト君に存在が伝わる可能性があるし、
すずか君やアリサ君なら一発ではれるから危険だが。

というわけで、私たちは転送用の部屋へ向かった。

小型の異回廊侵入装置はすずか君に渡してしまったため、私だけならともかくアリシア君を連れていくには大型装置を使う必要があるからだ。

もともと混沌から切り離された私は、生身で次元空間に出ても問題無く活動できる。

しかし、アリシア君は存在を確定させなければ次元空間への侵入時に消滅してしまう。

さらに、異回廊は次元空間の中心とも言われ、次元世界でも上位にある。

普通の人間のいるのが3次元、次元航行艦が移動するのが2次元だとすれば、異回廊は1次元に存在するため、次元航行の難易度が高い。

3次元が縦・横・高さを持つ立体。

2次元が縦・横の平面。

1次元が線。

0次元は点。

なので、

2次元空間になると厚みが無くなり、瞬間移動や世界間の移動が可能になる。

1次元になると、さらに幅も無くなり、移動時間が無くなる。

そして、0次元空間になると全てが同一の場所に存在し混ざり合つて、混沌にして無な状態になり、存在量が無くなる。

まあ、次元が減る毎に存在を定義するのにかかる演算が増えるため、次元跳躍魔法や転移魔法、2次元の海を航行できるミッドの技術は実はとんでもない物なのだ。

というわけで、異回廊は到底人間には耐えられない所なのだ。

もつとも、そこを移動できる技術はかなり有用なのに間違いは無い。そのため、太古の昔からこの次元への侵入は試みられているのだが、成功例は今のところ無い。

…私の作った2つを除いては。

というわけで、アリシア君を連れて転移したのは、管理外世界の一つ。

森や林が多いこの世界で、私達は身を隠してしばらく待つこととした。

…獲物が来るのを。

所変わって管理外世界の一角。

視察のために訪れた私達は、ちょっと啞然としてしもた。

なぜなら、送られた先は視察目的の場所ではなくあけっぴろげの荒野。

しかも、管理局の局員はおるか、人っ子一人見当たらんっちゅうのはどついう事や？

「はやてちゃん、ここって…」

「何かの手違いでしょうか？」

「それか、悪質な嫌がらせか何らかの意図があつたのか…

どちらにしろ、確認せんとあかん。」

「では、戻りますか。」

「そやな、一旦管理局までもどろ。そのためにも、ここがどこなのか把握せなあかん。」

「適当な近隣世界に転移すればいいのでは？」

「こついう時はあせらず状況判断やで、シグナム。」

遭難した時は動かず、助けを待つ。

そして、落ち着いて情報の整理と収集や。

周辺世界にやみくもに飛んでも管理局の居る世界に行けるとも限らん。

それに、体力を消費していざという時に動けないようでは元も子もないわ。

まあ、今回の場合は意図的に飛ばされた可能性もあるし、全く動かないのも危険な気がするからとりあえず町でもさがそか。」

「分かりました。主はやてがそう仰るなら従うまでです。」

「リインも探すです！」

「うん、ほな、とりあえず上空から探してみよか。」

そついつて、出来るだけ高くまであがって周りを見渡します。

すると、遠くの方に森と川、そして、小さな町らしきものが見えました。

遠目からでは確認しづらいけど、人が住んでる可能性もあります。

「とりあえず情報収集ですね。」

「そやね。でも、魔法文化の無いところかもしれへんし、見つからんように低空飛行でいこか。」

町の近くに行ったら森の中に着地して、方向に注意しながら歩いて進も。」

指揮は場馴れしているさかい、私中心に話を進めます。

これが見ず知らずの人やつたら指揮官なんかを決めるんやけど、今回は慣れたメンバーやからその必要もないんや。

「文化の違いで衣類や頭髮について指摘される可能性は？」

「あるけど、そこまで気にするのは正直難しいわ。 とりあえず、近づいて町の外から様子見や。」

「分かりました。」

シグナムも納得してくれたみたいやし、方針はほぼ決定やな。

「まあ、人がいればいいんやけどね。」

「きつといるです！ こういう時はポジティブシンキングって言うてました！」

「それ、誰の言葉や？」

「えっと、スバルちゃんです。 サバイバルで遭難したらまずはポジティブシンキングだって」

「なるほど、ええ事いうやないか。 まあ、実際にいるか分からんさかい、とりあえず行ってみよか。」

「はいです！」

そう言って、出来るだけ低空飛行で飛んでいきます。

一応見つからないように警戒して飛んでるんで、上空から見た感じだと町までおそらく30分くらいやるか？

視察の時間もあるし、そんなにゆっくりしとれんから、管理局員が居るのを祈るばかりです。

第11話：『夜天の書』奪取作戦

さて、町についてみたけど、遠目からでもわかるほど村はボロボロだったわ。

森が近いからか木造の建築が多いけど、その大半が腐って屋内が見えとります。

それに、道は草に埋もれ、建物のほとんどが苔むして、人が住んでいる気配がありません。

「主はやて、こちらには誰もいませんでした。」

「こっちも誰もいなかったのです。」

一応二人に見て回ってもらったけど、やっぱり人は居ないみたいやわ。

「んー、困ったわ。一応上空から眺めてみたけど、ここ以外に人の住んでそうなところは見つからなかったんよ。」

私は二人が調べている間に上空から見たままを話します。

遠くに見えるのははるかに続く荒野。

逆方向にこの森を抜ければ大きな山があり、川はそこから流れてきているようでした。」

「やはり、私が近隣世界へ飛んで管理局を探した方がいいのでは？」

「んー、そやね。このまま闇雲に探しまわっても難やし、シグナムにお願いするわ。」

「わかりました。」

そう言ってすぐさま飛ぼうとするシグナムを引き留める。

今飛べると、集合場所や時間をどうすればいいのか分からず下手に場所を動けなくなってしまうわ。

「じゃあ、計画をねろ。」

まず、シグナムは近隣世界を回って管理局を探す。

でも、見つからん場合もあるやろから、日没までには戻ること。ええな？」

「わかりました、主はやて。」

「それで、リインは私と一緒に食料確保や。万が一シグナムが見つけなかった場合、食べ物が無いのは困る。」

幸い、ここは昔町があった見たいやし、森に何か食べられそうな木の実でもあるかもしれへん。」

「はいです！」

「しかし、主はやて。保存食があるのでは？」

シグナムの言う保存食とは、万が一のために常備している干し肉と少量の水の事だ。

管理局の局員は一体どんな事態に見舞われるか分からないため、普通はこういう物を各自用意しとる。

もつとも、フェイトちゃんみたいにスピード重視の局員は余分な物を持つ事を嫌うため置いてきているが、幸いにも私は後方支援だから持ち歩いていた。

シグナムやリインの分は無いけど、魔法生命体なので最悪吞まず食わずでもある程度は生きていけるんよ。

「無くなったら終わりやし、1日や2日で帰れるとも限らん。それなら、食料は温存しときたいんや。」

「わかりました、ではお願いします。」

「了解や。」

「じゃあ、作戦開始や！」

「おー！」

みんなで手を挙げて気合いを入れる。

こういうのはのりが大事やで！

「では、行ってまいります。くれぐれもお気をつけて。」

「うん、よろしゅうな。」

そう言って消えていくシグナムを見送りました。

日はまだ登りきっておらず、この調子なら後10時間は明るいやろ。

だから、ゆっくり探せば良い。

「さて、リン、私たちも食料調達にいかか。」

「はいです、はやてちゃん！　がんばって食べられそうなもの集めるのです！」

小さな袋を取り出して、食料を集める準備をして、私達は森に向かって歩き出しました。

さて、八神はやてが町に入って行くのは確認できた。

ここまでは大筋予定通りといえるだろう。

しかし、ここからが本番である。

私は、誰にも気づかれる事無く気を引き締めた。

（アリシア君、様子はどうだい？）

（今のところ、先生の言った通りみたい。シグナムさんは他の世界へ飛んで行ったよ。）

（ふむ。ならば行動に移すかな。

一応戻ってこないか見張っていてくれるかい？）

（わかった。先生も頑張ってね！）

（ああ。）

上空から偵察してくれているアリシア君に連絡を取り、状況を確認する。

今回のターゲットは夜天の書だ。

オーバーレイで映し出した未来にもこの書は映っていたため、最優先に確保するのはこれだろう。

正式名称は夜天の魔道書といい、魔法記録と記録した魔法を行使するためのストレージデバイスである。

八神はやてはこの他にも2つのデバイスを所持しており、1つは八神はやて自作のデバイスであるシュベルトクロイツ。

もうひとつは、ユニゾンデバイスであり、シュベルトクロイツの管制人格として作られたリインフォース？だ。

シュベルトクロイツに関しては、単に魔法を放つための砲身としての意味しかないと思われるし、一般的なデバイスと大差ないと思われるため、奪う必要はないだろう。

そして、リインフォース？。

これも、夜天の書の管理人格と瓜二つの容姿をしているが、八神はやての自作らしいので危険は無いと思われる。

だから、今回狙うのは夜天の書だけだ。

そう思いながら、物影を移動して様子が見える所に来た。

どうやら森の入り口付近で何かしているらしく、リインフォース？が手をかざして森の方を向いていた。

しかし、それを見て私は少々計画を変更せねばならなくなったようだ。

(…あれは。)

リインフォースは小さな青い本を広げ、何かをしている。

そして、その本は夜天の書と瓜二つの姿をしていたのだ。

（アリシア君、少々予定を変更するよ。）

（どうしたの？）

（予定外の物を見つけてしまったね。念のために直接コンタクトを取って確認しようと思う。）

（分かった。私はこのまま見張ってればいいの？）

（ああ、頼む。）

（うん。頑張ってね！）

念のためにアリシア君に連絡を入れ、ステルスとハイドを解除してゆっくりと八神はやてに向かって歩き出した。

すると、リインフォース？がすぐさま振り返り、それにつられて八神はやても振り返る。

どうやら蒼い本を使って探索魔法を使っていたようだ。

ずいぶんと警戒されているようだったので、私は両手を広げて敵意が無い事を示しながらゆっくりと近づいて行った。

それが伝わったのか、八神はやても警戒心を少しだけ和らげる。

しかし、まだ甘い。

警戒を相手に向けるのは良いが、周りの注意が散漫になっている。

管理局に長年いても、やはり後方から指示を飛ばすだけでは戦闘技術は発達しないのか。

しかし、それを言うのは酷な話だろう。

なぜなら、彼女は一番後ろで悠々に全体を見回しながらの指揮と支援攻撃が役目なのだから。

「警戒を解いてくれないかい？

まずは話し合いをしようと思って来たのだが。」

「あんた誰や？」

「初対面で自己紹介もしないのかい？」

まあ、君の事はよく知っているから良いのだが、八神はやて君。」

そう言うと、隙なく私を観察してくる。

腐っても管理局ということか。

その目は嘘をついてもすぐにはれると言つ錯覚を起こさせるには十分だった。

「私は、そうだな… 次元世界の管理人とでも名乗っておこうか。」

「次元世界の管理人？」

それで、そんな人が私に何の用や？」

「なに、折角招待したのだし、話でもと思ってね。」

「招待？」

いぶかしむ様な目を向けられたが、事実である。

折角話に來たのだし、少々親睦でも深めようかと思い、雑談も織り交ぜて話すことにした。

「やあ、苦勞したよ、管理局のデータを改ざんするのは。本来の予定をキャンセルして視察の任務を入れ、管理世界と銘打ちながら全く別の管理外世界に誘い込むのはね。」

「あんた、それ犯罪やで？」

「なに、ばれなければ犯罪では無いさ。現に、私がそう言っているだけで君にそれを立証する証拠は何もない。」

「確かに…それで、わざわざ私をこんなところにおびき出して、いったい何の用や？」

「少々君と話がしたかった…ではダメか？」

「ふざけてる暇は無いんやけど。」

ふむ、話に聞くよりはせっかちなのだろうか？
しかし、現状ではまともな判断とも言える。

こういった場所で相手のペースに乗せられるのでは三流だ。
自分のペースで話してこそ、目的を達成できるのだから。

もつとも、ここは時間を稼いだ方が結果的には良かったのだが。

「ふむ、まあ、こちらでも無限に時間があるわけでもないし、そろそろ本題と行こうかね。」

まずは、一つ質問だ。その少女の持っている蒼い本は何だ？」

「これは只のデバイスやで？」

無難な回答。

無回答なら此方も相応の構えを取るし、素直に言えば不利になる。

なら、これくらいが妥当だろう。

まあ、今の私にはそれだけでも十分な情報だが。

「夜天の書に魔法を記録し、行使するためのか？」

「…そんなん、教えるはず無いやろ？」

「なるほど。では、2つ目に君の持つシュベルトクロイツは？」

「これは私のデバイスや。」

「夜天の書とのつながりは？」

「そんなもの、教えるはず無いやん。」

「なら、最後。夜天の書は完成しているか？」

「完成？」

「ああ、分からないんだね。なら問題ない。」

オーバーレイで見た夜天の書は、今の姿でありながら大きく異なっ
た点があった。

しかし、魔力も普通だしその特異点は現在は表れていない。

それで、本人も知らないなら、おそらくはまだ間に合ったのだろう。
もつとも、嘘をついている可能性もあるが。

「く… なら、こつちからも質問や。」

あんたはなんでそんなこと聞くん？」

「それは、もちろんそれを奪うためさ。」

「渡すと思うてるの？」

「リインははやてちゃんの専属機なのですよ。他の人には使えない
のです。」

そう言いながら、リインフォースとの間に魔力回路が結ばれる。

念話でもしているようだ。

流れる情報を外部から直接読み取って内容を把握するなど、一般人なら無理だろう。

せいぜい、翻訳されたデータを奪って把握する程度だ。

もともと、それでも十分すごいのだが。

「リイン、ユニゾンや。」

「了解です、はやてちゃん。」

という会話が聞こえたが、ちょうど良いので観察させてもらうことにする。

どうやら私に気づかれずにユニゾンをしておきたかったようだな。

「ユニゾン・イン！！」「」

一瞬の光に包まれ、それがおさまるとそこには髪の色や一部の服装が変わった八神はやてがいた。

（ふむ、大方予想通りか。）

ユニゾン時の術式からそれがどういう物を解析し、昔見た夜天の書のデータと照合して繋がりを調べる。

すると、夜天の書とリインフォース？の間に確かにアクセスがある事が分かった。

（ということは、リインフォース？とついでにシュベルトクロイツも奪っておくべきか。）

リインフォース？に関係があるなら、シュベルトクロイツにも何かあるのかもしれない。

ならば、両方奪っておいて問題は無いだろう。

「さて、こたえを聞いてなかったね。

素直にシュベルトクロイツと夜天の書、リインフォース？を渡してくれないかね？

そうすれば、痛い目にあわせずに済むのだが。」

「そんなのきまっとるやろ、御断りや！！」

そういうや否や、八神はやては後ろに跳んで距離を取ると、魔法の発動態勢に入った。

遠距離攻撃を得意とする魔法使いなら妥当な選択だろう。

直線的に下がるのはどうかと思うが、相手の使う技が分からないならその方が良い。

速度重視の魔法使いなら、蛇行して下がっても間合いを詰められる事には変わらないのだから。

そして、魔力を練るのが見える。

管理局員がよく使う拘束形の魔法か。

（ダークマター）

「リング・バインド！」

展開に合わせてダークマターから虚数空間を展開する。

超強力な魔力の奔流でもない限り、一般的には魔法を全て無効化できる空間。

発動されたはずの魔法はその空間にかき消され、発動しなかった。

「…不発やて？」

ならもう一回、リング・バインド！」

再度、今度は広く形を取った魔法。

しかし、その程度ではダークマターを抜く事は出来ない。

案の定無効化され、不発に終わった。

「次は、此方の番かな？」

正面に初級魔法である属性エレメントを作って放つ。

もうすでに幾度となく繰り返した魔法で、息を吸うように無意識に術式が出てくる。

それを任意の個数呼び出して、エレメントの集合体を作って攻撃する技。

「ファイアボール」

とりあえず5発ほど直線軌道の炎の魔弾を放つ。

3発は避けられ、2発は防がれる。

しかし、その一瞬で私は待機させておいた第2の魔法を放った。

「アイスボール」

「きゃあ！」

ガード時の硬直を狙った死角からの攻撃。

とつさに2発防いだのはなかなかの物だが、5〜6発は防御を抜いてもろに食らう。

純氷属性の魔力の塊だから、それほどのダメージは見込めないものの、服や体の一部が凍りついて凍傷を負わせ、動きを抑える事が出来る。

こういう戦闘ではそういった諸条件は結構重要で私は次の魔法を発動させた。

大規模空域凍結魔法。

無数の水と氷のエLEMENTを使って空中に氷の柱を縦横無尽に走ら

せる技。

待機させたエレメントの半数を使うこれは、さすがの八神はやても防ぐのに精いっぱい、周りにできる氷の檻までは対処できない。

効果範囲は地面から遥かに離れた上空まで及び、その全域に美しい氷の彫像が出現した。

「く、なんちゅうバカげた魔力や！」

「さて、受け身を取る事をお勧めするよ。」

「なんやて？」

そして発動する第3ステップ。

はやて君のすぐ下に氷の地面が出来たのを確認すると、私はダークマターを氷の回廊一体に大出力で展開した。

「な、なんや！！！」

そして、飛行魔法が使えなくなったはやて君はそのまま氷の床に墜落する。

きちんと受け身を取ってくれたおかげで、怪我は無いようだ。

もつとも、これから怪我では済まない意識を刈り取るための一撃を加えるのだが。

「さて、チェックメイトだ。」

虚数空間の満たされた空間の外側に、雷のエレメントで4つの電極を作る。

そして、その周りに水のエレメントを作る事で、プラズマのボールが出来上がった。

これで、先ほど作ったエレメントは全て出しつくす。

しかし、この後の攻撃は避けようがないだろう。

ダークマターの中にこのプラズマボールを入れれば、制御を失って互いに惹かれあい、自然の摂理に従って氷の檻全体に強烈な電気ショックを食らわせる。

「ぜいぜい……」

さらに、はやてくんのように大きなリンカーコアを持った人間には虚数空間はかなり強烈だ。

魔法を使おうとした瞬間、つなげた魔力回路からリンカーコア内の全ての魔力が虚数空間に打ち消される。

そのため、魔力の急激な減少で強烈な疲労感を与えるのだ。

満身創痍で魔法も使えない。

さらに、この虚数空間には力を奪う副産物として付加魔法を解除する効果もある。

というわけで、ユニゾンも強制解除できるのだ。

「はやてちゃん！」

突如はじき出されたリインフォース自身も、飛び立つ事が出来ずに氷の床に投げ出される。

そして、それは魔法の射程圏内に入ったのと同じ事だ。

そして、大電流を流して感電させようとした瞬間。

「まっってください！」

突如リインフォース？が立ち上がり叫んだ。

「はやてちゃんにこれ以上危害を加えないでください!」

「リインフォース…」

自身も相当ダメージを受けているはずなのに、それでも立ち上がるのはさすがだ。

八神はやてからの魔力供給は無いため、内臓された魔力だけで動いているのか。

時折ふらつきながらも必死に声を張り上げる姿に、ほんの少しの猶予をやる事にした。

私もずいぶん甘いのだろうか。

「あなたの目的は私なんですよね？」

それなら、大人しく捕まるのではやてちゃんにこれ以上酷いことしないでください!」

…自己犠牲か。

しかし、現状では最善だろう。

主は原因不明の疲労で満身創痍。

魔法も使えないし、戦う術はおろか守る術もない。

なら、自己犠牲でも何でもするのは、さすがデバイスの鏡だ。

「待つんや、リン！」

リンは渡せへんで！」

…つと、これは驚きだ。

魔法使いにはかなりこたえるであろうこの状況で、こんなに早く喋れるまで回復するとは。

いや、単に無理をしているだけか？

まあ、此方としては目的の物さえ手に入ればいいので、成り行きを見守る事にしよう。

「はやてちゃん、大丈夫です。」

リンも主はやてを守る守護騎士の一人です。

だから、例え自分の身を差し出してでもはやてちゃんを守れるなら

本望です。」

「そかやて…」「それに!」「」

「私は信じてるのです。」

今私がさらわれても、はやてちゃんなら絶対に助けに来てくれるって。」

「リインフォース…」

「だから、行ってきます、はやてちゃん。」

「…必ず助けに行くさかい、待っとりな!」

「はいです!」

そう言って私に向き直る。

「夜天の書とシュベルトクロイツを持ってこっちに来い。」

「分かりました。」

でも、もう一つ要求があります。

はやてちゃんを管理局のいる世界に連れて行ってあげてほしいのです。」

「…わかった、良いだろう。」

少し考えたが、確かにこのままここに放置するわけにもいかない。

それを聞いて頷くと、彼女は此方に向かって歩き出した。

小さい体で身の丈ほどもある本と、小さくなったとはいえ半身ほどもあるデバイスのエンブレム。

それを背負って必死に歩いてくる姿は、どこか痛々しい。

もっとも、それでも止めるわけにはいかないがね。

「持ってきたのです。」

「そうか、なら頂こう。」

リインフォース？から目的の物を貰うと、ダークマターを使って虚数空間の塊を作り、それを縛る。

さらに、リインフォース？の首にも虚数物質で首輪を作って嵌めた。
これで、よほど強力な魔力で解除しない限り魔法は使えないはずだ。

「では、行くとするか…」

しかし…

（先生！）

「飛竜一閃！！」

…突然聞こえた念話。

そして、上空から八神はやての周りの障害物を破壊するために放たれた攻撃。

しかし、今は不味い。

（ダークマター）

「プラズマ掌握。 行け、グランドクロス 聖十字！！」

この量の虚数空間を一瞬で消すのは、如何にダークマターだと言っても不可能。

だから、虚数空間に当たった炎の連結刃はコントロールを失って、八神はやての周りの障害物を壊すだけでなく本人にまで及ぶか、倒壊して完全に破壊しきれなかった氷の柱が降り注いで彼女を傷つけるのは必至。

それに気付いたのか、リインフォース？も八神はやても真つ青な顔をしている。

しかし、ほんの一瞬の到達までの時間に虚数空間を動かして道を作るのは可能。

そして、掌握するのに一瞬を要するとはいえ、雷の魔法は刃が進むより圧倒的に早く、正確に高威力をたたきだす。

まさか彼女を倒すための魔法で助けるとは思わなかったが、この際しょうがない。

…もしもアリシア君が念話で叫んで教えてくれなかったら、間に合

わなかっただろうが。

「はやてちゃん！」

手元で叫ぶリインフォースを余所に、私は現状使える最高の魔法で連結刃を強制的に押し返した。

そして、即座に虚数空間を解除する。

「主はやて、お怪我は？」

「だ、大丈夫や……」

そんな事は露知らずに、平然と現れた炎の剣士は八神はやての下へと向かう。

それを見た八神はやてが一瞬恐怖を瞳に宿らせて炎の剣士を見たのはしょうがないだろう。

「貴様、私がない間にずいぶん好き勝手してくれたようだな。

しかし、私が来たからには主はやてに指一本触れさせません。大人しく投降するなら今のうちだぞ？」

「そのまえに、言うべき事があるんじゃないか？」

…もつとも、何も知らずに平然としている君には分からないだろうがな。」

「何？」

「言っちゃあかん！」

いぶかしむ彼女に本当の事を教えるのか、一瞬迷う。

しかし、後学のためにも教えておいた方が良さだろう。

「君は八神はやてを助けようと攻撃したようだが、大きな間違いだ。あそこは高密度のAMFが展開されていて、属性変換された魔力や物質は普通に通るが、それ以外の魔法の一切が無効化される…」

つまり、私が何もしなければコントロールを失った刃が君の主を傷つけ、最悪殺してしまっていただろうね。」

急に青ざめて主の方を振りかえる騎士。

しかし、その一瞬があれば十分。

「では、確かに目的の物は頂いていくよ。」

ついでに、最寄りの管理世界はディアボラだ。彼女の事は任せた。」

「はやてちゃん！」

「リインフォース！！！」

一気に距離を開け、発動するのは空間転移の魔法。

（アリシア君）

（先生、いけるよ！）

（よし、では例の地点で。）

一足先に飛んで姿をくらます。

長距離次元転移を繰り返して、私は目的の世界へと向かった。

後は、アリシア君が痕跡を消して、ダミーをたくさん置いてきてくれるだろう。

かなり巧妙に隠したし、痕跡もミッド式よりは古代ベルカ式に近い。
ミッド式の魔術師ではよほどの事がない限り分らないし、もしも
見つかって解析されても転送先の世界自体には何もない。

そこは只の入り口だから。

第11話：『夜天の書』奪取作戦（後書き）

書いてた分が消えた><

windowsのupdateまじできつい…

メモ帳で書いてたのに、いきなり保存画面出て、よく分からんからとりあえずキャンセルしたら強制終了><

もうちょっと分かるように告知してほしいわ。。。

というわけで、戦闘部分執筆中…

だったのが書き終わったのでUPしました。

文量が当初の予定より多くなったため、この後の帰還部分は次の話にします。

第12話：戦う者達の行進曲

「…来たようだね」

管理外世界でアリシア君を待っていると、空間の歪が出来てそこからアリシア君が姿を現した。

この転移魔法はミッド式ともベル力式とも、根源魔法とも違うオリジナルの魔法。

魔法の構成を完全に理解した上で、ミッド式のデバイスを使った高速演算を伴うことで初めて使える魔法だ。

現在の転移魔法の多くは対象を魔力で保護して次元空間をこじ開けながら突き進むが、この魔法は始点から終点まで移動ルートを先に作ってその中を移動する。

少しずつルートを構成しながら進む根源魔法の移動法よりも瞬間的に必要な魔力は増えてしまうが、総合的な必要魔力が少なく移動も早いというメリットがある。

さらに、ルートを形成することで次元空間への負荷を減らすため、痕跡を残しにくいのも利点だろう。

ミッドチルダでも使える人間はいるはずだが、莫大な知識とリンカ

「コアが有る事が必須なため、開発されてもほとんど役に立たない魔法だ。」

道具に頼り切っている… というより、デバイスがあればほとんどの事が出来る現環境では開発されても闇に葬られるか…

「それで、大丈夫だったかい？」

「うん。でも、敵魔術師^{シグナム}の転移に気づくのが遅れちゃった…」

「それは問題ない。 おおかた、夜天の書との繋がりが切れたため急遽戻ってきたのだろっ。」

「私のミスでもある。」

「うーん、でも、やっぱり任された事が出来なかったのはショック…」

「次から頑張ればいい。それに、とっさに声をかけてくれなければ間に合わなかった。」

「うん。次はもうちょっと早く気づけるように頑張る！」

気合いを入れるように作った拳を胸の前に置く。

それが微笑ましく感じるのは、自分の教え子が頑張っているのを見た教師のそれだろう。

この分なら、そのうち私をも超える魔法使いになるかもしれない。

なにせ、リンカーコアという生体魔法器官を持ち、全世界最高峰の知識と技術を惜しげもなく吸収して育ったのだから。

本来は生体の寿命が来れば死ぬ体だが、もともとの身体が人工物なのでメンテナンスはしやすい。

自分で修理するのはさすがに無理だが、私ならば2000年は余裕で持たせられるだろう。

本人が望むなら永遠の命を与えても良い。

もっとも、人としての生をまっとうしたいなら無理強いは出来ないが。

「それで、その子がリインフォース？？」

「ああ。」

優しく握った右手を開ければ、深く眠っている妖精があらわれた。

転移を悟られないために途中の世界で眠らせ、そのまま眠り続けてもらっている。

この調子なら帰るまでは起きないだろう。

「夜天の書だけ奪うんじゃないかったの？」

「当初はその予定だったのだが、どうやらこの子は夜天の書とリンクを持っているらしい。」

「リンク？」

「ああ。守護騎士たちは夜天の書に魔法のデータを送る事が出来るのは知っているね？」

「うん。」

「このデバイスは、さらに収集した魔法を発動できるようなんだ。」

「でも、夜天の書とは別に作られたデバイス何だよね？」

「ああ。そのため、最初は奪う予定ではなかったね。」

「どうしてそんな事が起こるの？」

「ふむ、詳しい事は調べてみなければわからないが、夜天の書のプログラムを流用したか、何らかの夜天の書のプログラムが混入したんだろうね。」

「…普通気づかない？」

「案外、気づいていて使わなかったのかも知れないね。」

収集自体はリンカーコアに直接回路をつないで魔力を根こそぎ奪い取るから負担が大きいから。」

それに、記録された魔法を使うだけならデバイスを使って魔法を使うのと大差なため、使っても分らないさ。」

「なるほど。」

そうして、未だに眠るリインフォース？を見る。

今は無いが、先ほどはこの少女もデバイスを持っていた。

あれが、魔法収集と行使の媒介になっている可能性は高いだろう。

それなら、プログラムを書き換えて夜天の書との結合を断ち切つてやればこの少女に用は無い。

元の場所に帰す事も含めて検討するか。

「さて、では帰るとするか。」

「うん。」

ダークマターを用いて大規模虚数空間に干渉する。

そして、次元空間に極小の道を開いて通り抜けた。

私の住む世界は虚数空間に囲まれているため、こうでもしないと入れない。

混沌に程近い異空間を通ればどこからでも出入り自由だが、簡単に異空間に入るための機械は現在大型の物しかなく、出るときに使用しても入る時は使えない。

さすがにすずか君の下を訪れるわけにもいかず、止む無くもつとも虚数空間の薄いところから道を作って帰った。

こんな方法が使えるのは現在私だけだろうな。

時空の扉を開いて帰った先は、訓練室代わりに使っている少し広めの部屋だ。

各所には根源魔法の魔法陣が書かれ、多少の魔法なら自然に防御するようになってる。

巨大な虚数空間を移動する際は道の確保と維持のために大規模な魔力の奔流を伴うため、この部屋以外に出るようなら精密機器に大小さまざまな問題が出るからだ。

もちろん、全てダークマターでやればいいのだが、実はこのダークマター、ある出力以上にすると暴走するのだ。

アルハザードが滅んだのはまさにこの暴走による物で、虚数空間の無限連鎖生成と、それによる過負荷で起こる誘導操作機能の麻痺は、私は死なないが止める事は不可能。

過去に起こした暴走では超高濃度虚数空間によって生命力を生成した瞬間に打ち消されるレベルまで行つて、魔法を使うための魔力どころか、生きるための魔力まで無くなって生物は死に絶えた。

さらに、暴走が奇跡的に下りたりミッターによって収まるまで何十年もかかり、その余波で現在の次元空間の1/4は虚数物質で構成された虚数空間になっているありさまだ。

あの暴走があのまま続いていれば、ダークマターが壊れるまで虚数空間が作られ、次元世界のほぼ全てを『生物のギリギリ生きられる程度』それすら不可能な程』の虚数空間に覆われただろう。

だから、おそらく可能だが、安全域を取って道を作るための小さなラインを作るだけに抑えるのだ。

…異空間を通ればこんな事なくて済むため楽なのだが。

「さて、私はこれから彼女をシステムから切り離そうと思うんだが、アリシア君はどうするかい？」

「私も手伝っていい？」

「構わないが、彼女に君の姿を見られるのは不味い。 ステルスを常時発動はできるかい？」

夜天の書が闇の書と呼ばれていた頃、フェイト君は一度蒐集されているため、そのデータを引き継いでいるなら、アリシア君の姿を見られるのは不味い。

八神はやてに返せるなら返してしまいたいし、もしも何らかの手段で脱走してフェイト君にばれれば厄介なことになるだろう。

そうならないためにも、見られないように細心の注意を払う必要があるのだ。

「多分大丈夫。 それに、もし見られても似通った他人の空似ってことで押し通すよ！」

「まあ、君が良いと言っなら良いがね。」

アリシア君も、昔は何度か会いたいと言って見に行っていたが、最近はずっかり妹離れしている。

今では魔法を覚えるのが楽しらしく、暇があれば研究や実験をしてときどき建物を吹き飛ばしている。

もともと片親が大魔法使いだったため、そういった気質を受け継いだんだろう。

そして、最近は私の実験を手伝って技術を頑張って盗もうとしているらしく、良く研究室に遊びに来ているありさまだ。

まあ、研究効率が上がって私としてはうれしい限りなのだが。

おかげで、たまにしか来ないずずか君やアリサ君と実力が拮抗しているが、それはそれで互いに切磋琢磨してくれればいい。

彼女らは彼女らで、ロストログアの回収をたびたび手伝ってくれているので、ありがたい限りだ。

「では、第2研究室の方で。」

「生体実験室？」

「あの部屋の方が融合型デバイスを扱うには都合が良いだろう。」

猛獣用の檻もあるしね。」

第2研究室は、別名生体実験室とも呼ばれ、主に生物実験を行う所だ。

改造生物や特定の生態兵器を扱う用の器具がそろっている。

また、何より殺菌と解毒が自動で行われる設備があり、時には解剖から治療まで幅広く用いられているところだ。

まあ、使うのは私とアリシア君だけだがね。

最初にアリシア君の体を治したのも実はここだったりする。

「まあ、夜天の書の解析は後ですとして、まずはこの子の方をどうにかしよう。」

「先生って、そういうところで優しいよね。」

「世辞を言っても何も出ないよ。」

「お世辞じゃなくて本気だよ?」

彼女の眼を見れば、一点の曇りもない純粹な目をしていた。

しかし、私はやさしいのだろうか?

…ただ甘いだけだと思うのだが。

「ふむ、それはすまなかった。

では行こうか。」

「うん、よろしく願いします。」

「こちらこそ、よろしく願いするよ。」

しっかりと頭を下げたアリシア君に軽くうなづくと、リインフォー
ス？を持って私は歩きだした。

アリシア君はステルスを掛けてから来るようだ。

さて、所変わって管理局。

八神はやてとその一行は空いている会議室の一室を占拠していた。

八神家のほとんどが集まるその場所には、しかし普段の活気は無い。

その空気はどんよりしていて、近づきずらいオーラを出していた。

「それで、リインの行方はつかめたんか？」

「いえ、現在も捜査中ですが、転移先を特定するのに時間がつかっているようです…」

「そうか…」

すでに何回目かの会話。

延々と繰り返される同じ内容。

だが、それを咎める者はいない。

そんな空気が延々と続くかと思われた頃、部屋を訪れる者があった。

「シャマル、出てくれる？」

「わかりました、はやてちゃん。」

…どなたですか？」

「私だよ、高町なのは。」

「なのは！」

この空気に耐えられなくなったのか、子供のように駆けだしてなのはにしがみつくヴィータ。

しかし、それとやかく言える人物は今はこの中にいなかった。

「それで、痕跡はつかめたのか？」

「ううん、現地で捜索活動を続けてたんだけど、転移の痕跡が複数あって難航してる。」

それに、辿ってみても何にもない世界につながってるだけで、正直現場はあきらめムードが強いかな。」

「すまない、教導の仕事があるだろうに頼んでしまつて。」

「気にしないで、私達の仲間だから、そのくらいお安い御用だよ！

でも、期待に添えそうもないけど……」

そう言いながら、なのはははやてを見つめた。

まっすぐに前を見てるけど、心ここに有らずという感じの姿は、見えていて痛々しい。

相当リインを失ったのが堪えたのか、はたまた魔法を使えなくなったのが効いたのか、もしかしたらその両方なのかもしれない。

でも、どちらにしろこのままではいけない。

はやてちゃんが現場にいるのといないのでは少なからず捜査に影響が出る。

それに、搜索を重視していたため証言をまだ聴取していなかった。

本来は担当の職員がいるのだが、被害者と顔見知りで、教導の心得から人心に詳しいだろうと言う事で今回はなのはが選ばれてここに来たのだ。

魔術師ランクSSのトップクラスの局員には普通の職員では恐縮して話にならないのも理由の一つだが。

そのため、彼女から話を聞いて本格的に始動するため、高町なのはここに来たのだった。

だから、まずははやてちゃんに活を入れる必要がある。

「はやてちゃん。」

「なんや、なのはちゃん。」

「しっかりしないとダメだよ？ はやてちゃんがやらないで、誰がリインを助けるの？」

「…っ！」

何かを思い出したのか、突然頭を抱えた八神はやて。

その時思い出されていたのが、別れ際にリインフォース？の言っていた「はやてちゃんが助けに来てくれると信じている」という発言だったのは、まだ誰も知らない。

「私も協力するし、管理局員も総出で対処する。」

それに、フェイトちゃんやティアナも何かあったら駆けつけるって
言ってくれてる。

だから、諦めないでがんばろ。」

「なのはちゃん……」

「うん。」

しつかり強く頷けば、少しは瞳に活力が戻ってきた。

八神家の他のメンバーも安心しているし、ここから先は大丈夫だろう。

だから、事情聴取に移る事にする。

「それで、犯人と事件の概要を教えてください。」

「分かったわ。」

まず、私は前日から聞かされていた管理世界の視察任務に向かった

んや。

その時はシグナムもリンも一緒に、あんなことになるとは思っても
せえへんかった。

でも、いざ転移されてみると、それは別の世界やったんや。

現場となつたあの世界…

荒野と遠くに森や町の影が見える所。

私は、とりあえず情報集めるために人のおる方に向かったんや。」

そこで、シグナムが軽くそこに向かうことになった経緯を説明する。

まあ、妥当な判断だろう。

「しかし、町についても無人の破棄された場所やった。

周辺に町も無いし、ここで留まるわけにもいかんかった私たちは、
シグナムに周辺世界の捜査を頼んだんや。

みんなで一緒にいかへんかったのは、他の人も転移させるとシグナ
ムの消費が増えるさかい、長期的に滞在することになったら厄介だ
と思つたからや。

今思えば、誘い込まれたのに現地にとどまるなんて軽率すぎたとおもとる。」

一瞬顔をしかめるが、それは結果の問題だ。

私でもその場にいたらそうするだろうし、到着からしばらく襲撃が無ければただの転移ミスと勘違いするのかもしれない。

そこまで犯人が仕組んでいたのなら、相当なものだろう。

「それで、シグナムが転移してから私達は食糧探すために森の方に向かったんよ。」

そんで、しばらくはリインに探索魔法で捜査してもらいながら危険が無いかわりとったんやけど、途中でいきなりリインが振り返って、そっちを見てみれば森から黒い男の人が出てきたんやわ。」

黒いズボンと厚手のコートを纏い、独特の雰囲気醸し出した男。

眼鏡をかけ、髪を伸ばしていたけど、髭は長かったからもしかしたら女なのかもしれないという。

声も中性的で、右手の人差指に金色の指輪。左手の薬指に黒い指輪をはめ、赤い腕輪を両手にはめていたという。

「む…」

「どうした、ザフィーラ？」

何か考えるそぶりを見せたザフィーラに注目が集まる。

しかし、その狼は首を横に振って、続けてくれと促した。

疑問は残るが、とりあえず一通り話を聞くことにする。

「それで、その男に3つ質問されたんや。

『リインの持っている蒼い本は何か』

『シュベルトクロイツは何か』

『夜天の書は完成しているか』

無難に回答したんやけど、そしたら3つともよこせと言ってきた。

私はもちろん拒否して戦闘に突入。

でも、そこで信じられへん事が起こったんよ。」

発動した拘束魔法は全て不発。

ひそかに回り込ませていた誘導弾も、近づいた瞬間無音で消えた。

そして、敵から放たれる炎の球体。

「真正面から直線的に来るそれを迎撃したんやけど、その瞬間何の魔力反応もせえへんかった所からいきなり魔法が飛び出して当たったんや。」

そこで、その隙について放たれた氷の魔法。

それでもって、私の周りには氷の柱が縦横無尽に出来て動きを制限したんやわ。」

これだけでも十分予想外。

予備動作もデバイスも無しに、こんな事をしてのける魔法使いはほんとにいない。

あるのは、デバイスを隠し持っているか生体内に埋め込んでいる可能性だが、どう考えたって正面の相手の魔力反応は0。

それで、こんな広範囲に氷のオブジェクトを作り上げるのはまさに奇跡だった。

「で、そのすぐ後にもっと驚いた事が起こったんや。」

氷のオブジェクトの乱立直後、相手が「受け身を取った方が良い」という訳のわからん事を言って身構えると、突然浮遊魔法がキャンセルされてすぐ下の氷の床に墜落したそう。

「もしも下に氷の床が無かったら、一番下まで落ちて受け身なんて取れる状態にはならなかったやろな。」

「私が主はやてとのリンクに異常を感じたのがそのあたりですね。すぐに戻りましたが、もしかしたら死んでいるのではないかと内心恐怖を感じました。」

「うん。なんか、超高濃度のAMFみたいな状況になって、私でも魔法が使えなかったんよ。」

それに、飛行魔法をもちど使おうとすると、リンカーコアから魔力が全部吸い出されて急激な疲労感に動けなくなったんやわ。」

何と言う魔術師殺しだろうか。

魔法のキャンセルと魔力枯渇。

これでは、魔法使いに勝ち目はない。

それなのに、相手は好きなように魔法を使えるというのは、勝負にすらなっていない。

「それで、リインフォースとのユニゾンも解除されて、さらには氷のオブジェクトの外に電気の塊みたいなのが浮いて攻撃しようとするんが分かった。

とっさにリインがかばってくれなければ、電気で感電させられていたか、最悪ショック死しとったかもしれへん。」

感電させるだけなら最初から電気の魔法を使っておけばいい。

それをしなかった理由は分からんけど、何らかの不利益が有ったのか？

「それで、リインが夜天の書とシュベルクロイツを持って行って、黒い塊に拘束されてしもたんよ。

そこにシグナムが駆けつけてくれたんやけど…」

そこで、シグナムとはやての間に気まずい雰囲気が出る。

しかし、事情聴取に来たため聞かざるを得ない。

話してくれると信じて待つと、シグナムが私が言おうと申し出てくれた。

「あ のとき、戦域の上空に現れた私は、捕まっているリインと主はやてを見つけた。

しかし、捕まっているだけのリインに対して、主はやては氷の建造物のご真ん中に閉じ込められ、周りに電気の塊が4つも浮遊している。

そのため、先に主はやてを助けることにした私は、飛竜一閃で氷を薙ぎ払おうとした。

しかし、それは敵の放った雷の魔法… グランドクロスと叫んでいた技で跳ね返された。

いそいで駆け付ければ主はやてが蒼い顔をしているし、主はやてを守る事が優先と判断した私はその場にとどまって敵を睨みつけた。

しかし、私は知らなかったのだ。

私の到達する直後まで、その場所が高濃度のAMFに満たされていたと。

もしもあいつが魔法を使わなければ、コントロールできない刃が主はやてに牙をむいたかもしれん。

そうしたら、最悪主は…っ!」

悲痛な面持ちのシグナムをはやてがなでる。

他のメンバーもこの話は初めて聞いたのか、なんとも言えない表情でそれを見ていた。

ヴィータに至っては一瞬飛びかかろうとしたのか、身体が震えたがすぐに収まった。

自分でもその状況ならそうした可能性もあったと思ったのもあるが、めったに見る事のないシグナムの涙を目の当たりにしたのも大きいだろう。

「私は気にしとらんさかい、そんな気に病む必要はないんよ、シグナム。」

結果的に、私は無傷で生きとるんやし、あの状況でそんなん分かる人間なんか誰もおらへん。

それに、相手が運よく魔法を使って守ってくれた。

この点だけはあの人に感謝だな。」

「しかし、主……」

「ああ、もう、うつとうしいぞ、シグナム！」

そんなに悔んでるなら、頑張ってリインを助け出す方法でも考えろよ！」

「ヴィータの言う通りやで、シグナム。

悔むんは後でできる。今は行動や。

まあ、これは私にも言えるんやけど……」

はやての頬が少し赤いのは、つい先ほどまでの自分を思い返して恥ずかしくなったからか。

でも、とりあえず話を最後まで聞かないと。

そう思って話をすれば、あとはシグナムにその事を伝え、一瞬の隙を作った相手が逃亡しただけらしい。

最後にリインがはやての事を呼んだが、次元空間に逃亡したのは分かった。

「主はやて」

「なんや、ザフィーラ？」

「その男は、こう名乗っていませんでしたか？ 『次元世界の管理人』と。」

「……！！」

その通りや。 なんか知つとるんか、ザフィーラ？」

「その男は…… いや、正確には男か女なのか分からない奴は、古代ベルカでも目撃例が数件あるのです。」

「それは、ホンマか？」

「はい、都市伝説の域に達するような情報なんですが、実際公式の記録にも何件か報告されています。」

さらに、目撃されるたびに同じ容姿をしていることから同一人物ではないかと言われたり、出現の間隔が数年から数百年空いている事もあり、別人が同じ姿をしているだけだという人もいます。

しかし、真相は分からなかったのですが……」

古代ベルカの都市伝説。

危険な技術や違法の最先端施設を稀に襲撃しては、何かを盗んでいく魔法使い。

山奥の秘密の施設から、中央の研究機関、地方の一般民家など、その目撃例は数多く、一度は当時の聖王と直接対決をして勝ったという恐るべき強さを誇る。

「って、ちょっと待ってえな。聖王は古代ベルカで当時の一番強い人になったんちゃうの？」

「正確には、最高の魔力を持つって生れてくる最強の存在です。

一応、時代ごとに政治に長けた方や戦闘に長けた方がいましたが、強大な魔力と圧倒的能力が一番の武器なので、周りを気にしながらの戦いはどちらかといえば苦手な部類に入ります。

もともと、周りの人物よりは圧倒的に優れていますが。」

「それでも負けたんか？」

「公式記録からは抹消されていますが、確かに一度戦って負けてい

ますね。」

「そんなん、勝ち目ないやんか。」

「…しかし、当時の記録では魔法無効化の報告はありますが、魔法を使ったという報告はありません。」

その当時は1本の棒を振り回して聖王と戦ったはずです。」

「棒？」

「魔術スペルの刻印された白亜の美しい棒です。」

それで叩き、突き、薙ぎ払って聖王を苦しめたと聞いています。」

「…私と戦った時は本気じゃなかったっちゅう事か？」

「断定はできませんが、おそらくは…」

「魔法は効かず、一方的に魔法を使い、接近戦は聖王より強い…」

もしもそれが本当なら最強ちゃうやろか？

しかも、いったいどれだけ生きとるんか想像もできへん。」

しかも、それと戦わなければならなくなれば、気が滅入るだろう。

「大丈夫、はやてちゃん？」

「なのはちゃん… うん、私は大丈夫よ。何としてもリインを取り返すって決めたんやし、私は一人やない。」

最強の守護騎士がついとるさかい、負けることなんてあらへんよ。」

「そう、だね。」

「じゃあ、私はこれから報告に行くけど、この話は全部話していいの？」

「うん。こっちから頼んどるのに隠し事はしとくない。」

それに、相手の事が分からんのに戦えるはずもないけん、ありのままに全部伝えてえな。」

「わかった。はやてちゃんも頑張つてね。」

「ありがとうな」

そう言つて、私は部屋から出ていきます。

あとは、はやてちゃん達の話し合い。

相手がすごく強い事は分かったけど、それでも負けるわけにはいか

ない。

友達のため、私も全力で頑張らないと。

第13話：少女の悩みと新しい提案

「う、ここは…」

重い目を開ければ見知らぬ天井。

って、そついう落ちですか？

「リインは… 捕まったのですか？」

「その通りだ。」

振り向けば、白衣を着た知らない男の人がいたのです。

いや、あれは… 私をさらった人！！

とつさに跳び起きて距離をとり、周りを見回します。

さっきは気づきませんでした。私は上と前後左右が鉄格子になっている牢屋の中で寝かされていたようなのです。

寝る前の事を思い出そうとしてももやがかかってよく分からないので、強制的に眠らせられたのかもしれないのです。

じっとして様子を見てみると、その人はコンソールをたたいて何かしているようです。

後ろを向いているのでここからは良く見えませんが、何をしているんでしょうか？

「しばらく待っていてくれ。もう少しでひと段落つきそうなんだ。」

「はいです。」

と、思わず素直にならずいちゃいましたが、これはチャンスじゃないでしょうか？

調べてみたら、多少の魔法は使えるようなのです。

今あの人を攻撃すれば、確実にダメージを負わせられるのです。

その間にここから逃げれば…

（やっぱり無理なのです。）

あの人を倒してもここがどこか分からなければリンにはどうしようもないです。

それに、この牢屋から抜け出せないですし。）

そう思っていたら、どうやらひと段落ついちゃったみたいなのです。

男の人は振り向いてこっちに来ました。

「やあ、自己紹介はすでに必要ないかな？」

「あなたは誰で何の目的で私をさらったのですか？」

一応、戦闘中に次元世界の管理人と名乗っているのは聞いたのです。

でも、私の知りたいのはもっと別の事。

私をさらってどうするつもりなのかです。

「ふむ、現状あまり喋り過ぎるわけにはいけないから、短的に言おう。」

私の目的は夜天の書だ。」

「夜天の書？」

なぜ夜天の書を狙うのでしょうか？

闇の書だった時と違って、今の夜天の書は只のデバイスなのです。

プログラムのほとんどを失って、残っているのは蒐集や行使の簡単な能力とはやてちゃんが調節したオリジナルのプログラムだけ。

どちらも管理局に敵対してまで欲しがる能力とは思えないのです。

でも、答はその内の一つだったのです。

「その蒐集と行使の能力を奪うために今ここにいます。

だから、その能力を君から奪えば、君だけは八神はやて君の下へと返しても良い。」

「ほんとなのですか！」

蒐集と行使は現状ほとんど使っていない能力なのです。

一応、行使は使っているものの、蒐集は相手に与える負担が大きすぎて使えないのです。

それに、行使もすでに内容をコピーしたから、普通に覚えれば良いだけなのです。

だから、それなら必要ないのです。

「ああ、元よりそのつもりだ。

だから、それが終わるまで君を監禁させてもらっよ。」

「わか… いえ、ダメなのです！

あのプログラムは夜天の書から受け継いだ大事な形見なのです。

だから、絶対にとっちゃだめです！！」

でも、危うく納得しちゃいそうでしたが、夜天の書の蒐集と行使は大事な形見なのです。

もしも取られちゃったら、はやてちゃんが悲しむのです。

それだけは避けないといけないのです。

それに、はやてちゃんの覚えていない魔法を使えるという点で、行

使は役立つ時もあるのです。

その機能を捨てるのは、デバイスの一存ではできないのです。

「ふむ、プログラムを消去するには君の権限でアクセスを許可してもらわなければならない。

そうしなければ、プログラムの内部にある他のプログラムまで影響を与えてしまう。

例えば、君自身とかね…

それでもやってくれないかい？」

「何と言われようと絶対に私が守るのです！

はやてちゃんが悲しむ様な事は出来ないのです！」

狭い牢屋の中だけど、出来る限り距離を取ります。

そして、自分を守る手段を考えるのです。

「ふむ、私としては君自身を壊したくは無いのでね、それがダメな

ら強制的に死ぬまでここに監禁することになるがいいかい？」

「絶対に私は無事にはやてちゃんの下へ戻ると決めてるのです。

それは、はやてちゃんとの大事な約束なのです。」

そういうと、少しその男の人は迷ったようだったけど、結局はそのままにしてくれることになったのです。

何か意図があるのか、またはたんに優しいのかはまだ分かりません。

「それでは、まずは君の部屋を用意しよう。

さすがにその檻の中で暮らすのは嫌だろう？」

「そんな事をしていいのですか？

逃げるかもしれないのです。」

「逃げられないさ。

外は魔法の使えない無魔力空間。

獯猛な獣と異端な魔法生物の徘徊する地獄。

空間転移の魔法は周囲を虚数空間に囲まれているため使えず、施設から出れば獣に食い殺されるまさに地獄だ。

それでも出ようとするなら止めないが、命の保証はないよ？」

「…っ！」

そんな事言われたら逃げれないのです。

魔力はいつの間にか十分に回復しているけど、はやてちゃんとのリンクが無い今、補給はできません。

それに、出来たとしてもリイン一人では戦闘をこなすのはほぼ不可能です。

でも、まだ諦めません。

必ず方法はあるはずなのです。

なにせ、目の前の男の人は実際にことと外の世界とを行き来しているのです。

それに、目の前の男の人は蒐集と行使の能力さえ渡せばリインを帰すと言ったのです。

なら、その秘密を掴めばリインでも外に出る事なら可能かもしれないのです。

「まあ、とりあえず部屋へ案内する。

ついてきたまえ。」

男の人の後について廊下に出ると、何かの機械があったのです。

そして、それに乗り込むとケーブルがあらわれて巻きつき、勝手に動き出したのです。

あの人の体にも巻きついていくという事は、危ないものではないみたいなので少しは安心なのです。

「それで、これからの事だが。」

いきなり話だしたので驚いて振り向けば、その男の人はじっとこっちを見ていたのです。

迂闊でした…

「君の体は眠っている間に調べさせてもらった。

それで、君が許可さえしてくれれば私はすぐにでも君を返す事が出来る。

しかし、もしも知ってはならない事を知ってしまった場合は別だ。

その場合は例え能力の削除をしても、君を主の下へと帰すわけにはいかなくなる。

だから、許可したエリアを超えて動き回るのは自粛してもらいたい。

逆に、もしも君が全てを知りたいなら、私は教えよう。

ここから出られなくなるがね。」

なんとなく聞いてましたが、これは結構重要な内容な気がするのです。

リンの中の直感が、この人は敵にしちゃいけないと言ってるのです。

何か分からないけど、見透かされているような、大きな何かに向かっているような不思議な感じがするのです。

「まあ、時間はたっぷりあるし、ゆっくり考えると良しさ。」

そういうや否や、私達の体に巻かれていたケーブルがほどけました。

意外と早く着いたみたいです。

部屋の入り口には大きなドアがあって、その横に認証位置と書かれた囲いがありました。

「ここが君の部屋だ。」

特別な認証プログラムを使っているため、プロテクトを解除しなければ私でも入る事が出来なくなっている。

この板の上に乗ってくれるかい？」

「…分かったのです。」

扉の横の壁にはほんの少しの出っ張りがついていて、その上に乗ればセンサーが反応したのか、扉を開けますかという確認文章が出たのです。

「そのボタンを押せば扉が横にスライドして開く仕組みになっている。」

「なお、内側からは扉の内壁に触れれば勝手に開くようになってい

る。」

「あの、なんでこんなややこしいシステムになってるのですか？」

「普通逆ではないでしょうか？」

目の前の男の人が認証しなければ、私にはあける事の出来ない扉。

それが、普通は監禁する場合の扉のはずです。

でも、これでは私を守るための扉に見えるのです。

「なに、どうせこの世界から出れないのに、そこまで警備を厳しくするつもりはない。」

それより、君自身のプライバシーもあるだろうからそれに考慮した結果だ。

何か問題があるかい？」

「…いいえ、無いのです。」

「なら、とりあえず中に入ろうか。」

そう言っすぐには入っていつちやいました。

プライバシーを守るんじゃないかなかったのでしょうか？

あ、でも、まだ私は住んでないから良いのですか？

とりあえず、私も中に入ってみることにしたのです。

そして、一番最初に見たのはどの王族か貴族かというほどの金銀財宝。

ベッドは屋根付きで、金のフレームに色とりどりの宝石が満天にちりばめられ、繊細な彫刻が掘られたのはまさに豪華極まりないです。

そして、その上には真っ白な布団が敷かれ、柔らかくて気持ちよさそうな匂いがするのです。

さらに、部屋の中にはシャンデリアや化粧台、クローゼットも置かれていて、地面にはフカフカな絨毯が余すことなくひかれています。

そして何より、それら全てがリンにちょうどいい大きさのミニチュアサイズになっているのです。

部屋には窓が無いのが残念ですが、そこはまるで一流のホテルの一室のようになっていたのです。

「この程度しか用意できなかったが、他に必要なものはあるかい？」

「えっと、これは何の冗談なのですか？」

「冗談？ 私はいたって本気だが？」

真面目な顔で返され、どうしていいのか分からないのです。

目の前のこの人は金銭感覚がくるっているのでしょうか？

でも、廊下や研究室みたいな所は無機質だったのに、いきなり豪勢になるのはどうしてでしょう？

「ふむ、金銀財宝はお気に召さないかな？」

「正直、ここで寝られる自信は無いのです……」

あの布団は気持ちよさそうだけど、こんな部屋に1日中いたら気を使い過ぎて狂ってしまいそうです。

「もっと普通の部屋は無いのですか？」

「普通とは、どういう感じかね？」

「こんな金ぴかじゃなくていろんな色で、宝石が付いていなくて簡素な感じの…」

「ふむ、どんな家具が良いのか分からないので、今度君のイメージをデータで送ってくれ。買い直してくるので。」

それまではこの部屋で我慢してくれないかい？」

「が、我慢なんてとんでもないのです！ でも、良いのですか？ 私のために…」

「なに、金は無限にあるから気にする心配は無い。」

では、後は生活のために必要なスペースを用意しよう。

あと、先ほどの乗り物の使い方を教えるから、覚えておくと良い。」

「分かったのです。」

そう言って、私は無意識に笑っているのに気づいたのです。

最初に思ったより優しい人みたいで良かったのです。

思えば、一応この人ははやてちゃんを助けてくれた恩人でもあるのです。

だから、悪い人じゃないと思いたいのです。

「それでは行くのでしょうか。」

「はいなのです！」

こうして、私の新しい生活は幕を開けたのです。

あれから数日たったのです。

結局、私はまだどうするか悩んでいます。

この世界から自力で抜け出すのは、どうやら諦めないといけないのです。

色々試したけれど、虚数空間を魔法で渡るのは無理だったのです。

それに、出口らしい場所は立ち入り禁止と言われ、近くに監視カメラも見えたから、もしも入ったら一発ではれるのです。

さらに、ここの廊下を走ってる機械や壁の中の機械を調べましたが、リンの知識では到底理解できないものばかりでした。

これでは、もしもあの扉の奥に出口があっても、見つかるまでに通じ抜けられるとは思えないのです。

でも、蒐集と行使は前の夜天の書の管理人格から受け継いだ大事なものの。

それを勝手に捨てるのは、やっぱり私だけでは決心できないのです。

このままここで暮らすのも嫌だけど、もうどうにもならない気がしてきました。

だから、逆に全部聞いてしまうのも一つの手かもしれないのです。

でも、それははやてちゃんとの生活を捨てると言う事。

それは、私には無理なのです。

どっちも決められないまま、私はどこか気晴らしになりそうな場所にでも行ってみようと思いました。

「機械さん、どこか気晴らしになりそうなところまで連れて行ってほしいのです。」

そう呼びかければ、後は勝手にどこへでも連れて行ってくれるのです。

確認したら、これが連れて行ってくれる場所に立ち入り禁止の所は無いかから好きに行っていていいそうなのです。

だから、私は今日もどこかで暇をつぶそうと思って機械に乗り込ん

だのです。

「え、ここですか？」

そして着いたのはガラス張りの扉の前。

その奥にさらにもう一つ同じ扉があつて、さらにその先は分暑そうな扉に守られているのです。

これは、勝手に入って良いんでしょうか？

「……いい、良いに決まってるのです！」

この機械の連れて行ってくれる所に立ち入り禁止の所は無いってあの人は言ってたんで、きっと大丈夫なのです！」

近くに監視カメラも無いし、鍵もかかつて無いようなのです。

なら、勝手に入ってもきつと大丈夫なのです。

そう思つて、ちょっと威圧感のある扉の前まで行くと、私はその奥に足を踏み出したのです。

「わぁ……」

そして、そこに待つてたのは眩しい光。

たった数日浴びてないだけで酷く久しぶりに感じるそれに、私は思わず目をつぶってしまったのです。

でも、だんだん慣れてきたので目を開けてみると、そこには大きな太陽と一面のお花畑が見えたのです。

「これって、お外ですか？」

太陽と花の楽園は、地平線まで続いています。

地球で見た蝶のような物や、蜂のようなものが飛び交つて花の蜜を集めていたり、地面から出てきた何かがびっくりしたように戻って行ったり、突き刺すような太陽を見れば、その向こうに蒼い空と白い雲が浮かんでいたのです。

「驚いたかい？」

「え……」

後ろを振り返ると、いつの間にいたのかあの男の人がいたのです。

でも、前見た時のような白衣じゃなく、茶色い前掛けをして軍手をはめ、何かの作業をしているのです。

その目線の先にはあの移動するときの機械のようなものが置かれ、たくさんコードやパネルを触って何かしているのです。

でも、作業途中のそれがひと段落したのか、工具や部品を纏めて立ち上がったのです。

「ここは、私が試験的に作った箱庭だ。」

「箱庭？」

「そう、本来この世界は虚数空間に埋まっている。

そのため、弱い生命はすぐに消え去り、非常に強い生物だけが僅かに繁栄する荒廃した大地が表土を覆っている。

しかし、そんな世界にも美し命の営みを蘇らせる事が出来るかもしれない。

私は、そう思っただけを作った。」

「ここは、お外なんですか？」

「いや、屋内さ。」

だが、圧倒的な広さを誇っている。

この部屋について詳しく知ると、君を帰す事が出来なくなるため言わないが、技術の結晶だと思ってくれ。」

「わ、分かったのです。」

そう言っただけで、無言で歩いていくあの人の。

でも、数歩歩いたところで私を振りかえったのです。

「今、ちょうど休息にしようと思っていたところだが、良ければ来ないかい？」

「行くです。」

とりあえず、訳も分からぬまま追いかけてみたのです。

その道中に気付いたのですが、さっきは入ってきた扉はまるで薄い板のようにそこにあるだけで、その後ろに建物は無かったのです。

どういう技術を使えばこんな風になるのか不思議ですが、それは後で考えるとして、とりあえず見失わないようにあの人の後を追いかけるのです。

「リインフォース？君は紅茶は飲めるかい？」

「リインで良いのです。　お願いするのです。」

「分かった、そこに腰かけて待っていてくれ給え。」

連れて行かれた先にあったのは、赤い屋根の小さなおうちでした。

煙突があつて、窓辺に小物が置いてあるのは、ちょっとかわいいのです。

そして、そのおうちの外に白いイスとテーブルがあつたのです。

私はどうしようかと迷いましたが、結局テーブルの隅にちょこんと座って待つことにしたのです。

「ここは、いったいどこなのでしょう？」

あの建物の中は無機質過ぎて、生活感の欠片も無いところだったのです。

でも、ここはまるで普通の世界のように暖かく、穏やかな時間が流れてるのです。

だけど、今まで見てきたどんな生き物とも違う別の生き物がたくさんいて、それが独自の生態系を築いているのを見ると、ここは別の世界だと実感するのです。

「やあ、待たせたね。」

そんな事を考えていると、男の人がカップとポットを持ってきます。

それを机の上にそつと置いて手早く準備するのは、結構慣れていると感じさせたのです。

そして淹れられたのは、ハーブティーなのでしょうか？

今まで嗅いだ事の無い心地よい香りが辺りを満たすのです。

「これは、ここで取れた植物から作った紅茶だよ。少々熱いから気をつけて飲んでくれ。」

「ありがとうございます。」

紅茶のカップはどこにあったのか、一番小さいのを使ってくれているようなのです。

だから、私でも辛うじて自分で持って飲む事が出来るのです。

「どうかね？」

「なんか、甘い香りがするのです。それに、体の芯からほんわか暖かくなるのです。」

「そうか、それは良かった。」

私はずいぶん気に行ってるのだが、私以外はもっとしっかりした味が好みの子が多くてね。

初めて賛同してもらえてうれしいよ。」

につこりと笑って自分も紅茶を一口飲みます。

そして、心地よさそうに息を吐き出しました。

それが、どことなく子供のように見えたのは、私の気のせいでしょうか？

「研究の合間にね、ここに来るのが私の楽しみなんだ。」

「お外が恋しくなるのですか？」

「それもあるがね。」

やはり、自分の育て、守っている物を実感できる場所だからかもしれない。

こんな人間だから一人でずっと暮らしているけど、やっぱり命が恋しくなるのさ。」

その瞳は遠くを見つめているようで、追いかけてみれば空を飛ぶ一羽の鳥が見えたのです。

でも、その鳥は旋回すると、すぐにまた別の方へ飛び去ってしまっただです。

「だれか訪ねてきたりはしないんですか？」

「偶に来てくれるよ。」

それに、もう一人ここに住んでる子もいる。

でも、それぞれがもう一つの暮らしを見つけてからは、仕事でしか会わないからね。」

どこか遠くを見つめる瞳は、ちょっと悲しそうでした。

暖かかったところを思い出しているのか、はたまた親離れしていく子を惜しんで見送る親か。

この人もこういう思いを持っていると思うと、少しだけ好きになれそうな気がするのです。

「リン君、私はあまり優れた人間ではない。」

「はい？」

「もう、ずいぶん長い事ここにいたせいか、心も体も錆びついて

しまっている。

温もりをもらってもそれをどう返せば良いのか分からない。」

「……」

「しかし、それでも私は恋しいと思うし、笑顔を求めている。

だから、私は君にここから出ていってもらいたいんだ。

…私のようになる前に。」

とつさに言われて良く理解できなたっかけど、それは決心のような物なんだろうか？

ずいぶんと悩ましい顔つきで言われたのです。

「…それは、私のためなのですか？」

「そうだと私は信じたい。」

そして、何よりも私自身のためでもある。

ここにいれば君は腐ってしまう。

そうなる前に元いた暖かい場所に帰ってほしい。」

そう言つて、真剣な目を向けられます。

それは、すぐるような視線。

決まつた答を切望している顔。

もしかしたら、それは作りものかもしれない。

私をだまして力を奪つための物かもしれない。

でも、私は思つたのです。

この人を信じたいと。

「でも、私は決められないのです。」

…力を捨てる事を。

「これは、自分の弱さなのかもしれないのです。

この力が無くても、きっとはやてちゃんを私を家族として受け入れてくれるのです。

でも、それが無ければ今までのように必要とされないかもしれないのです。

そうしたら、私はどうやって生きていけばいいんですか？」

それは、ここ数日色々と考えた末にたどり着いた本心。

そして、必死に言い訳をして考えないようにしてきた真実の想い。

ここで、打ち明けてどうにかなると思えません。

でも、私は言わなければならないような気がしたのです。

すると、あの人は何かつぶやきながら考え出したのです。

ちょうど良いので、私も自分の気持ちに整理をつけたいのです。

でも、相談相手が私から見たら敵の立場にある人と言つのはどうなんでしょう？

「なら、2つ…。」

…2つ約束してくれるなら、私は君にチャンスをあげよう。」

「チャンスですか？」

「ああ。」

けれど、何かほかの手段が見つかるかもしれない。

そう思つて、結局聞くことにしたのです。

「一つは、必ず一度はここへ帰ってくるという事。

もう一つは、ここで見て、聞いて、体験した事は誰にも話さないと

いう事。

それを約束してくれれば、私は一度君を八神はやての下へ帰そう。」

真剣な表情で答えられたのは、思いがけない答。

でも、それはとてもうれしい内容…

短い時間だけど、はやてちゃんに会える…

もう会えないかもしれないと思っていたここ数日が嘘のように、晴々とした気持ちになったのです。

「でも、良いのですか？

私が約束を守ったかどうかなんて、分からないのですよ？

それに、嘘をついて逃げるかもしれないのです。」

「まあ、最悪ばれてもそうそう危険な技術は知られていない。

それに、帰ってこないようならまた力づくで奪えば良い。」

簡単な事のようにこの人は言いますが、それはとっても難しいのです。

管理局は全世界で最大の組織なのです。

その本拠地にいる人を攫うなんて、ほとんど無理な話なのです。

もしかしたら外に出た時に襲うのかもしれませんが、いつ出てくるかもしれないのに待つのは大変だし、誘拐される可能性があるとは分かっているなら必ず誰か護衛をつけるのです。

A F Mがあるかもしれないですが、それも道具である以上は万能ではないでしょうし、一度使っているならはやてちゃん達が対策を考えているはずなのです。

だから、私はそういったのです。

でも…

「君は、少し私の力を見誤っている。

私は、その気になれば全次元世界を葬り去るだけの力を有している。

管理局程度は相手にもならないさ。」

「そんなに強いのですか？」

「ああ。もともと、制御できない力だからめったに使わないがね。」

そう言って見せてくれたのは、7色の輝きを放つ指輪でした。

それがなんなのかは分かりませんが、本能がこれはダメだと警告しているのです。

これは何なんでしょうか？

「それに、私は君を信じているしね。」

そう言われ、驚いてこの人の方を向けば、目があったのです。

その瞳は澄んでいて、まるで心の奥底まで見透かされているようなのです。

でも、さらに奥には小さなぬくもりが息づいているように感じたのです。

「期限は1週間だけだが、どうする？」

「ぜひ、お願いしたいのです!!」

もしかしたら何かの罠か目的があったのかもしれないのです。

でも、どう考えても私にとって都合のいい内容だったのです。

だから、私はしっかり頷いたのです。

これで、後戻りはもうできないのです。

第13話：少女の悩みと新しい提案（後書き）

とはいえ、この小説ではリイン 〓 リインフォース？の事です。
一部リインフォースって書いた気もしますが、それも同じです。

ちなみに、リインフォース 〓 闇の書の管理プログラムだった方
ですね。

今はまだ出てないけど。

そのうち統一するかも？

第14話：間幕の諸事

世界には闇がある。

それは、光の裏に確かに存在している。

それが、見えているものはまだいい。

見える闇は明確な恐怖と危機意識を与えるから。

しかし、それが光の陰に隠れると、とたんに誰も気づかなくなる。

そうすれば、闇はじわじわと光をむしばみ、いつしか自然に人の心に紛れ込んでいる。

この世界において、最高の光は現在管理局だ。

人々はその正義を信じて疑わず、誰もが管理局のために働く。

管理局も、少なくとも表層は綺麗な光に満ち溢れ、華々しい功績を

あげた者達が出世と報酬を得ていく。

しかし、その裏は酷いという言葉では言い表せないほど淀んでいる。

大量のロストログア所持による絶対権力。

それにしがみつく事で、管理局の上層部はほとんどやりたい放題だ。

まだ、半数はまともな人間がいるが、それも年を重ねるごとに減り続け、最高評議会の下にあった一大勢力が無くなっても、根本的な改善は見込めない。

そして、そんな勢力の下に、一つのロストログアが運び込まれた。

銀色の鎖が巻かれた古い魔法書。

古代ベルカのエンブレムが取り付けられたそれは、見る人が見れば

夜天の書と見間違っほどよく似ていた。

しかし、それに気づく者はいない。

なぜなら、そこに集まったのは悪徳貴族や権力者などの道楽家ばかりだから。

もちろん、八神はやてについては知っているものも何人かいるし、闇の書という物を知っているものはいる。

しかし、闇の書の形状まで詳しく知っている人間も、八神はやてのデバイスの形状を一つ覚えていたものもいなかった。

…それが、良かったのか悪かったのかは分からなが。

そして、そこで行われるのは一つのオークション。

管理局でも使えないとされたロストログアを、金持ちに売りつける
と言つ所詮は違法な物。

本来は、専門家が見れば闇の書と見間違えるほどの危険な物が出る
はずがない。

しかし、運悪くこれを鑑定した鑑定士が無能だった。

さらに、これを流した管理局の権力者も、売らずにお蔵入りするく
らいなら、売って金を儲ける事を望んでいた。

だから、それはオークションに出展されてしまった。

「100万!」

「200万!」

「300万!」

どんどん値段が上がるたびに、ある者は嘆き、ある者は歓喜し、ある者は興奮して叫ぶ。

まさに、金持ちの道楽。

最終的に、オークション全体では平均的な値段で落札されたそれは、他にもたらふく買い込んだ貴族の下へと送られた。

そして、無能な護衛部隊に守られて意気揚々と帰る貴族の後ろで、今買ったばかりのそれが盗まれたのに、誰も気づかなかった。

教導の仕事は大変です。

私、高町なのはも、教員免許を取って早数年。

すでに何人もの教え子を輩出したけど、未だに満足に教え切れたと思える人はいません。

時間も密度も足りないし、魔法を使えると言っただけで強いと錯覚している人たちに、まずは意識改革から始める事がほとんどです。

そして、魔道師としてまともに使える程度になっただけで現場に送られてしまいます。

管理局の魔法部隊は万年人手不足で、海は陸よりは多いものの、広がり続ける管理世界とさまざまな事件で起きる大小さまざまな事故によって、増えたそばからどこかへ消えていきます。

最近は教員一人の担当者も増え、熟年の魔術師は教導の傍ら現場に出る事も増えてきました。

私も、今は約100人の生徒を教えながら、現場での仕事も受け持っています。

だから、書類仕事も大変で、機動六課にいる時の方がまだ自由な時間があったほです。

…有給、使ってる暇ないかな？

「なのは、そっちは終わった？」

「うん、これでようやくこないだの事件の報告は完了かな。」

「お疲れ様。　　コーヒ―淹れたけど飲む？」

「もらっ」

つい先ほどまで書いていた電子書類と器具を片づけると、私はフェイトちゃんの淹れてくれたコーヒーを飲むために立ち上がりました。

「それで、はやては大丈夫？」

「うん、結構元気に見えるんだけどね。」

ほら、はやてちゃんって結構自分で貯めこんじゃうでしょ？

だから、心配で…」

あの事情聴取の後から、はやてちゃんは積極的に動き回るようになりました。

それを、いつもの元気が戻ったとみればいいのか、無理をしていると見れば良いのかは、正直親友でもなかなか見分けがつかない状態です。

八神家の他の家族が慰めているけど、それも効果があるのか無いか…

「リインが誘拐されて平気なはず無いからね。」

「うん。それに、未だに手掛かりがないもん。」

私だってこんなに心配してるのに、はやてちゃんはもっと苦しんでるはずだよ。」

「シグナムたちも探してくれてるんでしょ？」

「うん、ヴィータちゃんも教導のお仕事休んで探しに出てるし、シヤマルさんも医療班を他の人に代わって貰って探してるって。」

でも、何の手がかりもつかめないみたい。」

「やっぱり、凄腕の魔術師が相手なのかな？」

「絶対そうだと思う。」

詳しくは言えないけど、はやてちゃんが手も足も出ずにやられちゃったみたいだから。

それに、管理局のサーバーにハッキングした跡があつて、それもその人じゃないかって。」

「複数人の可能性は？」

「無いわけじゃないけど、これだけ痕跡も何もないと、あんまり大人数じゃないはずだって。」

それに、少なくともはやてちゃんと戦ったのは一人だけみたい。」

「それなら、見つかるのも時間の問題だね。」

一人でできることなんてたかが知れてるし、潜伏しててもいつかは必ず出てこないといけない。」

そこを捕まえれば、何とかなるでしょ？」

「だと良いけど…」

なんだか、手掛かりが少なすぎて雲をつかむ様な話なの。」

「犯人の特徴とか、使った魔法って教えられる？」

何か分かるかもしれないから。」

「ほんとはまだ規制がかかってるけど、近いうちに情報公開するのが決まってるから良いよ。」

私は、はやてちゃんから聞いた犯人の特徴を教えます。

自分が直接見たわけじゃないから、うまく伝わったか分からないけど、報告書にもまとめた内容だから意外と簡単に話す事が出来たの。簡単な火と氷の初級魔法と、大規模な凍結魔法、魔法無力化に謎の魔力枯渇現象、それに、シグナムさんの飛竜一閃を凌ぐだけの電撃魔法。

「うーん、強力なAMFか…」

「正確には、良く分からないみたい。」

AMFって痕跡も残らないから断定できないけど、はやてちゃんクルスの魔法使いが魔法を使えないのはおかしいって。

それに、魔法を使おうとしたら魔力が無くなったのも、その魔封じが発動されてすぐだったらしいから、もしかしたらそういう効果のある別の方法かもって。」

「決めつけてかかると思わぬ失敗するかもしれないけど…」

なんか、そんな感じがするね。

でも、魔封じか…」

「どうしたの、フェイトちゃん？」

何か考えてる様子のフェイトちゃんに、何か手掛かりになるのかもしれないと一応聞いてみます。

こういった些細な違和感や咄嗟の閃きが何かの役に立つ事は意外と多いから、念のためです。

「うん、前エリオとキャロの所に行った時の話してたよね？」

「大規模魔力反応の調査の？」

「うん。そこで、私も魔法をキャンセルされたから、なんか自分の事のように思えちゃって。」

「たしか、あれも犯人は見つかって無いんだよね？」

「透明だったし、すぐに逃げられちゃったから。」

「もしかして、なのは同じ犯人だと思ってるの？」

「うーん、分からないけど、もしかしたら関連性があるのかもしれないよ？」

「そうだとっても、あの事件も情報が少なすぎて手掛かりになるような事は無いよ。」

「それでも、一応調べてみるだけ調べてみるのも良いかも。」

「思わぬ収穫があるかもしれないし。」

「じゃあ、私の方から関係部署にそれとなく話しておくね。」

「うん、お願い。」

こういふ話は執務官のフェイトちゃんの方が詳しいからお任せします。

私からもはやてちゃんや現場の人にそれとなく言っておかないと。

でも、やっぱりこれだけ探しても犯人の痕跡が全く見つけれられないのは難しいです。

せめてリインの無事だけでも分かればいいんだけど…

「私、この後は調査に協力しようと思ってるんだけど、フェイトちゃんはどうする?」

「なのは、きちんと休んでるの?」

ヴィータが教導休んでる埋め合わせまでしてるんでしょ?」

「大丈夫。教導の方はそれほど大変じゃないから。」

例の問題があつて、現場に送るのを一旦中止してるせいで、新しい人はほとんどいないし。」

「あの給料の問題か…」

まあ、なら私も手伝おうかな。今日は1日暇だから。」

「ありがとう、フェイトちゃん。」

「いいよ、友達なんだから。」

何か役に立てるか分からないけど、こういう時こそ助けあわないと。」

「そうだね。」

じゃあ、支度するからちょっと待ってて!」

「うん。」

私のデバイスであるレイジングハートは常に身につけているので、後は管理局員の服に着替えて先ほど作った報告資料を持てば完璧です。

忘れ物が無いか念のため確認すると、私達は管理局に向かって歩き始めました。

所変わって最前線。

と言っても、戦闘区域ではなく作戦の野戦型総司令部が置かれた管理外世界です。

現場付近に人が住んでいる形跡がなかった事から、簡易テントとプレハブで作られたそれは、慌ただしく人が出入りして書類やデータが運び出されています。

そして、そんなテントの一つに、八神はやたとザフィーラがいました。

「よっしゃ、終わった。後どんなけや？」

「あと半分といったところです。」

「あと半分… あかん、やっぱリンがおらへんと処理が遅くて困るわ。」

「ならば、早く見つけて連れ戻さないといけませんね。」

「そうや。そのためにも頑張って書類整理してはよう探しに行かんと。」

頑張つて気合いを入れ、再び書類に向き直る。

しかし、思った以上に進みが悪く、結局朝から始めた書類は追加分も含めて昼過ぎまでかかってしまいました。

「それで、何か進展はあったか？」

「いえ、特に何も。」

転移の痕跡から移動先を探していますが、進展はありません。

それに、目撃情報を集めている部隊も特にめぼしい報告はありませんでした。」

「シグナム達は？」

「シグナムとヴィータは周辺世界の調査を。」

シヤマルは情報収集の手伝いをそれぞれしていますが、連絡がないという事は手掛かりがつかめていないという事でしょう。」

「そうか。」

「じゃあ、私も前線に出るかいな。」

「当てはありますか?」

「……いや、でも、動いて探さんことにはどうにもならんさかい、こ
ういう時は飛びまわるのが一番や!」

「では、シグナムがヴィータを呼びますので、少々お待ちください。
」

そう言つて連絡を始めたザフィーラを横目で見ながら、はやては考
えた。

現在はやては簡易的なインテリジェンスデバイスを持っている。

それだけでも十分強いが、全盛期と比べればやはりリインフォース
?とシュベルツクロイツ、夜天の書という3大デバイスが無い分見
劣りするだろう。

だから、念のためヴォルケンリッターの誰かが交代で一人は必ず護
衛することになっているし、生活のサポートもこなしている。

もつとも、ヴィータだけは逆に迷惑をかけてはやてを困らせる事もあったが…。

そして、今日の当番はザフィーラのはずである。

これはみんなで決めた事だし、主に忠実な彼らがそうそう約束を破る事は無い。

それでも行くという事は、何か特別な理由があるのだろう。

もしも何か分ければ、きっと教えてくれるはず…。

そう考えたはやては、何も言わずに黙って見送る事にした。

…まあ、探りは入れるが。

「なんや、ザフィーラは今日もどっか行くんか？」

「はい、別アプローチで調べていますので。

しかし、あまり期待はしない方がよろしいかと。」

「私らも何か手伝えることがあつたら協力するよ？」

「いえ、お気になさらず。」

「そうかい、なら、よろしゅうな」

「はい。」

現在相手について一番知識があるのは間違いなくザフィーラだ。

戦闘能力や出現時期の情報をくれたのもザフィーラだし、ベルカ時代の知識は意外な事にザフィーラが一番良く知っている。

という事は、何か自分たちの知らない当てがあるのだろう。

案外頼めば連れて行ってくれるかもしれないが、自分から言い出さないという事は喋りたくない理由がある可能性もある。

なら、黙って信じるだけだ。

「お待たせしました。」

「あ、シグナムが来てくれたんか。」

「なら、よろしく頼むわ。」

「後は任せる。」

「はい、任せよう。」

「ザフィーラも頼むぞ。」

「承知した。」

そう言っで、ザフィーラは転移していきました。

ベルカ式特有の魔法陣が展開し、その余韻で小さな光が舞います。

「きっと、ザフィーラが何らかの手がかりを持ってきてくれますよ、主はやて。」

「そうやな、それまで待ってみるよ。」

じゃあ、私らも探しにいこか。」

「了解です。」

そうして、はやて達も搜索を始めました。

所変わってあの世界。

久々に集まった3人は、『先生』に呼ばれて作戦会議中です。

内容は、リインフォース？の一時帰宅について。

午前中に始めて一通り説明を終えた頃には、もうすぐ昼という時間になっていました。

「それで、1週間だけ帰して決心を促すのね。」

「ああ。そうしようと思ってるよ、アリサ君。」

「…はあ。」

甘いといふかなんというか…

確かに、知られて不味い事は先生自身の事だけ。

その内容もすでに襲撃した時点で知られてしまっているから、今更隠してもしょうがない。

唯一この場所の事だけが少々気になるが、それでもばれて困るような内容ではない。

ロストロギアの違法所持やそのクラスの技術を持っている事は知ら

れていないし、アリシアも見つかって無い今なら、まだ可能だ。
でも…

「もう戻ってこない可能性は？」

「十分にあり得る。」

本人はきちんと帰ると言っているが、周りが納得するとは思えない。
「

「そこまで分かっているなら、なんで帰すの？ それに、世界が崩壊する危険性もあるんでしょ？」

「個人的にあの子を信用しているから… ではダメかな？」

「…甘いわね。」

「ああ、そうだろうね。」

ジド目で見ても、分かっているのかいないのか、普通に返される…
結構やりずらいわね。

でも、こっちもそうそう引けない。

無理やり誘拐しておいて、今更返すなんて元も子もないし、定時連絡のときにはやての事は聞いて慰めた実績があるからだ。

またあれをどうにかするのは、正直勘弁願いたい。

無理して笑ってるのが分かるだけに、痛々しくて見てられなくなるもの。

「それで、すずかはどう思う？」

「私は… 別にいいんじゃないかな？」

先生が優しいのは今に限った事じゃないし、どうせ止めても勝手にやっちゃうだろうから。」

「まあ、確かに…」

過去の実績は、この人に限ってはすごい事がある。

なんと、自分で決めた事は一度も折れた事が無いのだ。

それが、別にどうでもいいような内容ならそれでいい。

しかし、重要な内容は別だ。

ある日、いきなり誕生日プレゼントに”ちょっと”豪華な物をプレゼントするから何が良いか聞かれ、適当に安い物を頼んだら金銀財宝の山を送ってこられた。

しかも、返品しようにもかたくなに拒んで、上げた物だからと言って結局突き返されてしまった。

まあ、あの後それを無理やり換金させたから、結局残ったのは莫大な金と少量の貴金属だけだったが。

それ以外にも、旅行に行くと言い出して私達を連れて全世界を回ったり、実験と称して巨大な庭園を人工世界に作り替えたりと、色々と規格外の事をしてきている。

まあ、旅行は楽しかったから良いのだが。

だから、どんなに説得しようとしても聞かない可能性は高い。

それに、この人がこういう場合はある程度的を射ている事が多い。

だから、きっとこれが終わればすぐにリインは戻ってきて、決心してくれるんだろう。

それが分かるだけに、なかなか強く言い出せないのだが…

「アリシアはどう思う？」

「私は別にいいけど… ちょっと不満があるならなんでリインちゃんは良くて私はダメなのかってことかな。」

アリシアは蘇らせてすぐにフェイトの所へ行くのを拒否されている。

確かに、見方によってはアリシアよりリインの方が信用できると言われているようなものである。

年齢的には蘇らせてすぐのアリシアよりリインの方が圧倒的に年下だが、知識のレベルはリインの方が上だ。

ならば、リインの方が無垢なのかと言われれば、なんとも言い難い。

「なに、リインの場合は強硬策がとれるからさ。」

「強硬策？」

「リン君の場合、最悪でも帰ってこないで嚴重に守られるだけだ。それなら、強制的に奪い返すのはやぶさかではない。

しかし、アリシア君の場合、万が一情報が漏れれば管理局全体に行きわたる可能性もあった。

そうなった場合、私は管理局を滅ぼさなければならぬからね。

あまり気が進まなかったんだよ。」

そう言われてしまえば、何とバカな事をと普通の人間なら思うだろう。

しかし、先生には確かにその力がある。

普段から身に着けている2つのロストログアは、有れば何かと便利だからという事もあるが、何より暴走した時の被害が一番大きいからだ。

ひとたび暴走すれば、方や大規模次元震と次元断層の嵐。

もう方や、命の無限消滅。

勝手に触られても困るからと、念のために教えられた内容は、どれも現実味がないほど壮大な内容だった。

「なら、私は良いかな。

ただ、現場には私達も行った方が良いかも……」

「それは、どうしてだい？」

「先生だけだと、はやてちゃんだけならともかく、フェイトちゃんやなのはちゃん達も相手にするのは厳しいでしょ？」

…そうなのだ。

普段は完ぺきなこの先生。

しかし、ある一つの明確な弱点がある。

そうそうそれをつく事は出来ないだろうが、今回はかりはそうは言
ってられない。

この人の弱点… それは、何と言う事の無い力のごり押しと集団リ
ンチ。

ダークマターは発動中は虚数物質の暴走を抑えるために常に管理下
に置かなければならず、高威力魔法を相手取る場合は新たな魔法の
発動が処理的に出来ないのだ。

これが、周りに被害の無い虚数空間なら気にする必要はない。

しかし、ひとたび暴走すればガス状に広がるため、回収が難しくな
り、自然に魔力と結びついて消えるまで残留し続ける。

八神はやてとの戦闘中には、事前にエレメントを数万個用意したた
め、大規模な魔法を小処理だけで行使できたが、今回は突発的な遭
遇線になる可能性もあり、そうそう同じ手は使えないのだ。

だからと言って、瞬間的な威力はデバイス持ちの彼女らの方が圧倒
的に有利。

接近戦に持ち込もうにも、最悪の場合は中距離支援のなのはと接近
特化のフェイトを同時に相手取る事になる。

そうすると、相手の魔力が尽きるまで終わらない超長期戦になり、
その後に管理局員がわらわらと来ると考えると、一体どれだけの時

間がかかるかは見当もつかなかった。

それなら、私やアリシア、すずかが出た方が有利に戦えるはず…。

「ふむ、アリシア君を見られるリスクはあまり犯したくないが、しようがないか。」

「物理的な網とか出てきても大変ですしね。」

「そうだね。」

虚数空間内では自分も魔法が使えない。

普段は展開するときに自分の周りだけは虚数空間から外して、周りを覆う膜のようにしているから問題ない。

しかし、直接生成される虚数空間に触れていれば、如何にレリックピースの無限魔力があるとはいえ、魔力タンクに貯蔵されてすぐに消えてしまったため飛行魔法すら使えないのだ。

だから、もしも網を投げられたら虚数空間を通ってくる間は迎撃できないし、越えてすぐに迎撃しようにも魔法が使えないのでは難しい。

さらに、少し位置をずらされると虚数空間に自分も突入して飛行魔法がキャンセルされ、撃墜する危険性もある。

だから、意外と大砲や銃で狙われるのも苦手だったりするのだ。

…バリアジャケットでダメージは無いが、反動で大きくのけぞってしまうから。

「別のロストログアを持っていくことも考えたが、今回は3人に頼むとするよ。」

「うん、わかった。」

「しょうがないわね、手伝ってあげるわよ。」

「先生のためなら、お安い御用ですよ。」

こうして、今回のメンバーが決まった。

あとは、作戦を打ち合わせて出る事にする。

作戦の開始は午後から。

場所は… 八神はやての居る所で。

第14話：間幕の諸事（後書き）

会話↓会話↓会話↓会話↓ところにより一時解説

つていう形は、つい書きやすいから依存してしまう…

本当は小まめに一言入れるべきなのでしょうが…。

今回の前半戦はこんな感じの表現多くてごめんなさい><

あと、どうでもいい事なんですが、『。。。』は『…』とほぼ同じ
感じで使ってます。

正確には3点リーダーが正しいはずなんですが、他との相対的な間合
いを設けるのには使いやすくて…

『。。。』でも良いんですが、『。。。』の方が個人的に使いやすい
気が…

まあ、ほとんど癖ですね。

第15話：戦闘の始まるその前に

とある管理外世界。

面積のほとんどを水と氷に覆われたその世界は、独自の生態系の進化を遂げていた。

しかし、管理局にとっては特にめばしいものの無い世界。

念のためにと、この世界の調査にやってきた八神はやても、そうそうに別の世界へ移る予定だった。

しかし…

「はやてちゃん！」

「はやて！」

声のかかった方を見つめれば、飛んでくる影が二つ。

一人は白を基調とした魔道師の服に茶色い髪を両脇に結んで束ねた女性。

もう一人は、黒を基調とした露出度の高い衣装を身にまとった女性。

それは、はやてにとつては見知った顔だった。

「あ、なのはちゃん。それに、フェイトちゃんも、来てくれたん？」

「ん。今日は休みだから、せつかくだし手伝おうと思って。」

「おおきにな。二人が来れば百人力やで！」

「うん、今日こそ何か手掛かりでも見つけよう！」

そう言って気合いを入れるのは。

そして、その横ではフェイトとシグナムが向かい合っている。

「シグナム、お久しぶりです。」

「テストロッサも久しいな。今日は我々のためにありがとう。」

「いえ、このくらいは。」

「それで、状況はどうですか？」

「芳しくない。」

「今はこの世界を調査しているが、特に手掛かりはつかめなさそうだ。」

「ほとんどを海が占めるこの一帯は、先ほどから魔力反応と生体反応を調べて飛びまわるが反応が無い。」

「一応、周辺の浅い海に潜つての捜査もしているが、深海や地下までは捜査できないため、止む無く途中で切り上げる予定だった。」

「もしも何か手掛かりがあったとしても、この世界中を調べつくすのは無理だからだ。」

「私達も手伝うんで、手分けして探しましょうか。」

「その前に、いったん休憩を取ろうかと思っている。」

私は良いのだが、主はやては昼前の書類整理からずっと動き詰めだからな。」

そう、午前の書類整理が終わってすぐに飛び出したはやては、日が傾きだしてしばらくたった今も全く休んでいなかった。

本人は大丈夫だと言っているが、強制的に休ませなければ無理をする事は分かっているシグナムは、この周辺が終わったら休息にする事を決めていたのだった。

「そういえば、なのはも休息らしい休息は取って無いよね？」

「あはは、ここに来るまでに休んだから問題ないよ。」

「移動は休んだって言わないよ。せつかくだし、私達も一緒に休も。」

「うん。」

そして、ワーカーホリックのなのはその例外ではない。

放っておけば1年でも仕事をしていそうな勢いのあるのは、もちろん常日頃の如く飛びまわる気満々だったのを強制的に止められ、しぶしぶと言った感じでそれに従った。

もつとも、疲れが残らないようにギリギリのラインで休息は取っているのだが。

「ほな、あの小島で一息入れよか。この世界ではほとんど無い陸やけん、休むにはもってこいや！」

「そうだね、じゃあ、いこっか。」

そして、小島へと飛び立った4人。

しかし、それを陰ながら見つめる者がいた事には気づかなかった。

（さて、どうしようか？）

八神はやては見つけたが、オプションに余計なメンバーが多すぎる。

このままおちおちと出て行っても、管理局に敵対している私は投降

を促されるだろうし、それを素直に受け入れるだけの余裕はない。

かといって、リイン君だけを置いていくわけにもいかない。

なぜなら…

「Z Z Z… Z Z Z…」

当の本人が熟睡しているからだ。

それに、このまま落としても受け止めてくれるとは思えないし、そもそも女の子をまるでボールのように投げるのは気が引ける。

異空間を渡るのを見られては困るため、眠らせたのがまずかったらしい。

…もちろん、本人の承諾は得たが。

（どうします？）

（直接渡すしかないだろう。

昨日からずっと楽しみにしていたんだ、今更引き返すのも気が引ける。）

（でも、相手は最悪とまではいかないにしても、ちょっと厳しい人数だよ？）

（それぞれ一人ずつひきつける事は出来ないかい？

その間に八神はやてに引き渡して脱出するから。）

このメンバーでは司令塔となるアリサに聞くと、少々悩んだようだが頷いてくれた。

（分かった。でも、どうやって抑える？）

フェイトが高速接近戦型、

なのはが中距離砲撃型、

シグナムは中々近距離万能型だ。

対する此方は、

アリサが近距離型、

すずかが遠距離型、

アリシアが中々超遠距離型と、なのははともかく、フェイトやシグナムを相手にするのは難しいメンバー構成になっている。

私が出ればどうにかなるが、その場合の交渉が声を出すわけにはいかない3人には厳しいため、必然的にそれは無理となる。

万が一攻撃されずに帰る事が出来れば良いが、そうなるとはどうにも思えなかった。

（あの、先生、アリサちゃん）

（どうしたの、すずか？）

（私があればどうにかなるかも…）

（…！ それはダメ！）

3人娘の中で、すずか君だけは少々特殊だった。

魔法の構造についての理解度はアリシア君に負けるが、それでもある一点においては遥かに凌駕する。

…そして、その特化による切り札。

それを使えば、上手くいけば全員同時に無力化できるだろう。

しかし、まだそれを出す時ではない。

そんな時が来るのかと問われれば、無い事を願うとしか言いようがないが。

（なら、休息している所にアリシアちゃんが広域ジャミングを放つ。
そして、混乱している所にアリサちゃんが行って誘い出し、私が超
長距離転送で別の世界に飛ばす。

っていうのはどうかな？）

（悪くはないわね…）

（でも、置いてくるだけじゃダメなの？）

（１週間後に迎えに来ることは伝えておきたい。

それに、力関係を明確にするうえでも、八神はやたとシグナム以外
にも実力を示しておきたいんだ。

そうすれば、素直に返してくれるだろうから。）

（なるほど。）

出来れば、切り札は切りたくない。

管理局内にいる彼女を奪い返す事は出来るだろうが、そこまででき

る事が知られたら管理局は躍起になって私達を探すだろう。

「こんな High risk & Low returnハイリスク・ローリターンな事やっているのに今更だが、それでも出来る限りの保険は駆けておく。

（なら、転移して一人づつじゃなくて、直接倒した方が良いかもね。）

（でも、アリサちゃん。

アリサちゃんと私は大丈夫だけど、すずかちゃんじゃきつくない？）

すずか君の魔法は詠唱が必要な物が多い。

そうだったものは、1対1戦に向かないため、必然的に使える手が限られるのだ。

初級エレメント同時生成10個まで。

維持したエレメントを使っても30個が同時展開できるぎりぎりだし、5個以上は動きながら操作する事が難しい。

だから、必然的に近距離型の相手は苦手となってくるのだ。

（すずかがなのはに当たるのは決定だとして、私とアリシアはどうしよう？）

（私はシグナムさんの方が良いかな。

フェイトさんだと捉えきれないかもしれないから。）

（じゃあ、私はフェイトか…

でも、私も高速戦闘は得意じゃないんだけどなあ…）

アリサくんは軽いため息をつくが、拒絶しないという事は何か策があるのだろう。

短いとはいえ、一度戦っている以上対策を練る時間もあつたのかも
しれない。

まあ、どちらにしろ私は信じることしかできないのだが。

（さて、作戦が決まった事だし、そろそろ行くとするか。）

（うん）

（わかりました。）

（がんばろうね！）

そうして、休息ポイント近くの上空にゆっくりと移動して行く。

今までの会話は念話ではなく小声で行っていたから、近くにいて気づかれる可能性を考慮したためだ。

なぜかと言うと、アリサ君とすずか君は念話が使えない。

念話はほとんどリンカーコア持ちの特権だからだ。

私やずずか君に至っては、送信された魔力を読み取って解析して内容を知る事が出来るが、ずずか君はそれもスムーズとはいえなかった。

だから、小声で話す必要があったのだ。

そして、ダークマターを使って魔力を隠蔽しながらゆっくり進む。

これも、魔力を悟られないためには重要なのだが、あまりに分暑く展開すると魔力の濃度を調べられていた場合に見つかる可能性がある。

だから、隠蔽は自分たちの周りの最小限だけ行っているのだ。

そして、現場上空に着くと、私達はそれぞれ行動を開始した。

さて、まずは交渉か。

まずはリン君を1週間後にまた明渡すように要求する。

それが素直に納得されたら良し。

しかし、大抵の場合は拒絶されるだろう。

その場合は実力で納得させて奪う。

これが、今朝決めた大まかな流れだ。

最終的に渡す事は決定しているため、八神はやてが納得していなくてもリインが契約にしたがって説得してくれるだろう。

だから、もしも撤退しても何とかなると信じたい。

管理局相手に戦う力はリイン君にも秘密にしているため、交渉材料不足による失敗もあるだろうが。

それだけ考えると、上空に着いた私達は、それぞれ行動に移した。

これからは私から指示は出せても、他の3人と話をする事は出来ない。

だからこそ早く渡し、実力を見せつけた後に撤退する。

すでに撤退の準備は整っているから、後は渡して逃げる事が出来る

かだ。

（少々ど派手な合図が必要か…）

まずは空中におびき出す。

光属性の信号弾では気づかれないことも考慮して、音響も同時に発生させなければならないだろう。

今回はダークマターで魔法を封じる事は基本しない。

此方の戦力がダークマターだけでなく、純粋に魔法でも管理局トッブクラスと渡り合える事を示さないといけないからだ。

だから、純粋に魔法だけで相手どる。

もっとも、いざという時は使うがね。

…さて、戦闘開始だ！

それまで私達を覆っていた虚数空間の幕を解除する。

それと同時に私以外に3人は別々の方向へ駆け出し、私は詠唱に入る。

放つのは小規模な爆発。

閃光と音響を併用するなら妥当だろう。

そして、それと並行して戦闘用にエレメントをできる限り生成しておく。

維持は特に問題なく行えるが、魔力タンクを使っている以上同時展開の出力は限界があるからだ。

火、水、氷、雷…

空中で使えるようなエレメントを見つくるってそれぞれ100個ずつほど用意した。

そして、それとほぼ同時に爆発魔法を放つ。

どうやら索敵はされていなかったようで、爆発と共に臨戦態勢を整えた彼女らは警戒しながら此方へ向かってきた。

…少々警戒を緩め過ぎなのではないだろうか？

まとまって上がってくる彼女にそういう感想を抱いたのはあながち間違いではない。

気づかなかったのは休息中なため仕方ないと言えなくもないが、相手の事がよくわからないのにまとまって上がってくれば良いのだ。

何らかの集団防御に長けた方法があるならいざ知らず、魔法を破られた経験があるのにそれはあまりにも無謀だ。

唯一奇策を狙っているという可能性もあるが、リスクが高すぎて普通はしないだろう。

「もつとも、奇襲するなら最初からやっていたがね。」

あの纏まって気を緩めている状況なら一撃で粉碎できる。

今回の目的がリイン君の明け渡しだからこそ攻撃しなかったが、前回のようになら普通は奇襲している。

…当初の予定もそれだったしね。

「さて、ようやく来てくれたか、八神はやて。」

「！リイン！」

「おっと…」

まさかそのまま突進してくるとは…

相当リン君を誘拐したのが堪えたようだね。

冷静な彼女ならまずはそんな愚行は行わないだろう。

今の一瞬に私なら5回は彼女を殺せていた。

それほどまでに、無防備な特攻は危険なのだ。

今はシグナム君に取り押さえられているが、もう一度突撃してくるようなら後学のためにも眠って貰っていただろう。

「放して！ リンが… リンがそこにいるんや！」

「ダメです、主はやて！ 落ち着いてください！」

「リン！…！」

しかし、このままではらちが明かない。

少々危機意識を持ってもらうか…

そう思っていたが、無用な心配だったらしい。

パチンッ！

「！！！！」

八神はやてを高町なのはが殴ったのだ。

仲間割れとはいえ、この状況ではしょうがない事だろう。

目的を果たすのが少々遅れるが、会話する必要があるので解決してくれるのを待つことにする。

「はやてちゃん、ダメだよ。　リンを助けるんでしょ？」

それなのに、はやてちゃんがそんなんじゃ、助けられないよ。」

「でも、リインが目の前におるんや!」

「それでも! 冷静になつて。

今リインを助けられるのははやてちゃんだけなんだよ!」

「…なのはちゃん…」

もともと突発的な発作だ。

貯め込んでいたものが一気に出ただけだろう。

少し冷静さを取り戻せば、いつものように戻るのも早かった。

「そやな、私がしっかりせえへんと…」

一人呟いてはいるのだが…

「さて、いい加減話を進めたいのだが、どうかい？」

「はい。」

なぜのこのこと出てきたのかは知りませんが、あなたには管理局員への危害と誘拐、システムへのハッキングの容疑が掛かっています。大人しく人質を解放し、事情を説明すれば罪が軽くなる事はありませんが、このまま抵抗するようなら此方も攻撃はやぶさかではありません。

投降するならリンを此方に受け渡して拘束を受けてください。」

ふむ、一般的な管理局の口上だね。

しかし、此方もそんな簡単に投降するわけにはいかないし、そもそもここで引き下がるようなら最初からこんな事はしない。

だから、答は…

「NOだ。その提案は受け入れられない。」

「なら… 力ずくで言う事を聞いてもらいます!」

「こちらには人質がいる事を忘れたのかね?」

そう言つて、手の中で眠るリイン君を見せる。

睡眠魔法の影響で未だにすーすーと寝息を立てているが、あまりに小さいその音はどうやら相手には伝わっていない。

それに、闇属性のエレメントを1つだけかぶせてあるので、何かの魔法にかけられてどこなく顔色が悪いように見えるはずだ。

それはどうやら当たったようで、息をのむ音が4つ聞こえた。

「まあ、先に此方の要件を言わせてもらおうか。」

「なんですか?」

今度の答えはフェイト・T・ハラオウン。

Tは旧姓のテストロッサの略だ。

執務官をやっているという事は、管理局の上層部との交渉なども仕事に含まれるはずだ。

という事は、あのバカや妙に頭の切れる狸達との交渉で経験は豊富。

となると、一番心理戦では厄介な相手だろう。

だから、少しだけ気を引き締めて当たる事にする。

「まず、私の目的は夜天の書のとあるプログラムの消去にある。それさえ出来れば、基礎となった夜天の書やフレームの一部であるシユベルツクロイツはともかく、外付けのリインフォース？は返しても良い。」

「それは… ほんまか!!」

「ああ。しかし、少々問題があつてね。」

「…なんや？」

「私がそのプログラムを強制消去すると、リインフォース？君のデ

「タにまで影響してしまう。」

そのため、管理者権限でシステムプロテクトを解除してもらえないかと相談しに来たわけだ。」

「…そんな、危険なことできるわけないやろ？」

最悪、リインのデータを丸ごと消去される可能性もあるんよ!」

「ここは信じてくれとしか言いようがないがね。」

「いくつかお聞きします。」

「なんだい？ フェイト・T・ハラOWN執務官。」

「まず、リインは無事ですか？」

…ふむ。

ここは素直に言うべきかな。

下手に煽っても逆効果のようだし、どのみち人質としての価値は変わらない。

病気や怪我の心配をさせることで、条件をのむ予定だったが、別に価値は変わらないと思って素直に話すことにした。

「安心しろ、眠っているだけだ。」

「その証拠は？」

「…シグナム君だったかな？ 君ならリン君の今の状況を読み取れるんじゃないか？」

そう言って、プロテクトを解除してやる。

闇のエレメントを重ねているのは悪く見せるのもあるが、他の魔法の妨害も果たしていたのだ。

魔力の乱流の中にいる彼女は、正確なラインがとれずに状況の把握が難しい。

シヤマル君なら問題ないだろうが。

「確かに、眠っているだけのようです、主はやて。」

「ほんまか…？」

「ええ。もつとも、何らかの方法で錯乱されている可能性もありますが。」

確かに、相手の手の内が分からないならあり得る。

もつとも、魔力ラインの偽造はかなり高度な技になるのだが。

「では、次に、あなたは夜天の書のどのプログラムをどうして消したいんですか？」

「…事情により返答できない。」

これがばれると、リン君経由でプログラムのコピーをされる危険がある。

全体コピーではその機能の全てをコピーする事が出来ないように何重にもプロテクトの掛かった夜天の書だが、管理者権限で特定のポイントを完全に抜きだすのは可能だ。

「だが、一つだけ言っておこう。私はリン君にあるウィルスを仕掛けた。」

それは、プログラムに変更およびコピーを掛けられた時に自動で発動する。

命まではとらないが、人格が残るのかは定かではないため、無理やり介入は止める事をお勧めするよ。」

「…なんやて！」

私にとっての失敗は、単発の自爆特攻で蒐集のプログラムの根幹をコピーされる事。

しかし、八神はやてならそんな事は出来ないだろう。

それに、現在までに行われたコピーは表層の一部だけで、根幹までは到達できていないはずだ。

プロテクトが嚴重で、さらに巧妙に核は隠されている。

元は防衛目的のそれが意外と役に立った。

「はやて、抑えて。」

次に、プロテクトを解除してプログラムを削除したとして、リインを無事に返してくれるという保証は？」

「…無いね。」

本人が起きれば説得してもらうが、このままでは夕方まで目覚めないだろう。

人に使うのとは違った特殊な睡眠魔法を使ったため、効果がまだ量れていない。

安全性は検証したが、素体が小さいと影響も大きいようだ。

「じゃあ、最後に。」

あなたは何者で何の目的でこのような事を？」

「最初に名乗ったはずだが… 次元世界の管理人と。」

目的は、文献でも調べてくれ。」

「その事だが… 古い文献や調書ではお前の目的までは見つからなかった。」

我々の仲間であるザフィーラも探してはいるが、お前の目的が分からん。

いったい何のために行動しているんだ？

そもそも、お前の記録はベルカの時代から報告されている。

一体お前はどれだけ生きているんだ？」

シグナム君が問いかけてきたのは、純心だろう。

確かに、ベルカでも私についての考察は何度か目にした。

その中には、的を射ているものからてんで違う物まで幅広くあり、しかしそれが公の眼にさらされる事はほとんどなかった。

全てが謎に包まれた神出鬼没の魔法の効かない者。

胸中認識としては、所詮はその程度の認識だ。

目的は一度だけ話した事があつたが、もうすでに記録は無いが、聖王教会の持つ文献の一部に残っている程度だろう。

それを確認する事は現在の私には不可能だ。

全てを電子データ化し、無限書庫にある本も比較的容易に閲覧できる管理局とは違い、聖王協会の禁書庫は限られた数人が稀に入るこ
としかできない。

さらに、内部への転送を防止したり、本の劣化を防ぐため、窓が無い地下に厳重な結界を張って、常に数十人で維持されている。

その知識は私にも手の出せない領域の一つだった。

「目的か…」

世界平和のためと言えば納得してくれるかい？」

「世界平和だと？」

まさしくその通り。

付け加えるなら偽善か？

まあ、やっている事は管理局と大差ないロストログアや危険な物の管理と回収だが。

「忘れるほど長く世界を見守るのが私の使命。

これは、遥か昔に私が私自身へと課した鎖。

そして、悲劇を忘れないための贖罪だ。」

「それはどういう…」

「さて、これで質問タイムは終わりだ。」

「！」

はつとしたように気をこめ直す4人。

それは、私が隠していたエレメントを同時に表した事で発生した。

その意図は勝手に察してくれるか？

「私にこれ以上の話を聞きたければ、私達を倒す事だね。」

「私達…？」

聞く間もなく魔法を放った。

クラッシュ
衝撃のエレメント100個の複合弾。

彼女らはそれを別々の方向に回避するが…

「クラッシュ！」

球状衝撃波の発生。

それによりダメージは発生しないが、大きく彼女らを引き離すことに成功する。

そして、それを待っていたかのように3人娘も動き出した。

さて、後は頼んだよ。

私は他を無視すると、八神はやての方へ飛び出した。

第16話：フェイトvsアリサ

…さて、始まったようだし私も行きますか！

先生のクラッシュ魔法で大きく飛ばされた人物から、目的の人を探
す。

私の相手はフェイトだ。

ここ最近リアルでは顔を合わせていないけど、ついこないだ管理外
世界の一つで自然保護課のエリオやキャロと一緒に出会った。

もともと、姿を隠してたから向こうは私だと気付いてないでしょう
が。

その時は飛行魔法とバインドをジャミングしてどうにか逃げ切った
けど、今回は戦って勝たなきゃいけない。

正直、速度とパワーを兼ね備えた相手は厄介だから、こんなときで
なければ相手したくは無い相手だわ。

もともと、やるからにはとことんやるんだけどね。

「あなたは彼の仲間ですか？」

「…」

私に向き直って話をしようとしているあたり、なのはと違って現実的ね。

ちらつと横目で見れば、はやてを助けに行こうとして横からずずかの攻撃を食らっているのが見えた。

確かに現状ははやてを守るのが優先かもしれないけど、自分の身も守れないに出しゃばるのはあまりよろしくないわね。

まあ、それでも行くのがなのはの良い所なんだけど。

「ここで妨害すれば、あなたにも公務執行妨害がつきます。

武装を解除して大人しく拘束されてください。」

（そんな事を言われてもね…）

戦わないなら元からここにいないわ。

それに、会話でどうにかなるならすでに答えている。

だから、この沈黙が回答。

それが分かったのか、フェイトもバルディッシュを構えた。

「無言という事は、投降の意思がないと判断し拘束します。

リングバインド…！」

空間固定系環状拘束魔法… リングバインド

指定位置に設置するトラップか。

相手の位置を指定すれば、手錠のように使うこともできる魔法ね。

今のは様子見なのか、展開された魔法は私の手首・足首に発動位置を指定していた。

でも、それは比較的避けやすい。

自分の肉体を強化し、衝撃のエレメントを形成して自分の体を吹き飛ばす。

それだけで、魔法の効果範囲から脱出した。

…そして、今度はこっちの番。

相手の射程は中々近距離。

対する私は獲物が無い分、極近距離の格闘戦しかない。

エレメントでの中距離攻撃も多少できるけど、十分な強度も威力も確保できないから意味がない。

バルディッシュの魔法刃に触れただけで簡単に拡散してしまうだろう。

当たってもせいぜいよろめかせる程度だし、それだけのために貴重な思考領域^{リソース}を裂くのは惜しい。

だから、私は得意分野で攻めることにした。

（クラッシュインパクト！）

手足に衝撃の属性を集中し、触れた対象に衝撃を与える魔法。

その効果の副産物として、空気を弾き飛ばすことによる空気抵抗の減少もある。

体内で生成するから魔法発動・操作のタイムラグと維持コストが少

なく、比較的長時間使ってもあまり疲れない魔法だ。

…そして、私の得意分野でもある。

（はぁ！！）

「くっ… 重い…」

空中を蹴って接近し、殴りかかる。

フェイトはそれをバルディッシュで受け止めたが、見た目より威力のあるその一撃に体勢を崩した。

空気操作による飛行魔法を解除し、全ての思考領域をクラッシュインパクトにつき込んだ故の威力。

機動力は落ちるが、それでも空中を蹴り続ければ浮かぶ事は出来るので、戦闘においてはこれが一番使いやすかった。

もつとも、初見殺しが出来なければ少々苦戦するが…

「は！」

所詮は勢いに任せただけの突進。

飛行魔法の断続的な推進力があるわけでもなく、一度受け止めれば弾くのは容易。

飛ばされた先で飛行魔法を再度展開し、体制を立て直すけど、これは不味いかもしれない…。

「やあああ！！！！」

（ファイヤーナックル！！）

そして、今度は私が受ける番。

超高速で突進してくるフェイトを迎え撃つために、私は炎を拳にまとう。

そして、身体強化を極限まで高め、バルディッシュの刃を真正面からなぐりつけた。

本来は横から殴った方がこういう刃は脆いのだが、早すぎて合わせる事が出来ない。

さすが、管理局最速伝説の一端だわ。

でも、正面なら軌道を読むことでまだ迎撃も可能。

（うりゃあああ！！！）

「はああ！」

そして、空中に黄色い電撃と紅蓮の炎が衝突した。

接触の瞬間の力はほぼ互角。

突進距離の関係で、相手の方が少しだけ強いかもしれない。

でも、このままならインパクトの力の切れた私が押されるのが必須。

…普通ならば。

「熱っ！」

（りゃああー！）

ファイヤーナックルの効果で纏った火の粉が、接触の瞬間に飛び散る。

それが薄い装甲に触れ、一瞬フェイトがひるんだ隙に追撃を加えた。

右装甲の薄い所を狙った一撃。

身体を回転させて威力を底上げした一撃は、十分必殺になりうる。

（いける！）

そう確信して、全力で振りぬいた。

しかし…

「Defensor」

明確な攻撃にはデバイスの自動防御が働く。

その壁に阻まれ、多少吹き飛ばす事は出来たけどあまりダメージは与えられなかった。

「くっ… やってくれるね…」

しかも、今の攻撃の勢いを利用して距離を取られてしまった。

（不味いわね…）

「プラズマランサー… シュート!」

そして放たれた10個の雷属性弾。

この速度で移動しながら詠唱なしにすずかの限界に匹敵する技を出せるのは、リンカーコア持ちの特権ね。

私が纏めて消せるのは2〜3個。

それを超えれば、クラッシュインパクトの再展開に極少量ながらも時間がかかる。

相手がすずかなら、同時攻撃され、ほぼ必殺となっただろう技だ。

だが、相手は根源魔法使いの事を知らない。

だから、使ってきてても偏差打ちのはず…

その予想は当たって、それぞれ別の方向から時間差を持って飛んでくる。

こっちに来るのが8つで2つは遊撃用の待機。

最初は正面から。

そして、次に斜め右前から。

それを身体をひねる事で回避した私は、次に上から来るスフィアを右手で殴り飛ばす。

そして、その勢いのまま正面のスフィアを左手で殴り飛ばし、回転して次のスフィアを蹴り飛ばした。

そして、すぐさま後ろに跳んで残る3つを回避。

すぐにリチャージして、最初に交わした2つのスフィアが戻ってくる所を迎撃する。

後は、炎のエレメントを3つ出してスフィアの軌道にかぶせ、微量の衝撃を与えてやれば勝手に誘爆してくれる。

それを確認すると、私はフェイトに向かって突っ込んだ。

「フォトンランサー シュート!!」

しかし、待っていたのは先ほどより弾幕形成に優れた魔法。

戻ってくる事はないが、その分発動が容易で数を用意できる。

今の私にはさっきのプラズマランサーより厄介な魔法だ。

でも…

（炎の蜃気楼^{ミラージュ}!!）

熱によって光を捻じ曲げる所詮は幻影魔法の一つ。

完全に姿を隠す魔法と違って、自分の影を曲げるだけの魔法だ。

しかし、目視できる物がある分、位置をごまかすのには適している。

案の定、フェイトの攻撃は幻影の方に集中している。

流れ弾が本体の方に来ることもあるが、ほとんどが幻影をすり抜けて通り過ぎて行った。

おそらく、今でどういう魔法か悟られた。

という事は、次は無いだろう。

だから、次の接近で決めるつもりで私はフェイトに突っ込んだ。

「何度も近づけるとは思わないで！」

しかし、フォトンランサーは只の時間稼ぎ。

本命はこっちのようね。

まず見えるのは先ほど待機させていた2つのスフィア。

それが、私の両脇に向かって飛んでくる。

そして、その奥には剣を縦に大きく振りかぶったフェイト。

この形だと、縦振りの大きな一撃かな。

逃げる隙を無くした大ぶりの必殺技。

向こうも、これで決める気なんでしょうね。

…でも！！

（クラッシュインパクト・フルドライブ！！！！）

両手両足に集めていた全ての衝撃魔法を右手に集中する。

さらに、そこへ炎の魔法の重ね掛け…。

さすがにここまでやると自分の体にもダメージが出るが、今は構って暇がない。

全ての魔法を集中させた右手は赤く輝き、皮膚の表面も赤く焼けただれていた。

（…でも、一撃なら行ける！！）

「これで終わり!!」

（押し切るわ!!）

「サンダースマッシャー!!」

（メテオインパクト!!!!）

お互いのほぼ全力のぶつかり合い。

赤い魔法と黄色い魔法が混ざり合って、接触点から強烈な白い閃光が発生する。

デバイスという道具を使っているフェイトと違って、直接肉体でぶつかっている私の手はもう限界に近い。

…でも!!!!

（負けるわけには…

いかないのよ！！！！！！）

慣性にしたがって発生していた推進力が落ちる。

普通なら、ここで弾かれて終わりだ。

そうじゃなくても、砲撃を打った後にフェイトは移動を始めている。

世界が異様に遅く感じ、今ならフェイトの動きも普通に見える…

右手がダメなら左手。

それもダメなら全身。

…炎と衝撃の得意属性を生かした限界の大技。

創造するのは自身を弾とした大砲。

推進力が無いなら爆発でも起こして強制的に作る！！

これがほんとの全力全開…

自己犠牲究極奥義。

（ファイナルカノン！！）

サンダースマッシュャーの横を通るように

軌道を設定し、防御を捨てて突撃する。

フェイトの特技が早さなら、私の特技は突破力！

そして、根源魔法を使っているからこそ鍛えられた脳の超高速回転

!!

弾道も早さも力もこれ以上に無く良好。

これでダメなら!!

(うつりゃあああ!!!!)

そして、私は驚くフェイトの横から最後の一撃を御見舞した…。

第16話：フェイトvsアリサ（後書き）

急ぎ過ぎて内容が薄くなりそうだったのでゆっくり執筆します。

もうちょっとリインがあの世界にいる時間を書く予定だったのに、
雑に飛ばし過ぎた…

ちよつと反省…。

もしかしたら改稿するかもしれないけど、その時はよろしく願います。

まあ、内容的に大きく変える予定は無いですが、次元世界の管理人が信用を形作るまでの諸事を書かないとかなかな…

あと、今書いてる戦闘が一つの見せ場です。

書きたかったところなんで、少々時間かけて頑張ります。

第17話：なのはvsすずか

私の相手はなのはちゃん。

正面から当たれば負けるのは目に見えてるけど、時間稼ぎぐらいなら私でもなんとかできるはず…

だから、ヒット&アウェイでどうにか凌ぐ予定だったんだけど…

「邪魔をしないでください!」

「…」

一瞬で組み上げた魔法を多段連射して、その隙にはやてちゃんの方に向かおうとする…

只でさえ魔法を打たれたら対処が厳しいのに、それを対処しながらの追撃戦。

私には正直荷が重いです。

でも、何とかなっているのは最近覚えた魔符を使った魔法のおかげかな。

「デイベインバスター!!」

(水のエレメント5個!!)

…発動、氷結符!!

魔力を通せば予め描かれていた文様に沿って魔法を展開するアイテム… 魔符

すごい繊細で1枚作るのも結構大変なのに、大抵の魔符が効果発現

後に壊れるという使い捨ての品です。

氷は1枚で2回は使えるけど、それ以上は失敗の可能性が大きくなるので通常破棄します。

…でも、継続して発動する分には結構長持ちなんですよね！

（やあー！！）

迫りくる魔法弾を氷結符と水のエレメントで作った剣で叩き斬ります。

刃の部分はすぐに痛むけど、核となる符さえ生きていれば水のエレメントで補填可能。

それに、補填するたびにどんどん大きくなって、最初は短剣サイズだった剣も今は普通の片手剣位の大きさがあります。

でも、所詮は接近武器。

中距離主体のなのはちゃんと戦うのは分が悪いです。

でも、遠距離の呪文は詠唱が長いし、中距離でも効果のある魔法を使おうとすれば距離を取られ過ぎます。

本当は私ははやてちゃんと同じく後方からの支援職なのに…

（でも、逆に言えばいい機会かも…）

接近戦に関してはほとんど素人の一つ覚え。

魔法も満足に使えない。

これが、もし殺し合いでぶっつけ本番なら、もっと余裕がなかったはず…

それでも耐えられるのは、一重になのはちゃんに私を倒す気が無いから…

良い機会だし、こういう状況での戦闘も慣れておかないと。

しかし、そんな考えは次の瞬間に一瞬で消え去りました…

「デイベインシューター!!」

(…え、あれどなんないじめですか?)

スフィアがざっと30個…

私の限界軽く上回ってレリックピース使ってる先生とほぼ同数。

しかも、それを全部制御って…

(い、いやああああー!!!)

とりあえず逃げ… ちよつと!!

思った時には遅かったみたいです…

いつの間に回り込まれたのか、さっきのスフィアが上下左右前後…

全方向からの同時攻撃って！

逃げ場無いんですけど…！！

氷結符、火炎符 雷撃符 風塵符 地鋼符 暗黒符 光明符

エレメント20個フルドライブ…！！

持つてる符をほとんど使つての限界突破のエレメント生成。

そして、それを混ぜ合わせて『混沌にして無』という異常な状態を作ります。

万物に等しく訪れる真理の壁。

私が即席で作ったその壁は、砲撃魔法でもなければ打ち破れない代物！！

これなら！！！！

（お願い、耐えて！！）

アビスシールド
奈落の盾！！！！

これでダメなら…

「ディバイン…」

（あ、終わった…）

「バスター……！」

スフィアの群れの向こうから放たれた中距離砲撃の直撃……

避けられないそれは、私のバリアを抜いて……

「よし、早くはやてちゃんの方に行かないと……」

「……ダメだよ。」

「え？」

直撃を食らって爆煙を巻きあげますが、それでも私は何とか耐えきりました。

すでに満身創痍ですけど…

これは、アビスシールドの耐久度が高かったのもあるけど、なのはちゃんが手加減してくれたのも大きかったかな…

でも、これはチャンス。

裏声を使ってなのはちゃんを呼びとめ、今出せる技で最良の物を選択します。

それは、趣味で覚えた呪術の一つ。

魔法使いであるのはちゃんには、普通は自然の免疫があつて効かない魔法。

でも、それを補うだけの魔法解析力があれば？

強引に多少の効果を引き出せる！！

ターゲットロック
対象指定

自己分析開始…

終了

情報送信…

発動：ダメージトレイサー！！！！

「イタッ…！ 何！？」

突然襲った痛覚。

それは、本来私の感じるはずだった痛み。

それを、認識範囲をずらし、事象をそれに合わせることで強制的に敵に与える魔法。

本来は儀式魔法なんだけど、私の場合はほとんど勘でやっているから特技と言った方が近いかな？

エレメント形成をしないで使える数少ない魔法の一つ。

でも、それゆえの問題点もあります。

…消費魔力の多さ。

事象へと介入するのはあまりにも消費が多くて、普通なら数秒も持ちません。

それでも使えるのは、一重に影入りの指輪のおかげ。

存在を規定する効果のあるこの指輪は、この魔法でも流用できるんです。

それでも、長く使うのには向かない技。

それに、痛みに耐えるのは管理局にいるのはちゃんなら慣れているはず…

「こんなの！！ 効かないんだから！！」

案の定、次の魔法の行使に入ります。

ダメージトレーサーの問題点は、他の魔法と同じように魔法自体にリソースを使い過ぎて動けない事。

それに、防御魔法もさっき魔法符の椀飯振舞をしたからもう使えません。

しかも、なのはちゃんは次こそ落とす気らしく、得意の砲撃を準備しています。

私にそれを避ける術はありません。

…
でも。

「全力全開… スターライトブレイカー!!!!!!!!!!」

それを受ける時、私は笑っていました。

だって、そのダメージは全てなのはちゃんへ返るから…

直撃の瞬間、一瞬でダメージトレーサーが限界を超えて弾け飛びます。

でも、魔力ダメージのほとんどはなのはちゃんが背負ってくれまし

た…

「あつ…」

（あ、私ももう無理みたい…）

砲撃ダメージと過剰処理で2人同時のノックアウト。

でも、なんとか引き分けにまで持ってこれました。

…次は勝てると良いなあ。

空から落ちていく私達二人は、それぞれ別の人物に支えられて意識を手放しました。

第18話：シグナムvsアリシア

さて、二人は苦戦しているようね…

始まってすぐの戦況を見てそう判断。

まあ、元よりリンカーコアを持たない素人魔術師二人が、リンカーコア持ちの最上級魔術師を相手にするなんてばかげた話だから、しようがないんだけどね。

（さて、じゃあ私も頑張りますか！）

気合いを入れ直して目の前の炎の剣士を向き直る。

しかし、もともとは対峙していた状態からの余所見。

普通はその隙に攻撃されるわ。

でも、それを許さないのが私クウォリティー。

だって、余所見をしていたのはほんの0・1秒あるかないかの短い時間。

激戦の最中ならいざ知らず、対峙している間にその時間はあつてなきような物。

もっとも、隙には違いなから襲ってくるけど…

「はああ!-!」

(おそい!)

愚直に突っ込んでくる剣士に魔法を合わせる。

3人の… いや、先生も含めれば4人の中で唯一リンカーコアを持った私。

しかも、そのコアの大きさは半端ないんだよ。

複数の近しい魔道生物から集めたリンカーコアを補完し合って作った物だから…

まあ、最初先生が確保した時は大きいがゆえに非常に脆かったらしいけど…

だから、純粋な魔法に関しては私が最強。

知識も詰め込めるだけ詰め込んでるし、勉強時間ならすすやかやアリスを軽く超えている。

これで負けたらメンツが無いわ！

だから、出来るだけ早く、はっきりと実力を示していざという時の
2人のサポートに回る。

それが、私に課せられた任務。

「受けてばかりでは勝てんぞ！」

「…」

勝つ必要はない…

ただ、相手を恐れさせる。

そのためには、まず相手にとっては想定外の魔法を御見舞いするこ

とにする。

属性変換… 雷

収束砲撃魔法術式展開。

さらに、スフィアを10個出してそれをミラーージュで100個に膨れ上がらせる。

収束・変換・誘導・幻影の4魔法同時行使。

現在の管理局では、夜天の書の登録魔法をトレースしたはやてくらいしか使えない大技。

それに炎の騎士は驚いた顔を見せるが、すぐに切り替えた。

さすが、切り替えの早さはヴォルケンリッターのリーダー的存在なだけはある。

…けど、驚くのはまだ早いよ？

（とりあえずスフィア発射！）

牽制にスフィアの群れを放つ。

この、幻影90：本物10は結構厄介な比率だ。

最初の数発を叩き消した所で、相手はそれが全て幻影だと思い込む…

そして、油断した所に本命をぶつけて一気に警戒心を煽るの。

これはさすがに炎の剣士にも有効だったらしく、1発目に続いて2発目も直撃。

威力は低くてダメージはそんなにないから、さすがに3・4発目は幻影と一緒にかき消された。

でも、この隙で十分。

私は、右手にピンク色の魔力を輪を纏い、周辺空間から魔力をかき集める。

そして、左手を芯に雷の刃を形成して振りかぶる。

ばかげた魔力と異常な処理スペックのなせる大技。

右手にスターライトブレイカーを。

左手にプラズマザンバーブレイカーを。

そして、その状態でさらにもう一つ。

2つの魔法を基盤にさらにラグナロクブレイカーを。

過去、3人の少女によって無限再生能力を持った闇の書の闇をほとんど消し去った技。

そして、非殺傷設定でも軽くキャパシテイオーバーを狙える奥義。

「あ、お前、それは!!」

それに気付いたのか、シグナムもさすがに大慌てだ。

実質、私一人を相手にするという事は、過去のあの3人を同時に相手取るのに等しい。

ううん、現在の3人同時でも私には勝てないでしょうね。

だから、すでに積み。

3つの広範囲魔法の同時行使。

さすがにこれは避けられないわ。

…普通ならね。

私はその広範囲魔法を全て1点収集させ、さらに強力かつ凶悪な魔法に仕立て上げる。

超高密度の魔力が全て電気属性の石化破壊能力に変換されて、プラズマを超えた無色透明の無音空間を発生させる。

超強カステルス砲撃魔法。

（さて、避けないと危ないよ）

…エンドレスブレイカー

「く… そんな魔法受けられるはずがなかつ…！」

勘が働いたのか、必死に直線状から避けて退避するシグナム。

そして、その向こうで、海が消えた…

爆心地から一瞬で、音も無く只気化した水が水素と酸素まで分解され、地平線までの海が無くなる。

浅いとはいえ、それだけ膨大な量の水が気体になれば当然膨張するのだが…

…これも魔法でほとんど影響がない。

この異常さは、後々シグナムも気づくだろう。

ただ、静かに実力を示す。

「海が…」

そつつばやいたのは無意識だったのかな？

でも、これで十分。

だから、呆けている間に電気属性のエレメントをぶつけて気絶させる。

そして、墜落していくシグナムを抱えて陸に寝かせておいた。

後に、この世界に大きな大陸ができ、文明が出来ることになる。

それは、あの魔法で消された水が石化する事によって出来た石の大地。

しかし、この時はまだ誰もそんな事は考えなかった…。

第18話：シゲナムvsアリシア（後書き）

注意

今回はあとがき長いです。

それに、読み飛ばしても問題ないように書くんで、バンバン飛ばしちゃってください！！

てか、あとがき読む人っているのかなあ…？

ま、一区切りついたんで自己満足のために駄文書く事をご了承ください…。

さて、アリシア、強すぎる…

正直、やり過ぎました^^；

もっとも、近づかれる前に滅ぼすタイプなんで、接近は弱いはずなんです…

魔力多ければ正直何でもできそうで、意味がない…

完全防御の結界とか、ゼロ距離砲撃パンチ連打とか…

さすが、リンカーコア持ちですね…

まあ、普通のリンカーコア持ちじゃあ無理だろうけどw

魔法器官の性能としては、

リンカーコア>《越えられない壁》>魔力タンク>生体魔力の運用
なので、リンカーコア持ち魔術師が現在主力なのは変わりありません。

魔力タンクは作成コストもだけど、倫理的に問題のある部品がいくつか使われており、実用化は不可能。

また、リンカーコア持つてる魔術師には魔力タンクを持ってても誤差程度の性能しか変化がありません。

一重に、魔力タンク自体が使うのに思考領域を食うし、一度に運用できる魔力が少ないからですね。

それなら、最初から生体内にリンカーコア入れちゃった方がまだ使える…

あと、もうひとつの方法に代理行使ってのもあるんですが、それはまた追々…

どちらにしろ、魔法を使えない人が魔法を理解しなければ根源魔法は使えないんで、ハードル高すぎますね。

あ、あと今更だけど根源魔法っていうのは造語です。

起源魔法の方が言葉の意味合いとしては正しいかな。

ようは、呪文を唱えて魔法を使うあれです。

あとは、魔法陣とか呪いとか、儀式とか、デバイスの登場する前の魔法をひっくるめてこう呼んでいます。

だから、ベルカのカートリッジへの魔力封入や、本編中でなのはが使った魔力の受け渡しなんかも根源魔法です。

戦闘用に使ってるのは見た事無いけど…

あえて言うなら、空き缶ぱんぱん吹き飛ばしてたのは攻撃系の根源魔法と言っても良いかも。

ちなみに、本来の根源魔法に魔力タンクなんてありません。

生命が作って垂れ流している魔力を使って行使するのが通常の根源魔法。

リンカーコア持ちはそれをストックできるから大魔法使いと呼ばれ、理屈を理解して探求するのは魔法学者と呼ばれています。

デバイスが開発され、演算が高速化するまでは世界には根源魔法しかありませんでした。

そして、それ以前は世界中が薄い虚数空間に満たされていたため、魔法は使えず…

結果、虚数空間の晴れ渡りが起きて初めて次元世界の管理人というバグの集大成が排出されたし、その後にアルハザードが魔法を見つけました。

そのうゝゝんと昔は魔法のあった時代もあったかもしれないけど、そこまでは考えておらず…

ま、てな訳でこの話の始点は遙か昔の始まりの魔法世界アルハザードに行きつきます。

あえて言えば、魔法使えるようになったのは複数の世界が同時で、

一番発展したのがアルハザードだったと言っただけです。

次元空間転移魔法を一番最初に開発したのも大きかったんでしょうね…

これ以上は原作ブレイクになるから割愛。

てか、これ以前にもうすでに何度か…

アリサとすずかを介入させたのは原作ブレイクじゃないのかと言われれば、返す言葉もありません…

紹介文章書き直そうかな？

まあ、それはまた問題もあるかもしれないんで追々…

というわけで、いつも読んでくれてありがとうございます。

これからも何卒見捨てないで下され〜

第19話：はやてとの交渉と帰還後の事。

さて、余計な3人はアリサ達が引きつけてくれた。

これが4人以上の相手なら、アリシア君の遠距離魔法で即倒して同数戦に持ち込むのだが、そう考えればちょうど良かっただろう。

これで私も交渉に専念できる。

もともと、アリシア君は速攻終わらせて他の2人のサポートに徹するだろうが。

「さて、八神はやて君。私達は交渉と行こうか？」

「交渉はやて？」

突き飛ばされた八神はやてに追いつくと、私は早速主題を切り出した。

アリシア君はともかく、他の2人には分の悪い勝負。

特に、すずか君は時間稼ぎが目的で負けるのはほぼ確定だろう。

特定の条件下ならすずか君の方が上だが、今の現状では負けるのがほぼ必須。

なら、話は早い方が良い。

それに、八神はやても早くリイン君を取り返したいと思っているだろう。

だからこそその短期戦。

それに、予想通りのってくれた八神はやてに内心感謝すると、私は交渉体制に移った。

「私の目的は先ほど話した通りだ。

そして、プログラムを消す技術もこちらにある。

しかし、安全に行うためにはどうしても邪魔なプロテクトがかけられているんだ。

それさえ解除し、消させてもらえればすぐにでもリイン君を返そう。

…どうだい？」

「私は…」

はやて君は一瞬考えるが、それは決心の時間。

そして、自分の本心を超えて冷静であろうとする努力。

…答はすでに出ているのだろう。

「私は、リインの家族や。

いつまでも一緒におりたいと思うとるし、笑っていて欲しいと願うとる。

そして、こつも思つとる。」

一瞬の間を開けて、彼女はしつかりと言い放った。

…リインは私の所有物やのうて一人の女の子だと。

それは、物への愛着を超えた者への確かな想い。

人に向けられるのと同じだけの重さを持った想い。

それだけで、はやて君がどれだけリイン君を大切に思っているのか

が分かった。

「だから、私はリインの意思を尊重したいし、そのリインが認めていないような事はしとくない。」

「つまり、断ると?。」

「そうや。」

短い沈黙。

先ほどまで錯乱していたのが嘘のような模範的回答。

プログラムの削除の約束はとれなかったが、この回答ならリイン君の意思次第では消してくれる事も考えられる。

ならば、あとひとつ約束を交わせればかえしても良いだろう。

「ならば、一つだけ。」

…これはリン君とも交わした約束だ。」

「リンと？」

いぶかしむ様な視線を受けたのは、信用されていない証。

しかし、それでも良いだろう。

もともと信用されたくてこんな事をしているわけではない。

只の自己満足だ。

それにつき合わせた3人娘には悪いが、私には譲れない物が多すぎるんでね。

「リイン君を1週間だけそちらに返す。

その代わり、1週間後に返答を持ってリイン君をこの世界のこの場所に連れてくると約束してほしい。」

「なんやて?」

不信任を募らせた目。

何か裏があるのを決めつけているようなその瞳は、見ていてあまり心地よいものではない。

しかし、私はべつに後ろ暗い事も何もない。

なら、正面からその目に応えてやるべきだろう。

またしばしの沈黙。

そして、無音で交わされる腹の探り合い。

周りで鳴る爆発の音と光の弾ける無数の色の閃光がどことなく遠く感じる空間。

そして、つかの間でありながら長く感じる時を過ぎ、はやて君は口を開いた。

「裏は無いんやな？」

「要求さえ通れば此方としては問題ない。

注意点を2つ付け加えるなら、先ほど言ったようにプログラムのコピーは禁止なのと、1週間後のこの時間を正確に守って貰わなければ強制的に奪い返すという事だけだ。」

「一つ目はともかく、強制的に奪い返すなんてできるんか？」

「…周りを見るがいい。」

一瞬迷ったようだが、周りの戦場を交互に見まわす八神はやて。

アリサ君とフェイト君の戦いはどうという事の無い物だ。

高速の接近戦。

ちょうど最後の一撃を入れるところだったらしく、アリサ君の放った自爆特攻がフェイト君に決まって吹き飛ばしていた。

しかし、そのすぐ後にアリシア君にフェイト君が支えられる。

アリシア君の方はすでに片付いたようだね。

そして、すすかの方はまだ激戦が続いていた。

ちょうど発動したアビスシールドでなのはの攻撃を受け止めるが、砲撃発動の瞬間にフェイトが落ちるのを見たのはが集中力を切らして威力が落ち、致命傷には至らなかった。

そして、爆煙の中から現れたすすか君はまだ諦めていないのか、魔法の行使に入る。

あれは… ダメ・ジトレーサーか。

「あれ、シグナムはどこや!？」

「ああ、先ほど私の仲間が倒して下に寝かせに行ったよ。」

「下…！！！」

そして、下を見たはやては固まる。

そこには、いつの間にやら石の大地が出来上がっていたのだ。

直線に近い扇状に開いていく構造のその大地は、先ほどまではやて君たちがいた島を起点に地平の先まで続いている。

それがいつできたのか、私にも分からなかったあたり、アリシア君の魔法制御や能力は馬鹿げたものだろう。

魔力の運用効率100%で水を石に変えたのか、魔力の残滓を隠蔽して隠したのか…

…どちらにしろ、私には到底できない事だ。

「なんや、この馬鹿げた力は？」

「これが私達の戦力だ。

これで分かって貰えたと思うが、私たちなら管理局にしようが連れ戻すのは容易だ。

だから、素直に返す事をお勧めするよ。」

若干アリシア君の異常な力に呆れながらもおくびにも出さずにそう告げる。

さて、これで飲んでくれるか…？

「こっちからも条件がある。」

「なんだ？」

「あんたらの秘密まで聞こうとは思せん。

でも、これだけは教えてほしいんよ。

あんたらの名前。」

「ふむ…」

これは困った…

真顔でこんな事を言われれば、どう返せばいいのか…

しかし、嘘をつく必要もないか…

「すまないが、少々問題がある。」

「なんや？」

「あの3人に関しては、君たちに名前を告げると非常にまずい人物なので返答できない。」

「まずいって… 私達の知り合いかなんかか？」

「そんな物だ。」

「…まじかいな。」

あきれ返って3人娘を見回すはやて君。

しかし、3人とも髪色や肌の色を若干変えているし、声も発してい

ないから問題ない。

「そして、私に関しては… 名がない。」

「名前が無い?!」

これは普通に驚かれるだろう。

世界中を探せば名前が無い者は多いが、管理局員には名前があるし、管理局の関与している世界に名前の無い者はほとんどいない。

だからこそ、名前が無いと言えばほとんど管理局の知らない辺境の者が、何らかの事情で名前を捨てた者だけだ。

つまり、自分で管理局の関係者ではないと言っているようなものなのだ。

しかし、それはすぐに納得してもらえたらしい。

顔を見せている以上、管理局に関係のある人間のはずがないのだ。

「でも、3人は管理局員なんよね？」

「…どうかな？」

とぼけてみるが、内心冷や汗だ。

少々言い過ぎたらしい。

もつとも、勝手に管理局の誰かだと勘違いしてくれれば此方としては楽だろう。

なにせ、Sランクの魔術師を落としているのだから、管理局上層部の誰かだと思われやすい。

それなら、見当違いの所を捜査して結局迷宮入りしてくれる。

そんな事を考えていたら、すずか君となのは君が会い打ちになって落ちて行った。

まあ、アリシア君とアリサ君が行ったから大丈夫だろうが。

アリサ君がなのは君を受け止めた時に若干顔をしかめたのは、無理な戦いをしたせいなのでしょうがないか。

「まあ、話を戻すが、どうだい？」

「分かったわ。その話受ける。」

でも、良いんか？

そっちに返すメリットなんて無いんよ？」

「なに、こちらはプログラムさえ破壊できれば問題ないさ。」

「…分かったわ。」

そう言ったのを確認して、私ははやて君にリン君を渡した。

目元が若干濡れているのは、喜びの涙だろうか？

「じゃあ、1週間後のこの時間、この場所で待っていてくれ。」

「分かったわ。そっちも遅れずにくるんよ?」

「ああ、善処しよう。」

そう言つて、私はアリサ君たちの方へ、はやて君は地上に寝かされているのは君たちの下へとそれぞれ向かった。

さて、目的は果たした。

あとは帰還するだけだ。

すではやて君たちも家路に就いたし、心配する物は何もない。

しかし…

「アリシア君、これだけは言わせてくれ… やりすぎだ。」

「だって、先生…」

たしかに、私は実力を見せつけろと言った。

そして、アリサ君やずか君が失敗する分までアリシア君に補ってもらう予定だった。

しかし、これはあまりにもやり過ぎた。

ふくれっ面で顔をそむけるが、さすがにやりすぎなのは分かっているらしい。

まあ、普段あの世界でしか魔法を使っていないのもあるだろうから、力の加減が分からないかったんだろう。

それに、これでもある程度は抑えてはいるようだ。

彼女の一番得意な戦法は次元跳躍魔法による広域攻撃魔法。

それを打ったそばから別の世界に転移してリチャージするという、
とんでもない技。

只でさえ負担が多いのに、最高3発の大出力を認識範囲外から打ち
込むため、やられる方としてはたまったものじゃない。

そして、同じ空間にいる場合は解析能力の高さから、発動した魔法
は全て分析される。

目視範囲内外から行われるその行為は、さほど無意識でありながら
とんでもない効果を発揮するのだ。

弾道予想、発動魔法の効果察知、影響の算出から相手の目的の分析
まで広く行われるそれは、ほとんどタイムラグなしで行われる。

デバイスの処理自体が高性能なものもあるが、一重に彼女の能力の高
さもあるだろう。

元からフェイト君を基盤に、さらに高性能に作られた存在だ。

さらに私が外装や器官の強化もしているため、実質最強の魔法使い

と言っても変わらない。

彼女に勝とうとするなら分析される事の無い格闘技か、認識処理より速い攻撃、交わす事の出来ない広範囲魔法のどれかが必須になってくるだろう。

まあ、そういう点では速度と接近戦で戦う妹のフェイト君が天敵か。

「まあ、とりあえずは帰ろうか。」

「…うん。」

「分かったわ。」

影入りの魔法を使えるすずか君は眠っているが、道具自体は指輪として身につけている。

だから、それを拝借して異空間へと私達はもぐりこんだ。

そして、戻ってきたは良いが…

「アリサ君、手を見せてくれないか？」

「なんで？」

「アリシア君に回復魔法で直してもらったようだが、一応念のために検査をおきたい。」

「分かった。それならお願いするわ。」

ぼろぼろに破れた服のせいで、差し出された手は覆う物が全くない。

丈夫な繊維で作られた服だが、どうやら戦闘には耐えられなかったようだな。

「ふむ、骨にダメージが残っているのと筋肉の再生が追い付いていない…」

本来は2・3日安静にしておく事を進めるが、出来るかい？」

回復魔法で回復した物は所詮即席の応急処置。

筋肉の細胞数や皮膚は治るが、その結合が完全に定着するまではしばらく時間がかかる。

普段はそれも数時間〜1日程度だが、今回はダメージが多かったせいもあり、直しきれなかったようだ。

「明日から仕事があるから、それまでなら…」

今日でも夕飯やその後は全く使わないのは無理ね。」

「ふむ、なら回復薬と応急手当の道具を渡しておこうか。」

変に筋肉が繋がると激痛が走るだろうから、その時の痛み止めも渡しておこう。」

「そこまでしなくても、このくらいなら平気よ?。」

「念には念を入れた方が良い。」

実際、万が一の場合はいきなり皮膚が裂けて鮮血が吹き出す事もある。

裂け目から肉やなんか飛び出したら悲鳴の嵐だろう。

そんな事がないように注意はするだろうが、それでも万が一という事がある。

そう思つて、私は薬を支給しておいた。

「…あれ、ここは？」

「どうやら御姫様が御目覚めのようね。」

私の腕の中で目を覚ましたすずかに、アリサはそういった。

それで、現在の状況を認識したのか、すずかは飛び起きて私を見つめる。

花も恥じらう乙女でも無いだろうに、こっちは父親気分で抱いていた所から飛び出され、少々ショックを受けたのは内緒だ。

親離れはいつでも寂しいものなのかもしれない。

「それで、今日はもう良いの？」

何もやる事無いなら、私は研究に戻るけど。」

「あ、私も行っていい？」

「いいよ、すずかちゃん。」

「ありがとう、アリシアちゃん。」

アリシアは暇な時は研究室にこもって何かの研究をしている。

最近はずか手伝うという名目で勉強に行っていることがよくある。

私は生体関係の研究が多いが、この二人はどちらがと言うとデバイスや魔法技術の方を中心に研究しているようだ。

生物学の繋がりで作った魔力タンクの高性能化やデバイスとの共用、人工知能の発展や研究なんかは私ではもう及びもつかない。

若い頭は柔軟で、どんどん吸収していくのが少々うらやましいね。

「2人は研究か…」

私はまたあそこで修行してこようかしら?。」

「一人で大丈夫?。」

「平気、入口までだから。」

「っと、こらこら、安静にしないとダメだろう?。」

そして、一人になったアリサ君は良くこの研究所の外へ修行に行く。

前も言ったかもしれないが、この研究所の外は虚数物質で満たされた虚数空間だ。

中庭は屋内だから魔法を使えるが、この外は魔法が使えない。

いや、根源魔法なら辛うじて使えるが、かなりの技術を要する。

そして、そんな世界にも危険な生物が少なからず生きている。

だからこそ、外に出る時は相応の用意が必要だし、その道具は渡しであるながらも所詮は質量兵器の銃。

一般人がそんな物使えると言う異常性もあるが、なにより現状では発射時に手にかかる負担が多すぎる。

アリサ君の得意な体内発動の根源魔法も、普段ならこの外の世界では有効な攻撃方法だが、同じ理由で却下。

まさか、痛めた右手を使わず左手だけで行くつもりだったのだろうか…？

「左手一本じゃやっぱり無理かしら？」

「頼むから安静にしていってくれ…」

どうやらそのつもりだったらしいが、無理させるわけにもいかずに止めた。

しかし…

「先生も行けばいいんじゃないですか？」

「あ、私もそれが良いと思うよ！」

アリシア君とすずか君が余計な事を言ってくれた。

確かに運動不足だが、私は渡してやる事がある。

だから断ろうとしたのだが…

「あ、それいいかも。

先生の我がまま聞いたんだから、私のわがままも聞いてくれるよね、先生！」

「う…」

先に痛い所を突かれてしまった。

そう言われれば、確かに巻き込んで怪我をさせたのに私にも責任がある。

なら、この位は手伝っても良いだろう。

しかし、研究が…

「私も研究をしたいんだが…」

「どうしても…ダメ？」

瞳を潤わせて下からのぞきこむアリサ君。

少々小首を傾げているのが愛らしいのは、意識してやっているんだろぅ。

大概やられている行為ではあるが、これは…

…

…

「わかった、ついていこう。」

「やったー!!」

途端に元気になってすずか君やアリシア君とハイタッチをするアリサ君。

私も相当甘いらしい。

泣き落とし（？）にかかるようでは、まだまだ修行が足りないな。

「では、私は準備をしてくる。」

「じゃあ、私も準備してくるから出口で待ってて!」

「ああ、しっかり準備は怠らずにね。」

走り去っていくアリサ君と、微笑みながら歩いていく2人を見送り、私も準備することにした。

第19話：はやてとの交渉と帰還後の事。（後書き）

執筆する方は結構長く感じる…

でも、読むと一瞬で終わる。

結構、小説は難しいですね。

書く分には長めに書く事を心がけてちょうどいい感じ。

文章が硬すぎると思っても、読んでみると意外とそうでなかったりするんで、読み返しなんかして自分で調子確かめるのが一番勉強になる時です。

あと、ほどほどに書き進んでから通し読みするのが意外と書いてる方の楽しみで、誤字脱字・文法ミス見つけて治せるから一石二鳥！

頭の中でこれからの展開や伏線を考えて一人でニヤニヤするのもなかなかおつな楽しみ方かも…

書いてる人しか知らない秘密って、結構ドキドキするもんですよ♪

というわけで、小説書いてみる人募集中。

10 作品位書いて失敗すればコツつかめるんで、後はその人次第かな。

『そして、知るが良い… 小説書く事の難しさを!!!』

…とまあ、馬鹿言っていないで続き書かなくっちゃ。

第20話：再会と再開とそれぞれの動き

深い深い眠りの中。

私は夢を見ていました。

それは、とても懐かしい夢。

遠い記憶の中にかすかに残る、かつての私の見た最初で最後の笑顔。

夢の中の私は、行かないでと叫ぶ。

けれど、その人はただ首を振るだけで、私を置いていってしまった。

まぶしい光の中に。

記憶の中の私は、それでも私じゃなくて。

私であって私でないもの。

でも、これだけは分かります。

私は、確かに私の手で…

その人を殺してしまった事が。

暖かい日差しが差し込んで、私は目を覚めました。

ぼやけた頭が徐々に鮮明になって、その過程で今まで見ていた夢を徐々に忘れていきます。

すでに靄がかかってしまった時、何か大切なことだったような気がして思い返してみても、その夢の内容はもう記憶の彼方。

心の奥底にしまわれてしまったみたいで、思い出せませんでした。

でも、ここはどこでしょう？

目が覚めるとそこは見知らぬ天井…

というネタはもう2回目なので良いとして、眠る前のことを思い出してみます。

たしか、あのときは私を誘拐した人にはやてちゃんのところへ返してくれると言われて、それを承諾しました。

それで、1日経ってすぐに行くことになって、私は元の世界に戻る
ときのことを覚えていてほしくないと言われたから、睡眠魔法で眠
らせてもらったはずです。

でも、すぐに目を覚ましてはやてちゃんのところへ行くはずだった
のに…

コンッ コンッ…

「あ、はい…」

返事をしてすぐに、私は自分の失敗に気づきました。

これでは起きていることがばれなのです。

よくわからない時は寝たふりをするべしとはやてちゃんに教わった
のに、これじゃ全然意味なかったです。

でも、このときはそれでよかったみたいです。

「リイン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドアを壊れるくらいの勢いで開け、入ってきたのははやてちゃんでした。

それがうれしいのは事実なんですが…

「は、はやてちゃん、ちょっとま……!!!!!! あうッ……」

ってくださいです!!!!!!と言おうとしたけど、その前にははやてちゃんが突っ込んできたのです。

これは、予想外でした。

はやてちゃんは私を押しつぶさんとする勢いで抱きしめると、久々の感じを確かめるように猛烈に頬ずりをしたのです。

普段は気持ちいいはずのそれも…

(あ、熱い… 苦しい… し、しんじやいます!!!!)

必死にもがくも、力の差は歴然で、はやてちゃんはなかなか放してくれません。

これじゃあまずい…

そう思った時。

「主はやて、そろそろリインを放してあげなければ、すでに瀕死です。」

「え… あ、リイン!!!!!!」

ようやく解放された私は、とにかく酸素を求めて呼吸します。

え、デバイスは呼吸必要ないですか？

…気分の問題です。

というか、圧迫によるプログラムのバグを修正しているんです。

「リン、大丈夫か？」

「はいです、おかげで助かったのです。」

「それは良かった。主も嬉しいのは分かったから、もう少し自重してください。」

「はーい…」

不貞腐れたはやてちゃんを慰めるシグナム。

たった数日見てなかったただけなのに、それがひどく懐かしく感じるのはなんででしょう？

でも、それもいいかもしれません。

だって、普段の時間がとても大切に思えてくるのです。

「さて、積もる話もあるかもしれないが、目が覚めたのならまずは事情聴取をさせてもらえないか？」

「分かりました。でも、私の知っていることと話せることは多くないです。」

それから、私はあそこで見て、聞いて、体験したすべてを話したのです。

魔法の使えない虚数空間に覆われた世界。

獰猛な獣が徘徊するといわれる外。

無機質な建物とさまざまな部屋。

廊下を走る乗り物。

そして、そんな中にあつた箱庭と呼ばれる庭園。

ここ数日で知ったあの人のことも話しました。

「なるほど。その話がほんまなら、悪い人ではないんじゃないかな。」

「はい。でも、能力は渡したくないです。」

これまでの話であの人のほしがってた物のことも話しました。

そして、渡さなかった理由と私の想いも話したのです。

でも…

「リイン、能力が先代のリインフォースの形見やから渡せんのは分かる。」

でもな、たとえその能力がなくても、私はリインを捨てたりせえへんし、これからもリインと一緒に戦っていきたいとおもうとる。

これだけは忘れんといてや。」

「…はい。ありがとうございます、はやてちゃん。」

ちよつと涙が出ましたが、はやてちゃんがふき取ってくれました。

これほど果報者なデバイスはそうは居ないのです。

「だが、結局どうする？」

相手の要求通りにリンのプログラムを消すのもどうかと思うが、このまままたリンをあいっくに渡すわけにもいかない。

それに、管理局で匿うにしても永久には無理だろうし、そもそもあの魔法を使える魔道師ができたら管理局でも厳しいと思うが？」

「その問題は私らだけでは決めとくない。今晚シヤマルたちも呼んでみんなで話そか。」

「…分かりました。管理局にはどう伝えますか？」

「ありのままでええよ。手伝ってもらえるのに隠し事はしとうない。」

「分かりました。では、私は少々伝えてきます。」

「よろしゅう頼むわ。」

そう言って出ていくシグナムをはやてちゃんと2人で見送りました。

「それで、はやてちゃんの方はどうだったんですか？」

「ああ、こっちはこっちで大変だったんよ。」

そして聞かされたのは、みんなの戦闘。

確か、私が交渉して通れば戦わない予定だったのに、眠っていたせいで戦闘になっちゃったみたいです。

私は、あの人の言っていた当初の予定のことも含めて話しました。

「…なるほどな。　だいたい分かったわ。」

「でも、はやてちゃんは戦闘しなかったんですね。」

「うん、私はずっと犯人と話してたさかい、戦闘は3人に任せたんですよ。」

デバイスも借りものやし、私に合わせて作ったわけとちゃうから扱いづらいさかいな。」

デバイスの貸し出し時にいろいろな調節はしますが、やっぱり長年使っていたデバイスと代用品では性能に差が出ます。

それに、慣れないデバイスだと唯でさえはやてちゃんはコントロールが苦手なのに、みんなに合わせて使うのは難しいです。

だから、今回はなのはさんたちに任せていたそうです。

結局、なのはさんたちも負けちゃいましたが…

「リインがサポートできればいいんですが、夜店の書が無い今は正直厳しいです。」

「まあ、1週間後のこともあるさかい、そのこともそれからや。」

「分かったのです。　よろしく願いしますね、はやてちゃん。」

「任しとき。私が必ずどうにかしてみせるわ！」

しっかりと私の手を包み込み、はやてちゃんは頷きます。

ちよつと天然で失敗しちゃうこともあるけど、まじめで一生懸命がはやてちゃんのとリエ。

だから、いつも勇気をもらえます。

「よろしく願いしますね、はやてちゃん。」

だから、私もはやてちゃんを信じるです。

たとえどんな結果になっても、能力を失っても、私ははやてちゃんを守る。

そう、今決めました。

ところ変わって管理局の一室。

休息用のスペースに私たちは居ました。

「どうだった、なのは？」

「うん、普通に事情聴取だけ。」

「それも普通に終わったよ。」

「こつちも同じかな。」

あの戦闘後、私たちはシグナムはやてちゃんの方まで報告しました。

私たちは途中で気絶しちゃったけど、はやてちゃんから事の結末は聞いてるし、デバイスの記録データもあるから結構簡単に終わりました。

「でも、結局犯人は誰だったんだろ？」

「うん、1人は分かってるけど、残りの3人がね……」

帰ってきたリインが目を覚まして、今までの事を話してくれた記録は受け取りました。

そして、その過程で主犯を除く3人のことも聞きましたが、あまり

有力な手掛かりは得られていません。

唯一の手掛かりは私たちに名前を知られるとまずい人物ということだけ。

私たちの関係者であれだけの実力を隠し玉に持っていそうな魔術師は、正直あまり多くはありません。

でも、そのほとんどが事件中のアリバイがあって白だったし、疑わしい人も1週間後の予定の日にアリバイを証明してくれる予定が立ちました。

管理局のプログラムにハッキングできる人がいるので、どうなるかは分かりませんが、なんとなくその人たちじゃない気がするんです。

「フェイトちゃんは心当たりはない？」

「私はないかな。」

あ、でも、寝る前に抱かれた感じが……」

最後の攻撃を受けて落ちるとき、相手もぼろぼろですでに体力もか

なり使っていたのか、強烈な痛みの上にそのまま浮遊感を味わいました。

でも、次の瞬間には誰かに抱きとめられていて、それに安心した私は意識を手放しました。

「感じが？」

「うん、難か懐かしい気がして…。」

安心して眠れる感じ。

心の温まる人と一緒にいるような、見守ってもらっているような…そんな感じ。

「それって、お母さんのような？」

「うん、私はあまりそういう風にされたことないから分からないけど、そんな感じかも。」

「あ、ごめん…」

「ううん、気にしないで。」

首を横に振って、本当に気にしていないことをアピールします。

心配性のなのはけど、これで分かってもらえたかな？

「なのは何か手掛かりが無いの？」

「ううん、私は直接声を聞く機会があっただけけど…」

「え、そのデータ残ってる？」

「うん、あるよ。」

そして、再生された声を聞きます。

片方は戦闘中になのはを呼びとめる声。

変声魔法でも使っているのか、裏声でも使ってるのか、何処となく男っぽい中性的な声。

私にはそれが誰か分かりませんでした。

そして、もうひとつが戦闘後の苦悩で漏らした一瞬のうめき声。

「あれ、これってどこかで…」

「うーん、私は両方ともなんか違和感が…」

「そうなの？」

ということは、なのはと私の共通の知り合いでしょうか？

でも、これだけでは誰なのかまったくわかりません。

他に手掛かりはないかな…

「もしかしたら、管理局の人じゃないのかな？」

「管理局員じゃなくて私愛の知り合いだとすると、ターミナル前のパンやさんとか？」

「いつそ、地球にいたときの知りあいだったりして！」

「そんなはずないよ、周りに他のリンカーコア持ちなんて居なかったでしょ？」

「だよね」

一応、はやての一件があつたせいで、地球の人々の魔力反応は調べました。

特に海鳴市の周辺はアリサちゃんやすずかちゃんを含めて全員嚴重にチェックし、他に強い魔力を持った人がいないことは判明しています。

地球全体では有能そうな人が何人も見つかったみたいだけど。

「そいえば、あのうめき声ってアリサの声に似てるかも。」

「あ、確かに。」

でも、アリサちゃんは魔法使えないし、何か知ってるなら教えてくれるはずだもん！

だから、違っでしょ。」

「でも、言えない事情があるのかもよ？

それに、なのはも似てると思ってるんでしょ？」

「でも……」

まあ、確かにアリサはリンカーコアがない。

でも、それは一般常識の話。

あの主犯の人は私たちの予想だになかった魔法を使ってくるみた
いだし、もしかしたらリンカーコアが無くて魔法が使える方法が
あるのかもしれない。

「まあ、私もさすがにそれはないとは思っただけだね。」

いじめすぎてごめん、なのは。」

「もう、フェイトちゃんもひどいよ!」

「あはは」

まあ、それもほとんどありえないんだけどね。

アリサがそんなことができるとしても、そもそもアリサと魔法の接点なんてない。

それに、私ものとは同じく、アリサなら私たちに隠さず話してくれるって信じてるから。

「でも、一応電話かなんかで確認だけはしておこっか。」

「疑うみたいでいやなんだけど……」

「まあ、一応だよ。」

違うなら違うではつきりさせればいいしね。」

「うゝ。」

なのはは渋っているから、私から後で連絡しておこうかな。

それで、1週間後にアリバイ作ってもらえば実証されるし。

「でも、もし1週間後に主犯の人だけが来たらどうしよう?」

「その時はその時だよ。」

それに、来ないなら私たちが犯人を捕まえられるかもしれないし。」

「はやてちゃんの魔法が効かなかった人を?」

「方法はきつとあるよ。」

強力なAMFも、聖王のゆりかごも、私たちはいくつもの絶望的なピンチを乗り越えてきた。

なら、今度もきつとどうにかできる。

「勝てると信じよ。」

そして、そのための作戦を必死に考えないと。」

「そうだね。　せつかくリインが帰って来たんだし、絶対もう渡さないようにしないと！」

気合いを入れて瞳を輝かせるのはに、私は見とれていました。

この輝かしい笑顔の裏には、たくさんの辛いことがあって、それでも負けずに立ち向かって超えた強さがあります。

そして、そんな瞳は子供のころよりずっと暖かく。

でも、負けない強さを持っていて、私は何度もその瞳に勇気付けられました。

「きっと、今度も大丈夫だよね？」

「そうに決まってるよ!」

「うん。私も1週間後には手伝えるようにシフト開けておくから一緒にガンバル。」

そして、次こそは必ず一緒に勝とうね、なのは。」

「うん、死ぬ気で頑張るよ!」

「いや、さすがにそこまでやって体調崩されちゃ…」

がんばる気まんまんのなのはに釘を刺しつつ、私は対策を考えだしました。

第20話：再会と再開とそれぞれの動き（後書き）

アニメ版SS見直し中。

ちと、『小説家になろう』グループの2次創作や自分の持ってたイメージとキャラクターが違っらしいんで調節します。

結構これはこれで大変だけど面白い…

第21話：洞窟での修行

「先生、行つたよ!!」

「任せてくれ、トリプルボンバー!」

私たちは今とあるダンジョンに来ている。

そこは、虚数空間に満たされた世界を駆け抜けた先にある一つの洞窟。

昔は研究機関として使われていたそこは、長い年月ではるか地下まで掘られ、その全貌はつかめない。

下に行くほど重要な技術や書籍が残っていることから、最下層には何かの宝があるのかもしれないが、私でも到達は困難だった。

それは、この洞窟の特殊な構造にあるのかもしれない。

外界から虚数物質の入ってくる場所の少ないこの施設は、空氣の循環機關が止まってからはたった一つの入口からしか外界との出入りが無い。

だから、虚数物質が入りづらい構造になっているのだ。

そのためか、入り口から離れば離れるほど魔力が濃い空間がある。

特に、この世界の生物は過酷な虚数空間で生きられるように魔力の発生量が多い。

そんな生物が虚数物質に侵される心配のないところに密集すれば、濃くなるのも当然だった。

そして、長い年月をかけてその洞窟でも生態系ができ、さまざまな動物が暮らす一種の楽園になっていた。

「トリプルボンバー」

「ナックルインパクト・ストライク！」

しかし、私たち根源魔法の使い手は魔力が濃いと戦いづらい。

正確には、魔力が薄くてもある程度戦える代わりに、魔力が濃いと相手のほうが力を発揮できてしまうからだ。

もちろん、根源魔法にも場所に影響されるものもあるが…

「トリプルボンバー」

「炎のエLEMENT展開… スターダストゲイン！」

私の魔法は濃い魔力中で威力が上がるものは少なかった。

元々レリックピースを常用しているせいもあるが、そもそも魔法自体が初級魔法の合成による中級以上の魔法の発動を得意としている。

魔法の発動が早いし制度もいいからね。

しかし、威力はやはり上級のそれに負ける。

まあ、どうせここでは上級魔法のほとんどが使えないがね。

…洞窟という場所の特性上。

「トリプルボンバー」

「クラッシュストライク！」

だが、アリサくんは別だ。

彼女は体内魔法の発動という特殊な魔法を使っている。

これは、発動が早くて威力がある分消費が大きい。

だから、常に外界から魔力を補給できるここでは戦いやすいだろう。

途中の虚数空間で魔力を消費していたが、今はほぼ限界まで回復しているあたりはこの魔力量のすごさが伺える。

「先生、まじめにやってよ！」

「これが私の限界だよ。トリプルボンバー」

さて、そんなところで私たちは何をやっているかといえば、ネズミの駆除だ。

しかし、唯のネズミじゃない。

軍団で移動する獰猛なネズミだ。

身体強化の魔法を使っているため素早く、集団行動をしております。小さいためなかなか倒しきれない。

そろそろ100匹は倒したが、まだまだ先は長そうだ。

それに、ここの魔力の補給源である生態系に大きな被害を与えたくないため、殺さずに気絶させているのも大変な理由だろう。

私たちの通った後を見つめれば、大量のネズミの群れが転がっていた。

このうちの何体かは気絶している間に別の生き物に食われるだろうが、そこまではさすがに面倒見切れないさ。

「まったく、今日は一段と多いわね。」

「しょうがないさ、ネズミに当たれば多くなるのは。

それか、帰るかい？」

「まさか、もうちょっと奥まで行くわよ！」

そう言つて、アリサ君はどんどん奥へと進んでいく。

正直このあたりで引き上げてくれた方が私としても嬉しいのだが、
そうもいかないようだ。

つと、そんな事を考えているうちに少々洞窟の幅が広がったようだ。

「じゃあ、先生、後は頼むわよ!」

「はあ、君が修業したかったんじゃないのかい?」

「私は中ボスクラスだけでいいの。」

だから、それが出たら残しておいてね!」

「はいはい……」

あまり戦闘をさせたくないからそれこそ私がすべて倒すか？

しかし、それをすれば次の獲物を見つけるか日が暮れるまでここに居続けるだろう。

なら、早めに大物に出会って満足してもらおう。

そのためにも、早く進まなければ…

「しょうがない、ネズミ相手には過剰戦力だが、悪く思っなよ。」

そっついながら、私は初級魔法の群れを放って周囲のネズミを一掃した。

そして、あいた時間で呪文を唱える。

それは、古い魔法。

そして、簡単な初級でありながら難しい魔法。

俗に言う召喚魔法だ。

しかし、生命を召喚するものではない。

それと呼ばれるのはたった一本の棒。

私の背丈ほどある棒は、真っ白の素材でできていて、表面にはびっしりと細かい文字が刻まれている。

それは、古くて遠い根源に近い魔法言語。

一見難解なそれは、しかしよく見ればたった一つの単語を繰り返しているだけだとわかる。

それは、唯『強く』と書かれていた。

「…盟約の元、我が下へと来たれ

遙かな時を支えし大樹　くユグドラシル」

そして、召喚された棒を私は手にした。

「先生のそれ、久々にみる気がするわ。」

「前使ったのは訓練の時だったか？」

「そうね。アリシアと模擬戦するために出してたはず。」

あのアリシア君と戦うのは私でもきつい。

レリックピースやダークマターは反則だから使えないし、だからと言って何も使わないのでは戦いにもならない。

だからこそのこの棒。

ロストロギアでもなければ、特殊な能力もない。

ただ、絶対に折れないという特性があるため、魔法を叩けばはじき飛ばせるし、剣を受けてもびくともしない。

それをただ振りまわすのだが、接近戦で質量武器の苦手なアリシア君にはかなり有効に戦えるのだ。

…もちろん、接近できるかと聞かれれば非常に難しいとしか言いようがないが。

「は！」

そして、私は取り出した棒で迫りくるネズミをまとめてなぎ払った。

突き、叩き、なぎ払う。

その3種類の攻撃しかできない棒でありながら、刃物とは違い何処を持って柄となり、何処を当てても武器となりうる万能な道具。

殺傷力は弱いものの、突破力なら相当なものだろう。

それに、私は昔からこの棒を使った戦いが好きだった。

まあ、もっと昔は槍も使っていたがね。

「月打ち、鏡割り、双打連撃、扇状波撃」

突いて突いて叩いて叩いて薙ぎ払う。

これだけで周りにいた数十匹のネズミが一気に吹き飛ぶ。

棒に風のエレメントを纏っているからこそその風圧や軽い真空波の攻撃も同時に行い、その攻撃範囲は見た目の何倍にもなっている。

さらに、この棒に刻まれた魔法文字は棒にまとった魔法にも効果をもたらす。

本来は魔力を注ぐことで棒を強くする効果だが、周囲の魔法も強化してくれるのだ。

だから、ある意味私の杖代わりでもある。

「っと、どうやら大物のお出ましみたいだね。」

ネズミを吹き飛ばしていると、今まで無数に襲ってきたネズミが我先にと逃げ出した。

そして、ネズミの逃げた方からやってくる魔力の気配。

「ようやくまともに修行できるわね。」

「危なくなったら手を出すかもしれないが、良いかい？」

「うん、でもその前に倒すわ！」

「まあ、せいぜいがんばってくれ。」

そういうと、私は物陰に隠れて様子を見ることにした。

一応ステルスと魔力断絶を発動しておいたから、これで私は気付かれることはないだろう。

流れ弾に注意しながら見ていれば、後はアリサ君がやってくれる。

そう思いながら、私は見守ることにした。

さて、ここからは私の戦い。

久々に本気で戦った後だからちょっときついけど、体力は回復しているし肉体の損傷も回復させてもらったから問題ない。

右手の使用は最小限に抑えないといけないけど、それだけだ。

「さて、今日の相手は誰かしら？」

遠く闇の先の魔力を見つめれば、大型の獣が現れた。

4足歩行の灰色の獣で、首のところには鬣の代わりに青い炎が揺れている。

姿かたちだけならライオンのようだ。

しかし、尻尾が太くて大きいため、少々注意しないとイケないようね。

「さあ、格下とはいえ十分な強さ。

あなたのテリトリーに入っただのは悪いけど、負けるわけにはいかないのよね！」

大きく左手を振りかぶって、私は戦闘態勢に入った。

「がああああ！！！」

そして、それを合図に突っ込んでくる獣。

直線的だが、かなりの巨体。

強化魔法も掛けているようだから、当たればひとたまりもないわね。

それに、首筋に炎を纏っているということは炎属性の熱にも注意が必要だわ。

かすっただけでもやけどを負うし、当たれば肉が焦げる。

なら、当たる前に打ち抜く！

「衝撃のエLEMENT展開… クラッシュインパクト始動！」

両手に集めたクラッシュのエレメント。

それを、両手を合わせることで筒状にする。

そして、その中心に炎の魔力を込めて発射した。

簡易砲撃魔法… 紅蓮突破

同属性の炎だからダメージは期待していないけど…

「がああ！」

吹き飛ばして初動をずらすことに成功した。

そして、その隙に私は足に衝撃のエレメントを集めて真横に飛ぶ。

数秒後には、私の元いた場所を獣が通り過ぎて行った。

そして壁に当たって獣は静止する。

しかし、すぐ壁から這い出して突撃の準備を整えた。

でも、それはこちらと同じ。

「地雷群… 展開。」

足に集めたエレメントをそのまま地面に流し、次に踏んだ時に衝撃を発生させるように準備する。

そして、それは先ほど私が逃げてきたコースにもいくつか仕掛けられていた。

広くなったとはいえ、もともとが狭い洞窟だから、その効果は計り知れない。

「がああ！！ あううう…」

まっすぐこちらに向かってくる獣はその一つに触れたらしく、大き

く仰け反った。

そしてその隙に近づいて攻撃の準備をする。

それに気づいた相手がこちらに襲いかかろうとするが… 遅い!!

「ナックルインパクト!!」

左手に魔力を込めて全力で振りぬいた。

しかし…

「硬い… それに、熱い!？」

すぐに撤退して手を見れば、左手も焼けただれていた。

これは… 正直あまり使えないわね。

残る攻撃手段は両足とあまり使ったべきではない右手。

それに、体全体での体あたりという手もあるわ。

…でも、あの硬さと熱をどうにかしないと、それも意味はない。

「があああ！」

そんなことを考えていると、獣はいきなり炎を吐きだした。

とつさに避けるも、軽く炎に煽られて下腹部にやけどを負ってしま
う。

それに、あの攻撃は少々厄介だ。

接近したときに放たれれば避けようがない。

「地雷群遠隔起動！！」

とりあえず、このままじゃまずいと思った私は、設置した地雷を発
動させた。

奇襲やダメージを与える効果はあまり期待できないけど、これで土砂を巻き上げることができる。

そして…

「エレメントボールシュート！」

魔力の塊を4つ、それぞれ別の方向に走らせた。

そして、私自身も走り出す。

これで、相手は私の位置がつかみにくくなったはず…

「がぁぁ！」

でも、そんなことお構いなしに獣は炎を吐きだした。

それは、私の出した罠の魔力に向かっていく。

そして、魔力弾をかき消して消え去った。

その副産物で、私の居場所を隠していた煙も消えるけど…

「スターダストゲイン！」

炎のエLEMENTを出してそれを衝撃ELEMENTでまとった右手で殴り飛ばした。

普通の炎で効かないなら…

より熱い炎で強化魔法を超えるまで！！

元より相手は炎を纏っているが、強化魔法を施した普通の獣だわ。

なら、熱量での強化魔法突破はやりやすいはずよ。

もちろん、相手のほうが炎を強く制御できるなら話は別だが、現状

では私のほうが魔法を理解している分制御力は上。

なら、後は一撃を入れるまで…

しかし…

「がう！」

それを理解しているのか、スターダストゲインも避けられてしまった。

これでは少々きついかしら。

「うりゃあ！」

「があああ！」

殴る合いになってはいけないので、衝撃エレメントで相手を吹き飛

ばす。

しかし、先ほどやられた左手に加えて右手ももうそろそろ限界。

足で蹴っても私に防御を突破できる技は少ない。

でも、いざというときは先生が助けてくれるし、できる限りやってみましょうか！

そう思って、私は賭けに出ることにしたわ。

「クラッシュインパクト… 地雷群！」

両足に衝撃のエレメントを纏って、また先ほどの地雷を埋め込みます。

それを見て学習したのか、獣はまた炎を吐きだすが、私はそれを避けて距離をとった。

そして…

「炎の蜃気楼！」

本来は私の場所をずらして見せる技。

でも、この魔法には他の使い方もあるのよ。

それは、とにかく光を曲げること。

乱方向に曲げられた光は像を結ぶことが無く、距離や位置を目線で特定するのが難しくなる。

そして…

「地雷群、遠隔起動！」

衝撃のエLEMENTのいくつかを起動して、またもや出した爆煙。

これで、視界での位置の割り出しは完全に不可能なはず。

魔力で位置を特定されるけど、それはエレメントボールを出してごまかし…

「深淵に眠りし奈落の王よ、我は汝との契約を願う。」

一時その力の一部を我に貸し与えよ。」

中規模詠唱魔法。

相手は炎を吐いて私を狙うけど、上手いこと罠のエレメントボールに引きつけられている。

これなら、詠唱が終わるまでもつかもしれない…

詠唱完了までに攻撃されたら私の負け。

詠唱できれば私の勝ち。

罠が残り3つで本体が一つなら、分の悪い掛けではないわ。

炎のミラージュの効果で景色が歪んでいる隙に、先ほど消された爆煙の代わりに次の爆煙が張られる。

自動起動を魔法言語で刻んでおいたから、一定間隔で爆発していくのよ。

「…大いなる加護により、我が形作るは凍てつく力。

幾本もの氷の支柱に閉ざされし大神殿。」

そして、その後にまた炎が放たれた。

これは、正直きついわね。

外れたからいいものの、私のすぐ横にあったエレメントボールが打ち抜かれた。

順番的には次は私…

「深き汝が眠りを守るその場所において…」

そして、煙と塵気楼の蔭から、私に向かって炎の光が届いた。

でも…

「我と汝が力は発現する！」

私の詠唱のほうが早く終わった。

広域凍結魔法… 雪姫の神殿

その魔法は相手の放った炎を一瞬でかき消し、周りの壁を凍らせながら相手に届いた。

そして…

「があがががが…！！！」

最後の咆哮を残して、獣は氷に閉ざされた。

まあ、それでも死にはしないでしょう。

呼吸なんて必要ないだろうし、元が炎の獣だからいずれは獣を覆っている氷も解ける。

しばらくはこのあたりが若干寒くなるけど、まあその程度ね。

「でも、疲れたわ……」

「お疲れ様。戻るだけの体力はあるかい？」

「うん。でも、先に治療お願いできる？」

「私はそちらは得意じゃないんだがね……」

そういいながらも直してくれるあたり、やっぱり先生はやさしいわ。

それに、得意じゃないといっても苦手ではないし、しっかりと肉体の構造や魔法のことを理解している先生は、ある意味一番効率よく回復してくれる。

だから、アリシアの回復より速度は遅くても、効果は大きかった。

特に、自然回復による肉体結合の再形成は倍近く違うわね。

大きな怪我をアリシアに直してもらったら、その部分をもう一度壊して先生に直してもらった方が完治までは早いくらいかも。

「さて、今日はこれで帰るよ。」

「分かってるわ。これ以上はさすがに私も無理そうだから。」

体力や魔力はあるけど、精神力がやばいわ。

この魔力に満ちた空間だからこそその詠唱式魔法。

それも、省略系での生成であれだけの威力を出せた。

でも、精神への負担は相当で、これ以上の行使はできそうにない。

…それに、両手も休ませたいしね。

「では、帰りの戦闘は私が担当しよう。」

「狭いところでの戦いも大丈夫？」

「なに、時間をかければ問題ないし、そもそも初級エレメントを使えばどうにかなるさ。」

「じゃあ、お願いするね、先生！」

私はあとは任せてついていくことにしたわ。

それから1時間かけて洞窟を抜けだし、私たちは帰っていった。

後日、右手が使い過ぎの結合不調で痛くなつたのは余談だわ…

第21話：洞窟での修行（後書き）

前書きについて。

最新話の前書きは作者のメモです。

投稿後消去しています。

偶に連絡も書きますが、読まなくても可。

逆に、伝えたいことはあとがきに書くことが多いかな？

…ほとんど雑談だけ。

第22話：事情聴取と疑われる事

さて、私は今アリサに電話を入れています。

用件はあの事件にかかわっていないかの確認。

念のために行われるそれは、すぐに終わるはずでした。

だから、その後になのはと夕飯を食べに行くことにしてるし、後ろにはなのも控えています。

でも、現実はそう甘くなかったみたい…

「え、居ないんですか？」

「ええ、そうなの。今朝から出かけててね。」

アリバイあれば楽なのに、そうは行かなかったみたい。

「どこに出かけたか分かりますか？」

「すずかちゃんと遊びに行くって言ってたけど、詳しくは聞いてないから分からないわ。」

携帯も圏外みたいだし……」

「分かりました、ではまた掛け直……」あ、帰ってきたみたい。」「

丁度いいタイミングで来たようで、電話先の忍さんがアリサを呼んでくれます。

そして、ちょっと待てば電話を替わったアリサが出ました。

「なによ、フエイト。こんな時間に。」

何かあった？」

「うん、ちょっと事件だね。」

そう言って、私は事のあらましを話しました。

どうやらその向こうにすずかも居るようで、ハンズフリーにして3人で会話しています。

「それで、一応確認したかったわけ。」

「なによ、私たちを疑ってるの?」

「ううん、ただ、確認だけしておきたかったの。」

それで解決するなら気兼ねなくやれるでしょ?」

電話の向こうでため息をつく声が聞こえます。

でも、お仕事だからこれはしょうがないの。

それが分かってるから、アリサも承諾してくれました。

「それで、アリバイを証明できそうなものは何かある？」

「食べ歩きだから特に何も買わなかったし、物は無いわね。

でも、ずっとすすかと一緒にだったから、証人になってくれるはずよ。」

「うん、今日はアリサちゃんは私と一緒にいたよ。」

電話越しに聞こえる声で、すすかの証言をもらいました。

あとは…

「他に証明できる人は？」

「すすかじゃダメなの？」

「友達や家族は一応ね…」

一部では、友達や家族がかばうこともある。
だから、一応もう少し聞いておきたかった。

「他か… 居ないかも。」

「でも、食べ歩きとかしたんでしょ？」

「私たち2人だと目立つからね。 変装して地味な服で行ったのよ。」

「なるほど…」

この二人の変装は結構すごい…

普段が容姿端麗なだけに、それを隠して髪色や髪形を変えると途端に誰からも気にされなくなる。

普通の仕草やちょっとした作法まで変わるから、よほど慣れていないと見分けがつかないの。

「でも、困ったなあ… 簡単にアリバイなんて証明してくれると思
ってたのに…」

「あはは、ごめんね、フエイトちゃん。」

謝ってくれるけど、むしろこっちの方が謝るべきかも…

疑ってごめんねって。

でも、そこは仕事だし、きちんとしないといけないから言わない。

「いいよ。その代わり、明後日あたりにそっちに行くけど、時間
取れる？」

「明後日か… 仕事が。」

「アリサ、忙しい？」

「うん。取引先との商談でね、休めないのよ。夜なら多少あい

てるけど。」

アリサは親の会社に勤めてて、結構たいへんみたい。

最近はみんなそれぞれの仕事を始めたから、休みが合わなくて…

前にあつたのも結構前だった。

「じゃあ、そこでいいよ。　すずかは空いてる？」

「うん。私は大丈夫。　一緒にお買い物とか行く？」

「そうしょっか。　久しぶりに地球も回りたいし。」

観光案内は確保。

久々に地球を回れるのはちょっと嬉しいかな。

「うん、じゃあ楽しみにしてるね、フェイトちゃん。」

「こっちもね。それじゃあ、明後日。」

「ばいばい」

「またね」

そして電話を切りました。

今から明後日が楽しみです。

「あ、なのはは明後日あいてる？」

「うん、仕事が入ってるかな。」

地球に行くの？」

「うん、直接会って話を聞いた方がいいと思って。」

「私も仕事終わってから行ったほうが良いかな？」

「それはなのはに任せるよ。」

どうせ会って話すのは夜になるし、大したことはないから。

「うーん、私も一応行くことにするね。」

なのはも、なんだかんだでアリサが心配みたいね。

違うなら違うで巻き込んで悪いけど、もし本物だったら何か私たちの知らない事件に巻き込まれているかもしれない。

それに、洗脳系の魔法もあるしね。

「話し合い自体は夜だから、それまでにアリサのうちで。」

「うん、分かったの。」

こうして、予定を決めて私たちは動きだしました。

でも、その横で…

「やっぱり、あの裏声はすずかちゃんのもの？ …そんなはずないよね
」？」

と小声で呟いたなのはの声は、私には届きませんでした。

さて、ところ変わって月村家。

すずかのへやで、私とすずかは作戦会議をしているわ。

「すずか、どう思う？」

「私が疑われるのは分かるけど、アリサちゃんが疑われるのはちょっと驚きかな。」

「なにか疑われるようなことに覚えは？」

「そう言われるけど、特に何もないのよね。」

「声を出した覚えもないし、顔を見られた可能性も低い。」

「まあ、明後日になれば分かるでしょ。」

「うん、そうだね。」

この日はそれで終わらせました。

そこまで確証があるわけでもなさそうだし、フェイトも本気で私たちだと思ってるわけでもなさそうだしね。

「それで、アリサちゃんの怪我は大丈夫？」

「ええ、先生に診てもらったし、明後日までにはきつと完治してるわよ。」

そう言って、腕を振って大丈夫なことをアピールしたわ。

ほんととは多重回復で結合が一部変な風につながってるからめっちゃくちゃ痛いんだけど、結合が治ればそれも収まるはず。

それに、痛みをやわらげる薬ももらってるから心配ないしね。

「何かあれば、私に言ってね。すぐに駆けつけるから。」

「もう、すずかは大げさなのよ。でも、ありがと。」

「ううん、友達だもん、気にしないで。」

お互いに笑いあって、これからの不安を取り払います。

私たちのことがばれると、先生にも被害が及ぶから気をつけないと特に、すずかは影入りの指輪を持ってるから、見つかったら大変なことになるしね。

「そいえば、今更だけどその影入りの指輪ってよく見つからないわね。」

魔力反応は垂れ流し、空間への影響力が大きいから普通はばれるはずなんだけど…

なのはやフェイトと一緒にいる時も特に気にしたそぶりも見せなかったし、何かあるのかしら？

「この指輪はね、強力な一体感をもたらす効果があるの。」

聞けば、影入りの指輪は本当の名前を『絶対存在』というらしいわ。

これは、普通は次元空間で存在を確定させるのに使うんだけど、力が強すぎて普段から常時展開してないと壊れるんだって。

だから、その効果をちよつといじつて、周辺の人間に馴染むようにすることで、気にならなくさせる魔法。

それに、遠隔調査や機械類には反応しないタイプの魔力らしくって、人間が直接会わないと感じれないらしいわ。

「だから、見るかる心配はほとんどないの。」

見つかるには、よっぽど深く集中するか、何らかの耐性を持った人にだけだって。

でも、フェイトちゃんやシグナムさん、はやてちゃんにも見つからなかったから、多分これから先も見つけられる人は居ないんじゃないかな？」

まあ、もし見つかったても素直に渡せばいいらしいしね。

調べても普通の機械じゃ探知できないから。

「でも、なんで私たちは普通に認識できるのよ？」

「あ、今は効果を抑えてあるからだよ。」

普段はつけてても気にならないでしょ？」

そいえば、普段は気にもしなかったわね。

ここ数年一緒にやってきても、今の今まで気にしたことが無かったし。

「でも、一応そろそろまた認識外にするけど、いい？」

「まあ、普段から気にしたくもないし、良いわよ。」

そついうと、途端に指輪のことが気にならなくなった。

がんばって意識を向けようとするけど…

「これは… 確かに気付かれないわね。」

目を合わせても素通りして、そこにあると分からない。

魔力反応を探してみても、あるはずなのに見つからない。

それに、徐々にそこに存在するのが当たり前になって、重要性が私の中で薄れていく…

「まあ、また必要なら言つてね。」

「私じゃ使えないから、助かるわ。」

そう言つて、指輪から私は完全に意識を外した。

そうしたら、もうどこにあるのかも分からなくなる。

さすがの効果だ。

「…でも、よくすずかはこんなもの使えるわね。」

「私は子供のころから付きあつてるから、慣れてるの。」

小さい頃は圧倒的な集中力で乗り切ったらしい。

一番最初に覚えた魔法が、エレメントじゃなくてこの指輪の使い方がいいから、よっぽど重要なのね。

「あるものを見つけようとするから、その存在が分からなくなるの。無いものを無いものとして使えば、後は勝手に指輪が効果を出してくれる。」

すずかは目を閉じて軽く息を吐き、心を落ち着ける。

そして、ゆっくりと確実に何もなければずの自分の右手の指の付け根をなでた。

すると、撫でた手は指のほんの少し上を通過していく。

何度やっても同じ。

「手触りも感触も何もない。

でも、確かにそこにあることは分かってる。

だから、呼びかければ絶対にこの子は応えてくれるの。」

「さすがにとっては大事なもののね。」

「うん、ずっと一緒にいたから。」

そう言うてにつこり笑うすずかの笑顔はまぶしかったわ。

「あ、でもアリサちゃんも私の大事な人だよ！」

「あはは、そう言うてもらえるとうれしいわね。」

大振りの手でパンパンと肩を叩き、ちよつと痛そうな顔をしながらも嬉しそうに笑うすずかを眺めました。

まあ、指輪と比べられるのはしゃくだけど、良しとしますか！

「私もすずかのことが大好きよ！ これからもよろしくね、すずか。」

「こちらこそ、アリサちゃん！」

お互いのに手を取り合い、軽く抱き合いました。

まあ、こんなことも偶にはいいかもね。

第23話：非日常と日常と

闇の中を書は行く。

人の手から人の手に、欲望の渦を渡りながら。

書と交換にやり取りされる多額の金銭。

それは、徐々に額を増し、膨大な値段で取引されるようになっていた。

そして、それと共に知られていく書の事。

あの『夜天の書』と同じもの。

これがあれば、八神はやたと互角で渡り合える。

自由に魔法の使える夢の道具。

…これが盗まれた『夜天の書』だ。

奪い合いの血みどろの惨劇。

あまりにも強力な書の力を巡る醜い争い。

そして、何人もの犠牲を出して、多くの欲望の海を渡って、ついにその書は主の下へとたどり着いた。

運搬用の船の上で行われる激戦。

そして、落ちていく幾多の次元航行船。

崩れゆく船の亀裂から、その書はまた次元の海に投げ出された。

しかし、その先は虚数空間でもなければ深い海の底でも無い…

それは、希望か、それとも破滅か？

主がその真価に気づくのはまだ先の話。

「わーい！」

私たちは今みんなでケーキを食べに来ています。

はやてちゃんと、シグナムと、ヴィータちゃんとシャマルとザフィ
ーラ。

みんな集まって、休日のお出かけなのです！

「リイン、そんなに急がなくてもケーキは逃げないぞ。」

「それでも、急がずにはられないのです！

行くですよ、ヴィータちゃん！」

全速力とまではいかないけど、みんなを引っ張ってがんばって飛ぶ
です！

それに呆れたように溜息を吐くヴィータちゃん。

でも、私がこんなに嬉しいのはケーキのためだけじゃないですよ？

「リイン、そんなに慌てるな。」

ケーキは逃げないぞ。」

「確かに、ケーキは逃げないかもしれないのです。

でも、楽しい時間はすぐに過ぎ去っていくです!!」

だから、みんな急ぐですよ!」

「リン…」

みんなと居るこの時間。

みんなで笑っているこの時間。

みんなで作る楽しい時間。

それが、一瞬でも長く続くように…

私たちは、あの事件の後話しあったのです。

でも、みんなの意見はまとまりませんでした。

ヴィータちゃんは絶対私を守るって言うてくれたけど、それが実際はとっても難しいということはみんな分かっているのです。

でも、だからと言ってそれ以上の最善は私たちでは見つからなかったのです。

1週間後。

次元世界の管理人が来るときにどうするか。

私がおとなしく力を差し出すのか、それとも力を差し出さずにとらわれるのか、戦って勝利を手にするか。

それか、守り抜くか。

最後に決めるのは、私自身。

それが、みんなで話し合った結果でした。

ある意味丸投げなんですけど…

「リイン、前もいうたけど、何があっても私たちは家族や。

それは、どんな絆より深い繋がりをもつとる。

たとえ離れることになっても、力を失うことになっても、それは変わらへん。

戦うのならリインの力になるし、悩むんなら相談に乗る。

どんな苦難も一緒なら乗り越えられる。

それが、家族つちゅうもんや。」

「そうですよ、リイン。私たちは家族なんですから、どんなに離れても心は一つです。」

それに、まだ離れるって決まったわけでもないですし、いざと言う時は力を捨てればまた会えるはずなんですから。」

シャルの言葉にしっかりと頷く他の面々。

それは、とっても頼もしくって、優しい笑顔。

まるで、心の奥底の不安を溶かしてくれるようなぬくもりの広がりに、私はやっぱり思ったのです。

…ああ、この人たちが私の家族でよかったと。

「みんな…、リインは… リインは…！」

「リイン、案ずるな。 私たちが必ずお前を守って見せる。

だから、お前は安心してみていればいい。」

「そうだぞ、リイン。 心配するだけ損だ！

それに、今度は私も居るしな！」

ザフィーラ…

ヴィータちゃん…

「ん、分かったです。 私もみんなの家族です。

だから、私はみんなを信じるですよ！」

「そうやで、リイン。 安心せえや。」

「えへへ…」

はやてちゃんが頭をなでてくれて、私はとっても幸せな気分になったのです。

さっきまでの焦りも、どこかに消えてなくなりました。

たとえばそれが一瞬の事だとしても、私は絶対にこの時間を忘れません。

それに、シャルマルが言ったようにまだお別れすると決まったわけじゃないんです。

はやてちゃんは力を渡してもいいと言ってくれた…

なら、例え力を失っても私は絶対に戻ってくるのです！

「まあ、でも無限に時間があるわけでもないし、そろそろ行こか。」

「はいです、はやてちゃん！」

私ははやてちゃんの肩に乗って、それを合図にみんな歩きだしたのです。

目指すはお菓子屋さんのケーキバイキング！

とても楽しい時間。

誰もが幸せな時。

こんな時間がずっと続いてほしいと、私は願わずにはいられないです。

「アリシアちゃん、どう？」

「うーん、やっぱり駄目。」

理論的には間違っていないんだけど、やっぱり生体のようにスムーズにはいかない。

それに、耐久度も低すぎるよ。」

研究室の一室。

私とアリシアちゃんとはある研究をしていました。

それは、リンカーコアの無い人でも使えるデバイスの研究。

私は仕事の合間の趣味に。

アリシアちゃんとはある目的のために。

しかし、ずいぶん長いこと研究しているけど、未だに成功する気配がありません。

最終目標の前の前段階でこれだから、一体いつになったら完成する

ことか…

「すずかちゃん、そろそろいったん休憩にしない？」

「うん、考えてても良いアイディアは見つかりそうにないし、お茶でも飲みながら考えよっか。」

「賛成！　じゃあ、私淹れてくるね！」

そう言って飛び出していくアリシアちゃんを私は見送りました。

でも、一体いつになったら完成するのかな？

魔力収集の全自動化と吸収力の強化、貯蔵量の増加は目標まであと少しと言ったところ。

そして、生体への魔力供給も標準並みには行えている。

でも、動作部を起動させると魔力の受け渡しに問題が出てなかなか進みません。

「魔力量が足りないなんてことはないし、通常デバイスと同じ処理は全部で来てるはず。」

後は、魔力を通した運行テストだけのはずなのに……」

先生がいれば助言をもらうんだけど、今は先生も別の研究で忙しいみたいだし、どうしようかな？

「すずかちゃん、帰ったよ」

「アリシアちゃん、お帰りなさい」

帰ってきたアリシアちゃんから、カップと紅茶を受け取ります。

この紅茶は先生が作ったもので、中庭の植物を使っているみたいですよ。

「それにしても、次はどうしようかな？」

「問題があるならそこをまず直さないと……でも、そこが分からないからね。」

「やっぱり、大きな問題点は動作部かな？」

「それか、流用した魔力タンク自体にデバイスと組み合わせられないところがあるとか？」

動作部なら、魔力タンクからの生体への流入機構が取り過ぎているか、デバイスへの流入を妨げる何かがあるはず。

逆に、魔力タンクならデバイスへ流入できない何らかの要因があるはず。

どちらにしても、魔力タンク↓デバイスの流入機構の間に問題があるのは魔力流の観測で分かってるから、後はどうにかするだけ。

動作部だけのテストでは成功したのになあ…

「どうだい、進んでいるかい？」

「あ、先生。」

そう思っていたら、丁度先生がきました。

これは、聞くチャンスかな？

「試作品はできたんだけど、動作部への魔力受け渡しが上手くいかなくて…」

「試行錯誤したんですが、私たちだけではどうにもなりませんでした。」

「ふむ… データを見せてもらってもいいかい？」

「はい」

先生がものすごいスピードでコンソールを叩いて、画面をスクロールしていきます。

私たちがじっくり見ても分からないのに、それだけで分かるのかな？

「ふむ、すずか君、この動作部の動作テストはどうやったんだい？」

「えっと、アリシアちゃんに魔力を流してもらって、動くか確認しました。」

「それでは動いたんだね？」

「はい。」

だから、動作部には問題が無いはずなんですが…

「じゃあ、魔力認識機構はどうしている？」

「あれは、普通のをそのまま流用したよ。」

「はい、徳に変えなければならぬところがあるとは思えなかったんで…」

「おそらく、そのあたりが原因じゃないかな？」

「え、そうなんですか？」

魔力認識機構は、初使用のときに所有者がデバイスの名前を呼ぶ声と魔力パターンで所有者登録をする場所です。

盗難防止とデバイスシステム起動の認証のための機関だと思ってたけど、何かあるのかな？

「デバイスは、基本精密機械だということは分かってるね？」

「はい。」

「自分たちで作ってるからね。」

「これらは、起動させるときに魔力パターンを割り出し、そのパターンの魔力をデバイス共通の固有パターンに変換する事で安定した性能を出しているんだ。」

要約すると、通常のデバイスの仕組みは『使用者の魔力↓流入機構↓魔力認識機構↓動作部』という流れをとっています。

そして、この『魔力認識機構』というのが、さらに『流入魔力選別フィルター↓魔力量調整部↓魔力波長パターン解析部↓魔力パターン調整部』という風に分けられることが多いんだそうです。

つまり、ここで『所有者の魔力』を『デバイスで使える魔力』に変換するという目的があるんです。

でも、最近は特定の人しか使えないデバイスにすることで、『流入魔力選別フィルター』と『魔力波長パターン解析部』の簡略化をしていて、スムーズに使えるようにしています。

ここで問題なのが、私たちは特定の人からの魔力じゃなくて、周りから集めたごちゃまぜの魔力を使っていました。

だから、最初に認識したアリシアちゃんの魔力じゃない魔力をすべてフィルターが除外しちゃって、ほとんど魔力が流れなかったみたいです。

「なるほど、でも、その場合はどんな魔力でも特定の魔力パターンに変換できるようにしないといけないってこと？」

「その通り。」

それか、タンクに集まる魔力を特定のパターンのものだけに切り替えるという手もあるね。…性能は落ちるけど。」

これは、結構難しいです…

正直、1種類の魔力だけを集めるなら、リンカーコアが無い人でも微弱の魔力を放っているので蓄えれば済む話です。

でも、リンカーコアが無い人の魔力生産は、ある人に比べて非常に少ないので、飛行魔法だけでもすぐにタンクが空になってしまいます。

逆に、無差別に集めれば変換機構がいちいち魔力を認証して変換方法を割り出していくことになって、不可能です。

「どうすればいいのかな？」

「それが、魔力タンクを作った私でも超えられない壁だ。

昔からリンカーコアの無い人でも使えるデバイスを研究してきたが、最初に魔力を集めておく機関が必要で、それが開発できないという壁に突き当たる。

そして、次に当たるのがその壁。

それさえ超えられればリンカーコアの無い人でも魔法の基礎を覚えれば簡単に魔法を使えるんだがね。」

苦笑いをする先生の顔は、ちょっと悔しそうでした。

これができるば… 無限の時を生きる先生を超えたことになるのかな？

まあ、先生の得意分野は生体関係だけど。

「まあ、がんばってくれ。」

そう言つて、先生は部屋から出て行きました。

「アリシアちゃん、どうする？」

「ま、ゆっくりやろうよ！ 先生のできなかったことなんだし、そう簡単にはきつとできないだろうから。」

「うん、そうだね。」

…でも、先生はちょっと意地悪です。

やったことがあるなら、最初から教えてくれればいいのに。

でも、最初から教えてもらったら研究の楽しみも無いのかな？

「それじゃ、研究再開！」

「うん、がんばろうね、アリシアちゃん！」

先生にもできなかったこと。

先生の超えられなかった壁。

私たちに超えられるかは分からないけど…

きっと何か方法はあると信じたいです。

第24話：準備は万端に、結果は最高に

「リン、あゝん」

「はいです。あゝん」

「おいしいか？」

「はいです、はやてちゃん！」

「そうか、なら、もっと食べなや」

「ありがとうございます！」

あれから3日。

決断の時まであと4日。

結局リンは何も決められていないようだな。

確かに、焦る必要はない。

しかし、時は待つてはくれない。

だから、準備は万端に、結果は最高に。

それが、古代ベルカから言われ続けた格言だ。

「ザフィーラ、また出かけるのか？」

「ああ、私がない間、主はやてを頼む。」

「分かった。」

二つ返事で見送ってくれるシグナム。

それに心の中で感謝しながら、主にすら話せていない秘密を悪いと思った。

もっとも、聞かれれば包み隠さず話すつもりだが。

「それでは、行ってくる。」

「ザフィーラ、頼むぞ」

転送用の魔法陣を出し、それにちよつとした術を書き加える。

それは、夜天の書から取り出したオリジナル魔法。

そして、唯一私の使える”根源魔法”

もう失ったはずの力を使って、私はとある場所へ飛んだ。

そして、着いた先は大きな洞窟。

しかし、それ以外はこの世界に存在しない。

世界の全てを構成する岩盤とそれに空いた迷宮。

それが、この世界の全て。

宇宙も無ければ海も無い。

川も無ければ山も無い。

あるのは岩と地下の迷宮ただそれだけ。

しかし、私は迷わずその中を歩きだした。

そして、とある境界線を越える。

『ベルカ式認証システム起動…』

ターゲット判別を開始… 終了

ようこそ、ザフィーラ様。 今回は何をお探しでしょうか？』

「彼についてのデータを。 前回に引き続き頼む。」

『かしこまりました。 表示します。』

どこからか聞こえる声。

洞窟なのに反響せず、しっかりと伝わる音。

それが、その声が普通の音でない事を知らせている。

私以外には聞こえない声。

遙か昔から私と共にあった声。

無機質で何の感情も持たない声だが、あの暗い闇の書の中にいた時は絶えずこの声が響いていた。

…深い闇の底からあなたの帰りを待っていますと。

『閲覧データのサーチ終了。』

これにて全データの表示まで残り12文献である事を申告します。』

「重要データはあったか？」

『いいえ。すでに閲覧した内容以上の情報は見つかりませんでした。』

「関連用語の検索は？」

『システムに定義された以上の内容は検索していません。リサーチには少なくとも10日は必要と推定』

「なら、念のため12文献を表示してくれ。此方でも確認する。」

『わかりました、表示します。』

声と共に目の前に現れる無数のパネル。

魔法で生み出されたそれは、半透明の向こう側が透けて見える魔法

技術のディスプレイだ。

それをスクロールして読んでいき、私は声の言っていたことに間違いがないか確認した。

「それでは、情報を確認する。

名前：次元世界の管理人

命名は古代ベルカの聖王によるもの。

真名もあつたが、現在では不明。

初出現は記録上新生ベルカ時代初期の次元震発生時。

救援の名目で前線に立ち、たった一人で巻き起こった大規模次元震を鎮めたとされる。

その後、約100年ごとに出現。 各時代の聖王と見^まえる。

幾度かの戦闘や争いもあり、共闘もある。

その間、関係者らしき者の出現も多数報告あり。

最終目撃記録はベル力消滅の10年前。

時の聖王と会い、口論の末に追い出される。

以上で間違いないか？」

『大筋ではその通りです。』

ただ、ザフィーラ様との戦闘の報告を入れれば敵対回数が非常に多い事と、目的が世界平和のためだという証言情報も特筆すべきかと。

『

声にこたえ、ようやくこれで情報を纏め終わったことにする。

次は戦闘データの検分だ。

「戦闘に関しては白亜の棒を使ったもの以外に記録はあったか？」

『飛行魔法、簡単な属性つき攻撃魔法のみです。次元震を鎮めた魔法については記録がありませんでした。』

あと、魔法が使えなくなる現象は多数報告があります。』

「対処法は依然見つからずか？」

『魔法を使わずに戦うとしか。』

「分かった。そのための私だ、どうにかしよう。」

『ご武運をお祈りします。』

予め記録された言葉から適切なものを選んで声は告げる。

それは、人間のような感情によるものではなく、ただのプログラム。
感情表現能力ならデバイスにも劣っているかもしれない。

だが、私も声も所詮は作り物という点では変わらないか。

「例の武装を借りても良いか？」

『どうぞ。 本来はあなた様が持つべきものです。』

「わかった。 ではお借りする。」

突如空間に現れた何かの棒の先端。

しっかりした柄に目の細かい… しかし、使いこまれてすでにボロボロになっている布が巻かれているもの。

それを掴み、私は空間から引き抜いた。

古代ベルカ式ストレージデバイス… 幾多の戦場を駆け巡り、かつての聖王と共に栄光を手にした戦斧。

このデバイスは強化魔法に一点特化した究極の接近戦武器。

しかし、過去に一度だけ彼の魔封じを断ち切った事のある、空間まで影響を与えるほどの力を秘めた唯一の武器。

本来は… 私の持つべきだったはずのものだ。

「ぬ、ちよつと重いな。」

しかし、作られた目的は当時の聖王のため。

私では扱いきるのは無理だ。

だが、それでも使いこなさなければ…

「4日で調整できると思うか？」

『3日もあれば可能かと。ですが、デバイスへの調整は能力制限がかかるので、自身の強化のみなら5日は最低でも必要と思われるます。』

「時間がない。3日で終わる方を頼む。」

『分かりました、訓練室への道を開きます。』

そして私の前に現れた魔法陣。

それに乗り込むと、私は訓練室へと飛ばされた。

「さて、練習するか。」

その後の3時間は戦斧の使い方を練習しただけなので割愛する。

所戻って八神家。

残り4日といえども、平和な日々を過ごしていた。

「ヴィータ、今日の仕事はどうなっている？」

「今もやってるけど、おわんねえ。もともと3人分だからな。」

「そうか、悪い。」

「気にすんな。こういう時はど〜んと任せてくれた方が、こっちが楽なんだよ。」

現状の仕事はシグナムとヴィータが全てをやっている。

それは、はやての所に回ってくる分もだ。

本人はやると言っていたが、無理やりヴィータが奪い取ったと言った方が正しいのか。

「はやてにはちょっとしたでも長くリインと一緒にいてほしいんだ。」

「まるで、もう会えないような口ぶりだな。」

「…まあ、気のせいなら良いんだけどな。」

それは、予感。

なにか嫌な感じがするが、その正体は分からない。

ただ、夜天の書を通して伝わってくる良くない感じ。

これは… リインの悲しみなのか？

そう思いながらも、ヴィータは何も言わない。

リインには自分で決めろと言ってしまったし、なによりこの悪い予感を感じているのはおそらくヴィータだけ。

だから、言い出した所でどう説明すればいいか分からない。

「さて、私は自分の分くらいはやつても良いよな。」

「執務間の仕事で分からないものはそっちにまとめてあるぞ。」

「そうか、それは助かる。」

二人で仕事をして、仕事を終わらせる。

2人が頑張ったのもあるが、はやてが1週間の有給休暇中なため、仕事量自体はそこまで多くない。

だから、いつもより明らかに早く終わったようだ。

「さて、私はなのはんと行ってくるけど、シグナムはまた護衛頼んでいいか？」

「ああ、任された。」

「じゃあ、頼むよ。」

鋼の伯爵グラーファイゼンと少々の手見上げを持って、ヴィータは飛び出しました。

目指すはなのはのいる本局。

自動車が使えないし飛行魔法も禁止されているため、徒歩で歩いてから公共交通機関に乗り込みます。

そして着いたのがここ、公共施設の魔術師育成所。

普段のなのはは教導関係でよくここにいる事が多いし、今日は昨日からアポをとってあるから居るはずだ。

そう思って、ヴィータは中に入った。

…が。

「いないだど？」

「はい、昨日から帰っておられないようなんです。」

「どこに行つたのか分かるか？」

「少々お待ちください… 管理局長、ヴィータ様がいらしていて、高町先生がどこに行かれたのか聞いておいらしますが…」

ええ、ええ、はい。わかりました、そうお伝えします。」

「それで？」

「はい、高町先生は昨日より第97管理世界へ里帰りに行かれていたとのことですよ。」

「第97管理世界…」

はやての出身世界で、なのはの出身世界でもある第97管理世界。

しかし…

「今日はアポを取ってあるんだが、何も聞いてないか？」

「本日は急用で来られないとの連絡があつたため、すいませんが、直接連絡を取っていただけますか？」

「ち、しょうがねえな。」

店から出て私は大通りに出た。

そして、なのはに連絡を入れる。

しかし…

「つながんねえ。海鳴にいるなら当たり前か？」

だが、妙に嫌な予感がする。

『シグナム…』

『どうした、ヴィータ？』

念話を使って家にいるシグナムに連絡を取る。

そして、急遽私は地球に戻る事にした。

何もないならそれでいい。

だが、万が一のなのはの身に何かあったら…

また私は自分を許せなくなる。

「そんなはずはねえ！」

全力で走って、転送ポートまで向かった。

申請に時間を食うだろうが、1秒でも早く、確実になのは所へ。

見えない不安に急かされながら、私は管理局の奥へと進んでいったのだった。

第24話：準備は万端に、結果は最高に（後書き）

かなり短いですが、すいません。

区切り悪いんでここで投降。

ここ数話は各個人の別々のストーリーに分割して書きましたが、これからくつつけていくつもりです。

もういくつかは繋げてるけどね。

それに、いっぱい伏線でしたが、いくつかの伏線の先はもう見当ついてる人もいるかもしれません。が、ま、これからもっと増やす予定だけど。

あと、ヴォルケンスであまり出番を出していないあの方はどうしようか？

第25話：（前書き）

注意：書きかけ

小タイトルを入れたら完成です。

思いの他、時間がかかっています。

ただ単に執筆時間が細切れなのもあるけど、ネタ蒐集と構想を練るの、あとは、単純にこういう平凡な時間をゆっくり書くのが苦手なため…

すでに書き直しも数回、なかなか納得がいく展開に持ち込めず…

この後に大きくかわってくる回（具体的にはどっちにしようか迷っていた2つのルートを決めかねている）なので、もうすこし慎重に書きたいと思います。

作者的には… … この章を完成させてから次に進みたい。

でも、このまま書いていくと物足りない話になりそうで怖い…

そんな、葛藤の中。

でも、書き足すにしてももうすでに作者の手に負える範囲を超えているという問題も…

第25話：

第97管理世界

私やなのはにとっては故郷となる世界に、私達はいました。

休暇を利用してここに来たのは、アリサの事件への関与の確認。

念のためだが、きっと大丈夫。

この時の私はそう樂觀していました。

「フェイトちゃん、そろそろだっけ？」

「うん、さすが迎えに来てくれるはずだよ。」

正確には、すずかの家のメイドさんが運転する車がだが。

やっぱりお金持ちは違うね。

自分で稼いで暮らすようになって、お金の大切さなんかは身にしみて分かるものがあります。

あと、それより覚えるのが大変だったのがお金の使い方。

小学生や中学生よりは大金を。

でも、使い過ぎないように注意してやりくりするのは、始めた頃は大変でした。

今ではそれも昔の話だけど。

「時間は大丈夫？」

「うん、こないだ有給休暇使ってはやてちゃんの手伝いしてたのがばれて、しっかり休みなさいって先輩に言われて追い出されちゃった。」

「なのはは働き過ぎなんだよ。」

ちゃんと休まないと身体に悪いよ。」

「にやはは、一応睡眠時間はきちんととるようにはしてるよ。」

「それは最低ライン。　こんど、どっかに2人で遊びにいこ。」

「うん、それに、今回もほとんど里帰り見たな物だしね。」

今日はなのはの実家である翠屋にも行く予定だから、家族団欒を楽しんでくれればいいけど…

「でも、帰ったらこの分頑張らないと！」

「はあゝ。」

最近のなのはは休む事をしないのが玉に傷かな。

私も十分忙しいけど、休暇は取るようにしている分なのはよりはまし…　だよね？

「家族サービスも仕事のうちだよ。」

「ヴィヴィオは学校あるし、私とヴィヴィオの休みが被る事って少ないから。」

なのはの教習は仕事の休みに来る人を対象にする物もあります。

だから、土日は結構な頻度で仕事をしている事が多いみたいです。

教員は大変なんだね。

前は平日でもヴィヴィオと出かけていたけど、それも最近はめっきり。

休暇の過ごし方を今度教えてあげないと。

そんな他愛のない話をしていると、遠くから特徴的な黒い車が来ました。

如何にも高そうなその車は、車内が広い分縦長の大きな車になっています。

その車の値段もすごいけど、それをぶつけもせずに運転できるメイドさんも実は結構すごかったり。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ひさしぶり！」

「すずかちゃん、久しぶり〜」

「急に押しかけちゃってごめんね。」

久しぶりに会ったすずかはずいぶん忙しいのか、若干やつれたような印象を受けます。

でも、声は元気だから大丈夫なのかな？

「大丈夫、気にしないで。」

でも、なのはちゃんも来たのは驚きかな。」

「うん。私も休暇もらえたから、ついでに来たの。」

後で翠屋に顔出すから、里帰りのついでかな。」

「じゃあ、先に翠屋よってからお買い物に行く？」

「そうしてもらえると助かる。」

「じゃあ、それで決まりね。」

「時間もあるし、早く行こっか。」

私達はすずかの車に乗り込んでその場を後にしました。

小学生の時は何気なく乗っていたけど、この車結構高いからちょっと緊張します。

でも、その分内装にもこだわっていて、かわいらしい小物や軽食のセットなんかもあるのはうれしいです。

「それで、アリサは何時くらいになりそう？」

「たしか、7時くらいには切り上げて帰ってくるらしいよ。

場所は私の家だけど、いいかな？」

「うん、問題ないよ。また猫たちに会えるのが楽しみだし。」

すずかの家は猫屋敷と言われるほどたくさんの猫を飼っています。

毎年子供が生まれて増えていくのに、未だに手放した子がいないというのがすごい所。

近所から糞や鳴き声の苦情が来そうなものだけど、それも無いのはただ単に屋敷が広くて猫がその中だけで満足しているのか、近所との交友が良いのかは猫たち本人に聞いてみないと分かりません。

「そいえば、ファイトちゃんの所のアルフは元気？」

「うん。もともと使い魔だし、私なんかより断然自由に生きてるから。」

「たまに私の方が心配されるくらいだよ。」

「フエイトちゃんもなのはちゃんも、体調崩す前にキッチンと休まないダメだよ？」

「私はきちんと休んでるけど、問題はなのは……」

「え、私？」

驚いた顔をするのはに、思わずため息が漏れます。

これだけ周りから見れば心配されているのに、当の本人が気にしてないのは如何なものだろう？

それがなのはの良い所でもあり、悪い所でもあるのは明白だけど、それでもやっぱり友達としては心配に思っています。

「なのはちゃん、休むのも仕事のうちだよ？」

「うーん、ほんとに休んでるんだけどなあ。まあ、今の事件が片付いたらまとまった休暇取るから大丈夫だよ。」

だから心配しないで、すずかちゃん、フエイトちゃん。」

「約束だからね、なのは。」

「うん。」

そうして話しているうちにも車はどんどん進んでいきます。

目指すは喫茶店『翠屋』

なのはの実家です。

車の中ではお茶やお菓子をつまみながらあれこれと話が進みます。

最近のちょっとした出来事やはやてちゃんの事、私達の仕事の話。

魔法の事を話せるのは、すずかちゃんの家のメイドさんが口が堅いからかな。

第25話：（後書き）

めっちゃ更新日時が明く…

重要な所に入るんでゆつくり書きたいけど、GWで余裕ができたの
今日だけってどれだけ><

でも、見てくださってる方がいるのは驚き半分の嬉しさ2倍…
ありがとうございます^^

と言うわけで、ほんのちよつとだけ更新…
次の更新は… 夏季休暇中になりそうな予感。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4215q/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS 次元世界の管理人

2011年7月29日11時58分発行